

北辰會雜誌

第七十四號

大正四年十二月

第四高等學校北辰會

敬奉祝御大典

内 容

論 說

HANNIBALの出現と其時代
精神の肉體に及ぶ影響

創 作

兄弟
浮びゆく映像
山東旅行記
アルプス縦走記
友の死をさいてから
くれゆくあきのある日

翻 譯

ある印象(ペイトマン)
道行く二人(トルストイ)
農夫と旅人(トルストイ)
猫(ハーン)

詩 歌

前書付
寶珠のゆくへ
愛慕抄
秋風遍路
はつたび
狂人の歌
われ

部 雑 報 報

三 須 南 海
銀 林 生
地 上 五 尺
塚 本 貞 二
雪 日 松 生
南 越 路 伊 平
越 峨 伊 平
嵯 峨 伊 平

芳 繞 石
吉 澤 雄
米 澤 菊 二
繞 田 不 石
多 田 不 石
福 光 正 次
別 久 谷 清
相 川 孤 歌
露 杉 之 階
高 杉 之 階

一〇二
一〇三
一〇七
一〇八
一〇九
一一〇
一一一
一一二
一一三
一一四
一一五
一一六
一一七
一一八
一一九
一二〇
一二一
一二二
一二三
一二四
一二五
一二六
一二七
一二八
一二九
一三〇
一三一
一三二
一三三
一三四
一三五
一三六
一三七

論 説

HANNIBALの出現と其時代——三 須 南 海

西班牙陣頭秋漸やく老ゆ。ピレネー嵐うら寒く。遙か北の方妖雲羃々、名もなき鳥も低くどぶ。身は、これ祖國の存亡を擔ふとも、共に語るのやからなし。さはれ立たむ哉吾れ一人。孤影淡く路遠し。救はむ哉斯の國を。姑息偷安の小人等必ず事をあやまたむ。百鍊の腕に劍を按じて燃ゆる心と眼とを天の一角に集中す。ア、雄々しくも又沈痛の偉人ハンニバル。

I. ROME と CARTHAGE

萬物に定主なく、世界又焉んぞ常王あらむ。唯よく自から努力するものにして始めて自己の所在を占め得べし。史を遡ること二千年、遠く思を西に馳せ幾多國民の興亡存敗の跡を訪ふの時、藻鹽草濃き大西洋に棹さしけむフェニキア人のいさほしが、戦へば勝ち攻むれば必ず抜きし古ローマ武士の勇ましさと相映じて又なき興味を喚起せしむ。

地中海の東隅シリア(Syria)の磯に程近きリバン(Libanon)の山緑なし、往き交ふ人も笑み洩らす今を盛りのチレ(Tyre)の港を飄然去りし一帆船は、夕日さすこがねの波を、ひたすがに西の

方へと船出しぬ。チレ市の王女 Dido を平和通商の女神と仰ぎ海上雄飛の希望をやごして、來れる所はこれ何處？今佛領チュニス(Tunis)となりけむ古の地。斯くて彼等は此處に新なるフェニキア殖民地 CARTHAGO を建設せり。

これ Virgil の記する所もさより傳説に過すも雖もカルタゴ・フェニキアの殖民地の一なりし事は明かなり

爾來春風秋雨幾百年、彼等殖民が不斷の努力と忍耐とは會、此の水深く地の利を得たる港と相俟つて其繁榮年と共に増し遂に母市チレがアッシリア(Assyria)帝國に亡さるゝに及んでフェニキア殖民地の覇となりぬ。其領有はシシリア(Sicilia)サルデニア(Sardinia)コルシカ(Corsica)ミノルカ(Minorca)諸島、アフリカ北岸、スペイン南部に廣がり、地中海の海上權は殆んどカルタゴの掌中に歸したり。沖行く船の眞帆片帆、何れか御國の旗印ならざらむや。さるにても誰か知らむ、平和のために建てられし斯の國が己の記録を充たする悲惨なる戰の哀史を以てせんとは。

* * *

チベル(Tiber)の河畔に生立ちてマース(Mas)の神を稱へたるローマ國民は奇しき運命のロムルス(Romulus)に始まりて、漸やく自己の眞價を發揮し來れり。

白長城^{アルプス}下の民は、日夜來り侵す北狄蠻人のため常に平和を脅されつゝありたれば之が防備の必要上遙か北方に要塞を築きて以て武人たる貴族をして其入寇を支へしむ、此地ぞ、これ艦がては全歐洲の霸權を握りて東西の朝貢を専らにし南北の蠻民を使役せし帝都ローマの濫觴なりけり。然れども其當時は斯の如く四圍の強大なる外敵の絶えざる壓迫を受けしか故に苟くも斯國民の生

存を可能ならしめんとせば勢ひ之れと對抗して而も之れに勝たざるべからざりき。彼カルタゴ人が富を追ひつゝあるの時、ローマ人は先づ自己を考へざるべからず、彼等は如何にして富むべきかの問題を解決する以前に之よりも更に痛切なる生存の法を極めざるべからず。強大なる力に屈すればいざ知らず、之れに勝らむとせば更に強大の力を要す、かくて彼等の腦中を往來するものはたゞ戰と勝利とのみ、白湖^{バイカル}湖畔の月の夜も碧濃きチレニアン(Tyrrheni)の海の色も彼等の心絃には何等の響をも與へず、風流も海洋も彼等の解する所とはならざりき。彼等は凡て武人なり、戰は即ちその避くべからざる所、ローマ人が戰を生命とせる又止むを得ざる所なり。然るに一面不思議にも彼等は其貴族の名の多くが示す如く農業に關係深き國民なりき。されば狹少なる半島に國を建てながら尙且つアペニン(Apenines)の山々蟠まる間に尺地寸土を耕したり。而も人口の増加と其供給とは漸次反比をなし來りしにより遂に國外殊にシシリアより多額の穀物を輸入しつつありしも尙其の缺乏を感じる事甚しかりき。然れども如何せん、北部ポー(Po)川の廣大なる沃野は徒らにガウル(Gaul)の占むる所、南の方、花笑ふカンパニア(Campania)の春原はサムニテ(Samnite)人の有なりしを。こゝに於てか穀物を得んとの念は耕地を求むるの心となり勢ひ領土的野心を起さしむるに至れり。斯くて國民は建國以來内に外に能ふる限りの戰をして其都度國力を増進し遂に西曆紀元前二七五年 Epirus 王 Pyrrhos を南伊太利の野より追ふて以來はたゞ北部僅かにガウル人のある外、長靴半島内又敵影を見ず國威隆々旭日昇天の勢あり。彼等今や漸やく地中海の無意義にあらざるを知ると共に附近の島嶼就中シシリアの貴重なるに注目す、然れども

既に當時地中海を自國の湖沼とせるカルタゴは強大なる而も唯一の敵國として彼等の前面に展開せられたり。

II. 重大なる意義

シシリアへ!! ローマ人に響く此聲は又カルタゴ人にとりても同様の感に打たれけむ。夫れ此島は地中海を東西に分ちて其中央に位し軍事上、交通上卓越せる所なるに其土肥沃にして常に黄金の波を漂はす。されば古より既に其東部はギリシア殖民地となり西北部は海國フェニキアの有する所なりしが中頃カルタゴが母國に代りて覇となるに及びシシリアはギリシア、カルタゴ兩勢力を代表するに至れり、業にしてタレンツム(Tarentum)の戦(前二八二)起るや、その希領シラクサ(Syracuse)の僭主 Agathokles は彼のピロスの來援を以てカルタゴの勢力を全然驅逐し去らむとす。時にローマは伊太利の地に於てピロス軍のためいたく敗れたると、永く羨望したりシシリアの島に對し發言權を得んが爲遂に驚くべし、彼カルタゴと同盟せしなり。ローマ、カルタゴ攻守同盟!!之れ何ぞ吾人を驚かすの甚しき。史家 Polybius の説に依れば紀元前五〇九年以來兩度の折衝ありしと雖も皆消極的狹義的の經濟協約に過ぎず未だ嘗て斯の如き廣義的積極的のものあらざりしなり。ラテン(Latin)民族の宗ローマがフェニキア(Phoenicia)民族の覇カルタゴと共同動作を取りて以てギリシャ(Greece)民族を率ゆるピロスに當りし一事は之少くとも世界史上觀過すべからざる一大事件たらざるべからず。若し夫れ當時果して民族戰なるものありとせば古代史の殆んど全部を充せる此三大優秀民族の爭鬭こそ誠に空前の事實たるを疑はず。而して此時ローマは著しく

カルタゴに讓步せるを思へば、或は當時ローマの勢力は遙かにカルタゴの下位にありたるを知るに庶幾からむか。されど計らざりき。此同盟の結果はギリシャ民族をして將來指を西に染めしめざるに至らしめしも彼カルタゴに取りては不幸なりし前兆ならむとは。彼は畢竟敵のために己の小敵を攘ひ、却つて大なる不利を得たるなり、されば吾人が望む如き此同盟の存續は到底期し得ざる所にして、彼のピルスが追はれてシシリアを去らむとするや「何たる好戰場を彼等二國のために殘せしよ」と嘆じけむ其言は不幸にも適中して其後數ならざるに兩雄は遂に並び立たず、しばしの和親は束の間の、止む者もなき争ひに最後の雌雄を決せむと、いよいよ暗路に入りける二國の運ぞ是非もなき。

西曆紀元前二六四年、事は再びシシリアに關して遂に第一回のホエニ(Punic)戰役を起しぬ。之れ然しなから兩國民の眞に止むに止まれざる勢の然らしむる所又何ともし難きなり、ローマは國家國民の存立上缺くべからざる穀物の供給地を得んとするに當りて會、其汪溢せる新興の元氣を合して南下せむとするに反しカルタゴ人は既に海上王たるの全威を藉りて其生命とする貿易市場を南伊太利の沿岸地方に廣めむとす。農本主義と通商主義との争は之やがて又當時第一流の陸軍國と海軍國との勝敗を決せむとするものなり。一面より言へば商戰を以て國運の發展を計らむとする英國流と實戰の争奪によりて覇たらむとする獨乙式との衝突史なり。若し夫れ之を東方民族と西方民族との勢力争奪史上より觀れば當にその第三回の決戰に屬するを知らむ。東方ベルシアは西方アッシリアの覇を粉碎しエジプト(Egypt)マケドニア(Macedonia)を脚下に壓して東民

族のために空前の氣を吐けり。然れども後年歴山の來り戰ふに及びて徒らにチギリス(Tigris)河畔風寒きのみ。今やカルタゴ、ローマの二國は各東西の勢力を代表して輸贏を決せざるべからざるに至れり。され、甚大の注意を拂はざるべからざるは其民族文明上にして、吾人は其結果の極めて痛切なるを知る。ラテン文明とフェニキア文明の優劣は此戰によりて定めらるゝ事なしとするも尙ほ此戰の結果如何は以て兩文明の盛衰を卜するに足るべし。吾人は既に其結果を知る、かかる故に其然るを然りとて觀るも雖も若しローマにして亡びカルタゴに其覇を許したりとせば世界史は果して如何なる變化を來せしならむ。フェニキア文明は、より更に大なる速度を以て歐洲を風靡し、彼をして又 Romanisation の名をならしめざりしなるべし。其偉大なる海外發展力はいく北海沿岸諸國否東洋方面をさへ今少し早く世界史上に活躍せしめしならむ、アメリカ發見も、アフリカ開國も恐らく上代に於て既になさるべく、ケーザル、アウグスツスの雄圖又影なけむ、否々古代の後半及び中世史の殆んど全部は改造せられてローマ法王も羅馬法典も何等の意義を有せざるに至るべし。さはさりながらカルタゴは所詮亡びたるを如何にせむ。鳥の將に死なんとするや其聲悲し、大なる國家の將に倒れんとするや其狀更に悲しきものあり。ローマは遂に勝利を得たり然れども新興國が覇を稱へんとせば常に乾坤一擲の決戰を敢てせざるべからざるは歴史の常に示す所なり。彼のサラセン帝國の覆滅は Tours の野に於て Carolingian 王朝を起したり。ナポレオンの威力はワテルローの露と消え、神聖羅馬帝國の旌旗又サドワの役に蹤跡せられて徒らにプロイセンの勃興を促せしに非ずや。

然り而して前後三回のボエニ役、これ兩國の死力を盡して争ひし所、優越を得ずんばた、破滅あるのみ。而も彼は之に依りて伊太利の局限せられたる範圍より出て、遂に政治的世界の偉大な壇上に立ち、此は永遠の悲哀を地中海の波に訴へしものなり。

III. 父ハミルカル

前後二十三年を費せし第一回ボエニ役に於て吾人は不思議なる現象を得たり、即ち海上に絶對の權を有するカルタゴ海軍は殆ど無勢力に等しきローマの爲に破られ、陸の猛者たるベラ、ローマの精銳は至る所の戰場に於て不首尾たりし事なり。シシリアの我領急を告ぐるや當時カルタゴに其人ありと言はれし剛毅果斷の稻妻將軍彼ハミルカル(HAMILCAR)は急遽一隊を率ひて來り、寡よく衆に當り遂に北岸に近き Hereta の要地に四萬のローマ軍を一撃の下に粉碎して又立つ能はざらしめたり。又一方スバルタの客將 Xanthippus 又カルタゴの爲にアフリカに大勝し Consul. Regulus 遂に捕へらるゝに至りしなり。然るに思ひ設けざりしローマの急速なる艦隊建造と熱心なる漕手の訓練とは Aegate 群島(シシリア島の真西端に近し)附近の海戰に現はれて將 Catulus の名をなさしめぬ。然し乍らローマ人が嘗てビルスの入寇に處したると同一の新しき努力をなせし賜にして富豪の如きは各々軍艦一隻を作りて献し中流以下の國民と雖も合資を以て之が建造を急ぎ國を擧げて外敵に對せしが爲のみ。此海戰の結果は直ちにハミルカルの行動に大なる障礙を惹き起せしも彼はよく内に庸兵の給金問題に關する不平を鎮め本國との交通遮斷せられながらもなほ敢て六ヶ年の長きに渡りて外敵に當り孤軍奮闘大に努めたり、然れども大勢既に我に非にして敵の勸降

日に至る。彼頑として之に應せず遂に本國が敵に屈せし後自から堂々軍を率ひて凱旋し祖國のために萬丈の氣を吐けり。而も之ぞ彼が永遠にシシリアを去るの縁にして、たゞ徒らにエトナ(Etna)の山、煙濃く、來し方の波間低く、海鷗の漂ふのみなるを見ては鬼をもひじく猛將も轉々回顧の涙に咽びけむ。本國は遂にローマの該島に於ける優越なる權を認めざるべからざるに至れり。

外は國威を失墜しローマの制肘に甘じ、内は長年月の戦に廣大なる富をすら殆んど盡したり、給料により辛じて服せる庸兵等は其の支拂の長く停滯するや都大路を群り歩いて不穩の形勢ありしが時を得て愈々反旗を上げたり。彼等は先づカルタゴの忠實なる同盟市 カルタゴの稍々
西海岸の高き港 Tucca を包圍し相互の交通を絶ち勢頗る盛なれば再三の征討も其効を奏せず。國論遂にハミルカルを立たしむるに及びて即ウチカの圍を解きて之を救ふを得たり。然れども賊勢愈増大してアフリカ北岸の都市多く叛きて都カルタゴ又危し。彼は當時海將 Hanno と不和にして海陸の行動常に一致を缺きたりしが今や此の危急の秋に際し徒らに私情を以て公義を没するを不可とし潔よく彼と和解して以て共に祖國の難に赴かんとせり、彼が心事の高潔なる又賞すべきに非ずや、かくて市民の苟くも武器を持ち得るものは悉く武裝せしめて奮闘せしかば漸やく三年四ヶ月の後賊徒を屠り國基始めて安きを得たり。こゝに於てか彼の名聲は愈高くなりたるも決して之を以て誇とするが如き事なかりき。

此の間に於て事もがなと鷹の眼もて見つゝありしローマは不思議にも沈黙を守り居たりと思ひきや、將に此内亂の結末を告げむとする時意外の提議を敢てしたり。當月 Gardinia に駐屯せるカ

ルタゴ庸兵は本國の内亂に乘じ獨立して全島を占領せしが今や其鎮定せられしを聞き急に自己の立場の不安を感じ遂に援をローマに求む。待ちたる機會ぞ來れりと直ちに之を諾すると共にカルタゴに向つて此島と之れに隣れる Corsica との讓與を乞ふの厚顔を敢てせしのみか剩へ、理由なくして一二〇〇 Talent の支拂をすら強要せり。其高慢にして貪慾又禮を知らざるに驚かざるを得ず、局外者すら尙且つ憤怒すべし況んやカルタゴ國民殊にハミルカルに於てをや。されど如何にせむ、當時此要求に反抗するには餘りに無力なりき。既にシシリアの放棄をさへ殘念とせる彼の、激怒、憎惡、復讐の焰は祖國を愛するの念と合して炎々、あらゆるものを焼き盡さすむば止まさらむとす。汝の名ローマよ、我は汝と共に生くるものに非ず、我汝を亡さすむは汝は我を倒すべし、否汝を覆滅せしめすむは斯國を遂に如何せむ。無限の悲痛を胸に秘し敵國討滅の大願を成就せしめむとして之が爲には殆んど寢食を忘れたり。兵力と財源とは國家の最も痛切に感ずる所なれば先づ此根本問題を解決せざるべからず。然るに國內儉安の輩のみ多くして又遠大の策を知るものなし。時に或は彼を言ふものと雖も武斷遂に國を危からしめむとなす。形勢既に斯の如なるに一方ローマの我を威嚇する事頻りなり、蓋し敵は成るべく速に我を討つを利とし我は少くとも勢力を挽回する迄戦はざるを可とす、然り復讐は成さるべからず而も未だ時に非るを如何せむ。忍ぶべからざるを忍び、遂に意を決してスペインに航し以て徐ろに自己の抱負を實現せむとす、而も敵に覺られざらむが爲に此計畫は之を實行する迄は國人にすら口外せず。周到なる用意により彼は常任司令官の名に於て秘かに軍隊を動員し西方アフリカ人の征服を完成するが爲と宣言し以

て敵を欺き得たり、紀元前三五年の末つ方北風寒き荒波に、人事を盡して我運命を試めさむと、一族郎黨及訓練を重ねたる本國軍の一部を引具して岩鼻聳つ Gibraltar の近くに上陸す。俱に來れる者は誰々ぞ。女婿 Hasdrubal 三子 Hannibal, Hasdrubal, Mago. 部將 Gisco, Maharbal, Hasdrubal 等の面々。嗚呼これぞローマに取りては獅子を野に放ち虎に嶋を與へしものにして陰然恐るべき敵國を作らしめしもの也。之より先カルタゴ人は既に南スペインに於て殖民をなし居たりしものにして古き商港 Gades (フェニキア人に依りて開かれしもの今の Cadix) の如きは既に我と同盟關係にありき。ハミルカル今や此地に一大帝國を建設し以て祖國の失ひし所を償ひ、自己の意志に従ひて精銳なる軍隊を創建せむとす。此意味に於て九年の間彼はかゝる蠻地に在りて或は西に或は北に奔走して土人の征討に従事し席暖まるに暇なし。之も國のため人のため、ひたすら領土の擴張と酋長等の歸服とに勉めたり。然れども天運非なるか九年の終りに此老將軍ハミカルは遂に戦場の露と消へ去りぬ。之れ豈に彼の心ならむや。創業未だ半ならずして我先づ逝き、我子未だ少くして前途險難。而も見すや、祖國カルタゴの勢又昔日の感なきを。快々の情を天外に趨するとも之を如何せむや。蠻夷瘴癘の間に骨を暴すとも尙は故國を思ふ彼が衷慮悼しからずや。されば彼の貴き體は最早なしと雖も彼の精神は嚴然として天地に磅礴す。彼の偉業を完成すべき人はあり、英靈庶幾はくば安せよ。

IV. 子ハンニバル

女婿 HASDRUBAL 即ち彼の素志を繼ぎて前途を開拓す。彼は從來ハミルカルの部下として常

に其帷幄に列し戦場に立ち以て岳父の名を耻かしめざりしが、しかも彼の長ずる所は寧ろ政治家たるにあり。其快活なる態度と巧妙なる政策とは以て土民及酋長等の服心を集むるに成功したり、されば其の外交によりて得し領土は遙かに武力によりてよりも多かりき。此時に當りて會カルタゴ第一の銀山發見せられ其產額頗る多し。而して又此地に近き海岸に絶好の良港あり。彼は此地を以て殖民地の首府と定め名づけて Carthago Nova といふ、蓋し新カルタゴの基礎殆んど定まりたればなり。噫、創業は易く守成は難しとか。彼よく之を知れり。知りて而してよく之を戒め先主の遺業を受けて毫も失墜せしめず更に百尺竿頭一步を進めんとせしが又々怨重なる彼敵國の抗議に會へり。先にローマは第一回ポエニ戰に辛じて勝を制し得たりといへども強敵恐るべしと通常に眼を開き耳を聳て、カルタゴの一舉一動を聞知し居たりしが西班牙に於ける勢力の日に隆々たるを見ては愈々不安に襲はれ、速に其未だ成らざるに先ちて之を縮むるに若かずと思ひ居たり。恰もよし、首都カルタゴノバに近き海岸のギリシア殖民地 Seguntum も亦自己の形勢不利を感じし時なればローマに使して同盟を求む。ローマは即ち天我に幸せるの好機となし直ちに Senate の決議を以てハスドルバルに干渉を開始し遂に北の方 Ebro 川を境とし之より一步たりとも出づるに於ては敵對行動と認る旨を通告す。ハスドルバルは切齒扼腕、怒髮將に天を衝かむとするものありしが彼にも理性あり未だ立つべき時に非ずと信じたるが故に無念の涙を振つて止むなく之を承認す。抑も此協定はサグンツムに關して起りしものなるに此新國境より五十哩も以南に横はれるサグンツム其れ自身は此協定によりて何等の安全をも保證されざりき。其領は全然カルタゴ勢

の中央に孤立せざるべからず。これ要するにローマが單に機に乗じて己のみを利せむとせしものにして却つて二者の間に事端を開かしめカルタゴが手を東に延はさるるに先ち北伊太利^ポ。川流域の Gaul 人を戡定し終らむと企てしものなり。其狡猾亦惡むべきものあり。ハスドルバルは方向を轉じて西方蠻民の征服に従ひしが不幸嘗て己が罰したる奴隸の復讐的暗殺に會ひて又立たず。あたは北邨一片の煙と化して蕭々之感を深うせしめたり。

其八ヶ年の經營か如何に本國の富と力を増せしか。内は即ち西班牙政府の基礎を確立し外は國域を廣めて威を振ふ。さるにても今やこゝにカルタゴが嘗て生みし最大の偉人あらはれぬ。

HANNIBAL!! HANNIBAL!! 然り偉人 HANNIBAL!!! ア、彼ぞ、乃父も斃れ岳父又逝きし後を受け禍なす仇敵の覆滅と祖國の安泰とを己の任として立ちしは。雄々しき二十有六の偉丈夫!! 想起す十七年の昔。彼は其父ハミルカルが西班牙に赴かむとすを見て頻りに門出を共にせむことを願ふ。即ち父は征途を祈る聖壇上に此九歳の我子を伴ひ行きて其手を犠牲の上に置かしめて吾等が不倶戴天の仇敵は正に彼方の羅馬なれと誓はしむ。アハレ房なす髪の我がおさなごが、小さき兩手を差し上げて獨り捧ぐる眞心を讀みつゝ父は、落す涙に胸せかれ、並み居る猛者もせき來る涙を押へ兼ね、面をばそむけ泣きたりけむ、聞く、獅子は三日にして子を百丈の谷に落して之を試むと又梅檀は二葉より香ばしとかや。ア、此父にして此子あり、其子にして其父あり。延元々年春五月櫻井驛頭楠公父子の訣別を思ひ來るの時、誰か血あり涙あるもの泣かざらむや。木の下蔭に馬をどめ假の蓆に對座して、我と我が子に振り落つる、涙の中の櫻花。嗚呼彼はカル

タゴ武士の高節にして、此は吾朝無二の忠烈なり、時は千載を隔つといへども前聖後聖其の揆を一にして心は同じ赤誠を御國の爲に盡しけむ史上の花は貴としや。

さはれハンニバルは遂に立てり、乃父の勇と岳父の才とを受け之を打して一九とし而も其風手は嚴然父に髣髴たり。夫れ血より血に傳へ、心より心に刻みし不朽の大精神は、あらゆる論議を超越して嚴と威とを添へ加ふ。其部下を愛する事子の如く人を遇する、尙ほ友に對するが如し。嘗て先主の下にありて日夜身命を惜まざりし將卒は恰もハミルカルの再來せしか如く隨喜の涙をこぼしたり。彼は幼少より武人としての教育を積み撃劒、乘馬に長じ又卓越せるランナーなりき其體格は頑健にして而も敏捷。饑渴、寒暑に處すること、なほ恒の如く、精力又衆に秀れ、過勞と思はるゝ事も彼にとりては毫も身心の疲勞を感じせず、睡眠の如きは事務の許す範圍内に於てし敢て時と所とを問はざりき。されば人々は往々彼が寒夜たゞ兵士の外套を被りて樹下にまごろみつゝあるを見し事ありしと。若し夫れ服裝に關しては彼全く無頓着にして、贅澤は彼の最も嫌ふ所、その銀山より出づる莫大なる富の如きは多く之を本國に送りて以て財政の窮を救はむとせり。彼斯の如く醒むれば忽ち猛者の如く兵を訓練し、九夏三伏暑き日も嚴冬素雪寒き日も敢て意とする所にあらず、生年以來殆んど其大部分を陣中の生活に費せしにかゝはらず、其人格の修養に至りては當代フェニキア第一流の素養ありしなり。彼が統率する所の軍隊には又ミチア人あり、リビア人あり、イベリア、バリアル、リグリア等あらゆる種屬の土人を包含せり、しかも彼等は齊しく仰ぎて以て己の主となす、これ固より彼が將たるの然らしむる所とはいへ又彼の人格の崇高に

あらざるよりは、いかてか之をよくせむや。高潔なる其心緒と義に勇む此の性格とは愈其面目を發揮し彼と接する凡ての人をして其人格の感化に打たれ自から心服せしめむば止まざるむとす。武人もと文華なきもの、然るに彼はその友なるスバルタ人 (Sailus of Sparta) を指導としてよくギリシア文を作り之が國際文書をも草し得るに至れり。その司令官となりて後も又閑日月を友と談じ文藻に親みたり。後年急命に接して南伊を去らむとするやギリシア文にて過去の經歷を銅板に刻しルチウムの地深く埋めしめたりと。吾人はローマの殘虐と、三代の素去正に成らむとして成らず畢生の努力も亦淡き弦月に終らむとする彼の胸中とを比する時言ふべからざる感慨に打たれざるを得ず。

劍を持ちて立たる彼は自から西班牙内部なる山岳重疊の蠻地を征す。之土蠻を平定して以て根據地の堅固安全を計り而して後徐ろにローマ攻撃の策を行はんとするにあり。即ち西の方 *Castille* (*New Castle*) を略し又都 *Helmantica* (*Salamanca*) を陥れたれば附近の士人來り降る。斯くて殖民地は愈廣大となり紀元前二二〇年には *Ebro* 川以南の地は悉くその領土となり然らざるものも彼と同盟を結ぶに至り、恩威並ひ行はれイベリア半島内又靡かぬ草もなかりけり。たゞ獨り頑として款を通せざるものをサグンツムとす。此市抑も西班牙首府の近くにありて而も常にローマの前哨たるの役をなしハンニバルの行動を事毎に妨害するか故に勢ひ之を陥れずむばカルタゴノバは、ために脅かさるべし。此時に當りて幸ひにサグンツムは其附近の我領と戦ひつゝありたれば之に乗じて二一九年の春、彼れは之を包圍す。同市の住民の一致的防禦は案外に強し。彼には十五萬

の大勢を有するの制ありしが大事の前の小事徒らに、こゝに士卒を失ふは、その取らざる所なれば性急をさけ包圍八ヶ月の後漸く之を陥落せしむ。之より先彼は同市に提議して曰く、非戦闘員は着代への衣を持して妻子と共に退去し得べし」と。然ども彼等は之に應せずして遂に家財を火に投じ己等自らも之に飛入りて死せり、此事件に就きて説く者或は彼の慘酷を詰るあり。然どもこれ多少語るもの、誤れるには非るか。思ふに此時代の記録は僅かに羅馬の史家に依りてのみ傳へらるゝもの、若し敵國の有する史實にして全然信じ得べきものこそせば亡國の歴史程誤まれるものはあらざるべし。今日一の記録をも有せざるカルタゴの國民殊にハンニバルが絶大なる偉業をなしつゝも全く敵國人の憎惡の筆に誤られたる事に同情せざるを得ず。吾人は此の意味に於て彼の爲に萬丈の氣焔を吐ける獨乙の史家 *Mommsen* の痛烈なる言を賞せざるを得ず。若し夫れこゝに春秋の筆法を用ひ得べくむばサグンツムを亡せしものは羅馬彼自身の政策の致す所と言はざるべからず。さはれ兩者よく戦へりと雖サグンツムの勇や賞すべくハンニバルの酷を責むべきに非るなり。之より先ローマの使節、彼の軍營に來らむとす。彼は既に此事あるを豫想したれば斷然その接見を拒みて且つ曰く予は陣中にて汝等の満足するか如き回答をなし得ざるべし。汝等の生命又安全を保し難し、しかじ汝等寧ろカルタゴに至りて其生命を救はれんには

ど。何ぞ言辭の痛快にして直截なる。眼中既にローマなし、焉ぞ又ファビウス *Fabius* 輩の小策を弄せしめむや。アハレ羅馬一流の外交家も彼の面前にては何等のオーソリチーにも償せず、たゞ一言の應酬をすらし得ずして命せらるゝか儘に又海路はるかのカルタゴに至る。聞けよ。サグ

ンツムの攻撃は既に汝等に對する宣戰なる事を。汝何ぞ彼地に於て又喜劇をなすの要あらむや。ハンニバルは其冬を首府に過ぐし軍隊には臨時休暇を與へその故里を訪はしむ此際彼は一場の訓辭をなす。

我友よ、明春早々こゝに歸り來れよ、我は汝等と共に來るべき大戰を行はむとす。此戰よ。實に汝等に取りては共同の仇を報へんとする絶大の名譽にして、勝利は永久に簡冊に垂れむ。さらば健全なれ、我友よ。

而して此冬こそ彼にとりては忙はしくも又最も望多き月日なりしなれ。試みに思へ。垂髫の頃より神に誓ひし言葉忘るゝ時なく、とる年と共に眼のあたり敵がなす傍若無人の振舞と母國の膺甲斐なさとを見るにつれ彼の胸中悶々の情に耐へざりしならむ。しかるに今や漸く回復に向ひつゝある其勢力を以て、累なる怨の及報ゆべく幸ある門出をなさむとはするなり。彼に勝利の策はあり。此日あらむか爲に與へられし我智力。既に祖國に捧げたる此身體。二十有餘年鍊へに鍊へし此腕、いざ試しむ天津神、照覽あれと、言はむ中彼たるもの勇躍抖擻せざらむとするも焉ぞ得べけむや。

周到なる用意もて準備萬端些の遺漏なからむ事を期せり、而して豫め彼は偵吏を派して敵國の内情を探知せしめ又一方當時の趨勢を達觀して遂にローマ孤立の策を樹て即ち對ローマ大同盟を結ばむか爲、使をマケドニア王フィリッポ(Philippos)シリア王安テオクス(Antiochus)を初めエジプト、ガリア、シチリアに派したり、彼がたゞ武將として偉大なりしのみならず又外交的手腕に

於て時代人を超脱せし事既に斯の如し。たゞ其のローマ聯盟各州に對する見解は今日より之を見れば明らかに誤りしものなりと雖も之れ復命者の十分なる探查を怠りしが爲にして彼の罪に非るなり。古代未だ人少く、路開けずして山妖海若威を振ひ交通機關も亦完全ならざりし時に於てすら彼、ローマ及ローマ人に關する知識は當時のあらゆる外人に優りしものにして而も彼は當に人事の最善をつくしたるもの、若し會々豫期に反したるものありとせばそは天なり命なり、神に非るよりは如何でか之をよくせむや。夜色沈々と更け渡れども燈火の下に敵國ローマの圖を擴げ萬腔の熱血を注ぎて畫策しつゝある彼が胸中を察すれば感慨蓋し無量なり。

V. 祖 國!!!

然り盖世の偉人は斯の如く祖國のために日夜畫策に餘念なし、知らず祖國は果して何を以てか之を謝せむとはする、抑もカルタゴ本國は二名の大總統(Shobetes)を有する共和國なりき。然ども宣戰講和及文武官任免の權は一つに「二十八人會」といふものゝ權限に屬し戰時には新に將軍を任命して之に一切を委ぬる事恰もローマに於ける Dictator に似たり。されば Isocrates が「カルタゴは平時は寡頭政府なれど戰時は王政を執る」と云へる言は幾分此間の消息を知るに足るべし。然れども總統も將軍も其行動が著しく制限的な事は吾人の考へ得る所なり、議會は之を白人會と稱するも商業國民なる爲か公官は賣買せられたるにより完全なる人民の代表者と見るべからざるものなり。要するにカルタゴの政治機關は富力あり名望ある少數の家系の掌中にありたるが如し、財政狀態に關してはその裕福なる事古代邦國中の最上位に居るものなれば市民は何等直接税

をも課せられずして國家は優に之を維持し得たりといふ。希臘史家の第一人も「カルタゴの財政はギリシアのあらゆる諸國に優り其收入は以てペルシア朝廷のそれに比し得べし」と言ひローマの史家 Polybius すらカルタゴは全世界最富の市なりといへり。富力既に斯の如く、況して其海軍は當時殆んど絶對的の權威を稱せられたるにかゝらず若敵ローマに敗れし所以のものは如何。吾人は言はむとす、私利政争をのみ事とし敢て國家的觀念を没却せし群小輩が、重大なる時機に際會して尙且つ舉國一致を缺きしが爲なりと。當時ハミルカル一派の施設を事毎に反對妨害し來りしものを彼 Hanno の徒黨とす。前者が主戰論を稱へむとせば彼等は平和主義を標榜して立たむとす。平和主義素より可ならざるに非ず、たゞ徒らに偷安を貪りて眼前に逼り來る恐るべき國難を顧みず否屈辱的平和をさへ甘せむとするが如きは平和を言ふもの却つて平和を亂す、吾人と雖も與し得ざる所況んや重大なる危險の近けるを觀破せるハミルカルに於てをや、主戰論必すしも賞すべきにあらず。然どもカルタゴの現狀は先年の戰を経て益不安に陥り其結びし講和の如きは單にこれ一時の休戰を暗示する外何等の曙光をも與へざるものなりローマは遂に我の存在を許すものにあらず、彼は乘すべき機を得て速かに我を根底より擊滅せむと企つるは蓋し當然なり。若し此時に當りて、我に敵なし又焉ぞ軍備の要あらむやと放言して得々たるものありとせば、それは痴人にあらずむば到底非國民たるの譏を免れざるべし。我は戰はざるも彼戰はむ、我は平和を欲すれども彼之を許すまじ、黙するも打たれ逃ぐるも又打たるなり、所詮手をつかぬればたゞ眼前に横はるものは滅亡のみ。平和を口にするもの尙且つ座して亡國の嘆を呼はむとするか、此の存

亡の秋に當りて我を救ふの一道はたゞ戰ふの一事あるのみ、然り全力を擧げて彼と雌雄を決せむのみ。其の勝つと勝たざるとは敢て關する所にあらず、要は人事の最善を盡すに在り。

然り然れども眼前の小事は俗人に迎へられ遠大の計は時代に容れ難し、嘗てハミルカルは戰鬪の經驗と此重大なる形勢を察知して精銳なる陸軍を創立せむとせしに、反對派は徒らに、私心を挾むで之を妨げたり、夫れ海戰が船の衝角を以て決せらるゝ如き幼稚なる時代にては艦隊そのものは國民にとりて左程重要なものに非ず。強大なる海軍も陸上の敵に對しては弱少なりと雖も之を如何ともする能はざるなり、況んや之を封鎖するとも何等効なき地に於てをや、されば常に決定的の勝利を與ふるものは、その陸軍力なり、然るに當時のカルタゴは此陸軍の根本要求を充し居らざりしなり。彼が主張する所以のものは又實にこゝに在り。彼は己の胸中を察せずしてただ反對せむが爲に反對せる彼等の心事を憤りもし哀れみもせしが國家の事は須らく慎重を要す、敢て自己一身の私事を以て輕しく進退すべきに非ずと遂に將軍の榮職を棄て一總督に下り以て西班牙に自己の抱負を出來得る限り實現せむと努力せしなり。

先にハンニバルより會見を拒絶せられしローマの使節一行はカルタゴに來りて威嚇的質問を發す。反對黨首領ハンノは之より先議員を懷柔して、如何なる屈辱をも尙ローマの要求のまゝに服せむとす。即ちスペインの軍隊をサグンツムより撤退して該市には償金を拂ふ事を議し剩へハンニバル條約無視の件を以てローマに引渡すべしと言へり、ア、祖國のために身命を捧げて盡さむ

とする勇士を捕へて而も敵に致さむとす彼をして獅子身中の虫と言はすして將た誰をかいほむや、後年ハンニバルが伊國の野に轉戰連勝しつゝも思ひ一度祖國に至ると暗然として心の雲に掩はれしも亦宜なる哉。如何なる厚顔無耻の議員等も此提議の餘りに慘酷なるに忍び得ざりしか或ひは年々殖民地より齎らす莫大なる富の來らざらむを慮りてか幸ひに之を否決したり、而して使節に答ふるに、ローマとハスドルバルとの間に結ばれし協約中にはサグンツムの條項なし。よし之あるとするもそれは本國政府の關知する所にあらずといふを以てす。然れども言や受働的なり消極的なり、何ぞ百尺竿頭更に數歩を進めて斷然その求むる所を退け舉つてハンニバルを聲援せざる。使節ファビウス既に彼等の意氣地なきを見て、與し易しとなし敢て高慢無禮の振舞をなして遂に僭越にも戰を宣す。これ然し乍らローマのこゝに至りしは豫定の行動のみ、又ハンノ一派の呆然たるを要せざるなり。

本國は既に頼むべからざれども宣戰の鎬矢は既に絃をはなれぬ。ハンニバルたるもの立たずして可ならむや、二一七年の春は來りぬ。

“From the Ebro to the Po!”

あはれ彼の前途の幸いかに。

精神の肉體に及ぼす影響

銀 林 生

精神は物質に結びつけられ物質は精神に結びつけられて居る。古來より多くの哲學者が好み將來も亦好むであらう所の精神と肉體との區別否此兩者の存在なるものを研究せんとすることは、常識的な實際的な思想家にとつては或滑稽な感を與へるであらう。予は何人にも存在する所の何物にも捕はれない曇らない感情に向つて告げんとするのである。

自ら精神を有するか否かを疑がふ人はこれから以後予が述べんとすることを讀まぬ方がよからう。又予が經驗の事實として語らんとするすべての作用をことごとく身體に歸せんとする人はこれ等の作用を、所謂精神作用が起る所の身體の部分が他の部分に及ぼす力と解釋して貰ひたい。かゝる種類の觀察は非常に複雑であるけれども事實は依然事實である。それから生ずる格言は矢張有益である。そして内容ある眞のものゝみが吾々に重要なのである。かゝる事實に對しては予は人が睡眠から活力を得ると云ふ事實より手近な且つ明らかな例を掲げることが出来ない。この場合には反對論者から攻撃さるゝ如く、丁度自由にされねばならぬそのものが束縛されて居るのは實際である。然もこのものは向上すると十分の力を有して居る。そしてこの力は練習によつて發展せしめることが出来る。然るに悲しむべきことには最早全く反動の生じない精神の束縛の程度がある。即ち精神の夜である。又幾分緩やかな程度がある。即ち精神の薄暮である。後者には未だ衝動がある。自分が説かんとするのはこの後者の爲である。又この兩者の間にも一つの程度がある。それは本來の精神病である。この場合には意志の衝動は自己の意識によつていはないが他人の意識によつて働くことが出来る。もし然らずとするならば治癒は絶對的に不可能な譯であ

るから。かゝる状態をその根本から説明することは吾々は必要以外であると云つてよい。然し吾吾は形而上學的な廣漠たる思索は爲ないとしても、先づ第一に吾々の任務を解決する爲、即ち吾吾の對象とするもの、根本概念を理解する爲にしばらく思考して見やう。全く何物にも捕はれない人間は自分を一個のものと感じ又一個のものとして生活する。そしてそれは意識を伴はない。もし意識が伴へばこの精神的潔白は失はれる。そして分裂が生活の中に入りこむ。心的教育を俟つて始めて知覺され得る意識なるものに關する事柄は感覺の事柄とは異つた原理から發して居る。吾々はこの根源を靈と名付ける。然し吾々はこの語によつてたゞ一つの抽象觀念を示すのみだと云ふことを忘れてはならぬ。と云ふのはこの靈なるものは吾々この遊星上に住んで居るものには、それが丁度人間と云ふものゝ中、從つて物體の中に顯はれる程度にしか見出だすことが出來ないからである。かゝる關係にある靈を精神と呼び、これと結びつけられた物體を身體と呼ぶ。この二者はその現象の統一に於て始めて解することが出來、又二者の差異を發見し了解せんとするには已に最高の素養が必要であるから、精神が身體に影響を及ぼすと云ふ證明は全く無用である。兩者の聯關を説明せんとするは尙ほ效果のないことである。如何となれば吾々は既にそれを一つのものとして考へ、且つその中であつて始めて吾々が理解することが出來たこの考へ方そのものを逆に理解せんとすること、即ち端的な事柄を直接了解しやうとすることは、右の手が左の手は勿論握り得るが自らを握り得ないと丁度同じく全く不可能なるが故である。この現世に於ける吾々の思考は空間的なことをも伴つて居る。これだけは確かである。笑ふことや泣くことは精

神と肉體との共同作用の最も明瞭なシンボルである。神經作用がこの共同作用の鎖の中の最も吾吾に近い環であると醫者は云ふ。我々は已に概念を確定し終へた。故に以後はこの問題については一言も費やさぬであらう。

病氣になつたり治癒したりする原因について論述することは同様に吾々の企て及ばぬことである。又かゝる必要は毫もない。吾々はたゞすべての病氣は内部及び外部の事情如何によつて決定されると云ふことを考へれば十分である。病氣になるのは吾々の一個體としての存在と同時に與へられた所の一つの萌芽が發展して來るが爲か(勿論外部の刺激にも起因するか)然らずんば吾々の有機的個々生活が、吾々の敵である他の幾個かの生活との戰に於て、吾々を取りまいて居る世界に、即ち絶えず進み出る力に屈服したるが爲である。この場合には身體の虛弱に起因する生來の病氣に對する感應性と云ふものが豫想されなければならぬ場合は勿論ある。第一種の病氣に屈するものは遺傳病或は生得病として知られて居るものゝ外に、この見地よりして未だすべての點に於て十分には研究されて居ないもの及或體質の發展と見てよいか病氣と見てよいか解らぬことが往々ある所のものが存在する。

この種類の状態を制御することには精神は何の助にもならぬであらうか。こゝではかの醫者達が素質を善良にする爲或は素質に及ぼす所の影響を防ぐ爲に命する所の豫防處置について云ふのは勿論ない。哲學者就中詩人的哲學者は一方に偏した倫理的素質、即ち急速に發展する一つの方向と云ふものは、いかに嚴重にこれをおさへつけ、これを制限しなければならぬものであるか

と云ふことに就て、吾々を悟らせる爲に屢々努力する。この事は吾々の領分内に於ても實行出来ないだらうか。一個の人間の健康に關しての全素質は、醫者でない人にとつては何によつて最も明らかに知ることが出来るか、私は吾々が氣質と考へて居るものによつてであらうと思ふ。人間も矢張多くの自然物の中の一つである。そして最も勝れた博物學者でも氣質と云ふものを一個の個人生命に調子づけられた要素であるとしてより以上に想像することが出来ない。『各個人は身體の形に於ても亦精神の素質に於ても、自分がそれに向つて發達せねばならぬ一つの釣合と云ふものを有して居る。この事實は最も甚だしき病的な不具者より、ギリシヤ人の信じた神人の最も美しい姿に至るまで、又すべての人類の生存の種類、形式を通じて眞である。失敗や迷ひ又教育や艱難や練習によつて各の人間は彼の存在の最も充實した享樂が横はつて居るこの力の均齊を求めて居る』——とヘルデルが云つて居る。吾々はなほこれにつけ加へて、この釣合の状態は亦健康の條件である」と云ひたい。自然界に於て自分自身を對象として考へる事の出来る唯一のものである人間は、この自己概念に達することが出来ないであらうか。プロトゴラスが萬物の尺度であると云つた人間は、亦自分自身の尺度であり得ないであらうか。外物の亂争からして自分自身を顧みるに至つた人はたしかに、此方面からの精神の影響については疑を挾まぬであらう。即ち吾々は自分自身、従つて病氣でもそれが本來より性質の中に根ざして居る以上は、これを制する一つの力を得ることが出来る」と云ふことを認めざるを得ないであらう。

精神の力及び權力が精神の領分を越して働くことが出来る」と云ふことは、あたかも吾々の生活

し活動しつゝある現實の世界が吾々個人の織りなした自分自身の生活の織物に外ならぬものである」と云つたかの如く、多くの人々にとつてはいかにも不可思議な且つ疑はしいことに思はれるかも知れぬ。然してこの現實世界は吾々にとつてはそれ以外の何物であらうか。大人には大人らしく、子供には子供らしく、喜んで居る人には愉快に、又蔽はれた目には曇つて映する。即ち吾々の心に映じた如く吾々に作用を及ぼすのである。人間の幸福或は不運を形成して居るものは、常に吾々の精神に最も強く映じた像即ち吾々の觀念である。然してこれ等の觀念を晴れやかなものにしたたり陰鬱なものにしたたりすることは吾々の自由にならぬものであらうか。吾々は元來は全く晴れやかである眼を、態々曇らし鈍くする爲にあらゆる有要な注意思考と云ふものを無駄に費やしつゝあるではないか。果して吾々はかゝる無益な努力を捨て、元の晴れやかな眼を得ることは出来ないであらうか。

リーヤ王の御伴の人々には肌まで徹した彼の荒野の大嵐さへ、心の中の苦悶の嵐が立ちさわいですべての外界のものを音を聞けなくして居た不幸な王を動かすことは出来なかつたのである。實に驚嘆に價することであるが、精神が外界に對して一つの勢力を有すると云ふ最も明らかな證據は精神が力を失つた場合に見られる。精神が狂氣の夜にさ迷うて居る不幸な人々は、いかに悲惨な生活をして居ても、彼等の周圍の人々を一人一人或は同時に幾人か引摺んで行く所の肉體の苦痛から影響を受けずに居ることが出来る」と云ふことは、誰でも知つて居る事實である。この場合には狂氣に收縮した所の精神は、注意をば肉體から全く放して肉體を外部の勢力に對して無

感覺にするが爲である。然るに訓練され神聖な理性の目的に向けられた意志が、嵐の如くおしせまる無意志即ちこの狂氣の戦慄すべき力より以上な否それと同じ位の能力さへ持つて居ないのであらうか。

一英國の雑誌寄書家は霧と石炭の煙から出来て居るロンドンの氣候が、人民の健康状態に及ぼす影響を報じて、これに附するに彼の觀察の結果を以てした。即ち彼は次の如く語つて居る。

「吾が市の大氣に責ありとせられて居る病氣の中で、習慣から起つたものが非常に多くあるか否かはしかし未だ明ではない。吾々の身體が、いかに外界の温度が變つても、ほとんど内部の温度を變化させないと同様に、亦人間の心の中には一つの抵抗力があつて、それが一度喚び起されて活動すれば多くの場合に於ては外部の力の作用に對して平衡を保つに十分である。醫者達は病氣中の婦人が疲勞の爲め室の中さへ自由に歩けない時に少しも苦痛の感なくして自分の好いた舞踏者と半夜中はねまはると云ふ話をする。即ちかくの如く吾々が常に好愛する刺戟が筋肉を覺まして活動させるのである。故にロンドンの大氣に最も多く惱まされるものは遊んで居るもの、無職のもの、流行を逐ふ人々等である。注意と力とを實際的に組み合はして居る人は誰れでもバローターのことなどは氣にかけぬ。陰氣な十一月は憂鬱病と自殺の月である云ふことは事實である。しかしいかに暗黒な空の色合でも朗らかな心の青空を夜の暗にすることは出来ぬではないか。狂氣の病理的激動でさへ大氣の影響の外にあるのである。人間をおさへつけ人間に打ち克つ所のものは、人間が自ら苦しめられたがつて落葉の秋の現象と結び付ける所の思想である。神經過敏

者の心配は天氣の好惡によつて増減するけれども、彼の氣分とその結果を決する所のものは畢竟彼が有する活動力如何による。神經過敏者の性格は、よしそれが一時的であるにしても、必ず弱いのである、故にもしも彼がこのことを眞面目に明らかに了解して自分の快癒に向つて倦まず努力するならば、自分自身が最もよい自分に對する醫者たることが出来るであらう」と。

この意見を讀むならば如何なる醫者でも、たとひ彼の經驗範圍がごく狭くあつても、必ず自身自身の經驗から同様な事實を報告せんとする氣になるであらう。かゝる事實は醫學上に於ては他の事實よりは度多く起る事實である。殊に比較的大都會に於て然りである。そしてこの場合にはそれ等の都會を蔽うて居る雰圍氣は、むしろ住民の熱情心配思想から成立つて居る様に思はれるではないか。自殺は生活の範圍に於て現實の苛酷と粗暴に對して自己を保護することの出来ない様な、馬鹿に柔和な性質や軟弱の心情が残した遺産ではないか。勿論かのウエルテルに對しては吾々が一般に病弱者にはらはなければならぬ同情の念を捧げねばならぬけれども(クライスト)。活動的の醫者は誰でも、或危険な場合に於てはたゞ自己の義務を献身的に盡すことのみが自分の道德的及び肉體的の存在の周圍にかゝり始めた雲を切りはらふことが出来ると云ふことを經驗して居るであらう。又かくの如き行爲がこの行爲に關係して居る危険から彼を保護することさへ出来ると云ふこと、即ち義務が作つた傷の中には已にこの傷を癒す軟膏が存在するものであると云ふことを經驗して居るであらう。予は次にゲーテを引用しやうと思ふが、特に彼を引用せんとする理由は、彼の場合に於ては職務と云ふものより起る比較的強い激勵が存在せず、然して眞の意

志の勢力と云ふものは丁度この場合の如くに、他から強制を受けない時にますく著るしく顯はれるものであるが爲である。彼の言に曰く

「予は或腐敗熱に對して止むを得ざる事情の爲自分の身を病毒の感染に曝さねばならなかつた。そしてその場合にたゞ一つの斷乎たる意志によつて病氣を自分から打ち退けることが出来た。かかる場合に道德的意志の爲し能ふ事は實に驚くべきものである。云はゞ意志が吾々の身體に浸入してそれをすべての害を加へる勢力を打ち退けることの出来る状態にうつすのである。恐怖は如何なる敵にでも吾々を捕へる手段を與へる情弱の状態である」と。多くの他の人に於てはたゞ美しい自己欺瞞である所のものが、ゲーテに於てはすべて體驗され實際的であるから精神生活の事實について彼を引用することは一個の獨特の價值を有する。

果して然らば遭遇したものを内部の法則に従はしめ、外部のものを自己の所有に引き入れ、かくして常に間斷なき運動をなしつつ、その状態に於ては決して變らぬがその本質は常に變つて行く所の個人防衛の力としての生命とは如何なるものであらうか。かゝる肉體的性質の力の、最も強い保護者、最も堅固な支助者と見做すべきものはかゝる力の特長を形作つて居る精神的力ではないか。自發と云ふことは自己維持の條件である。然して人間に於ては精神の發展が自發の條件である。更に一個の人に於て思想の力が大なれば大なる程彼の自發は大である。故にこの自發力が大なれば大なるだけそれだけ多く彼は生き、それだけ多く彼は存在する。たしかに幾千の勢力が貧弱な人間を待ち伏せて居る。實に世界は一つの勢力である。しかしすべての勢力の中最も強

い勢力は人間の性格である。この性格こそ眞の吾々である。如何となれば自然界に存するすべての物がたゞ宇宙にみなぎる力の發露したものに外ならぬと同じく、吾々人間も亦自分達が露はされて居る一つのエネルギーの外は何物も眞の吾々の所有であると云ふことが出来ぬからである。そしてそのエネルギーは外から強られたものであつてもよい。即ち我々が自分自身の心からエネルギーを引き起すことが出来なかつた場合に或動機によつて急に意志せねばならぬ状態に移つたのでもよい、誰れでも旅行中或は婚約の状態では死ぬことが稀れであると云ふことは根據のある觀察である。

最後にブルウエルの言を引いてこの章を結ばう。

「青年時代に於ては吾々自身さへ信じて居るならば病氣が何様しても癒らぬと云ふことは極く稀れだ。否殆んどない。身體が最も弱い人でも常に職業に従事して居れば病氣になる機會がないと云ふのは吾々のよく見る所ではないか。彼等をして怠惰ならしめ雜念に耽けらしめよ。然らば彼等は死ぬのである。實に鏽は用ひられさへすれば、常に光を放つて居る所の鋼鐵を食ふのである。働くことも怠けて居ることも同様な弊害を作ると云ふならば今述べたことは無意味なことになる。然しこの場合にも働くことから來た弊害は容易に逃れることが出来、又働く事自身は一つの慰安を與へるものであると云ふことを認容せねばならぬであらう」(Feustersleben. Diätetik der Seele-46)

兄弟——地上五尺

兄は西向に弟は東向に各々二階の間宛を占めて居た。間の唐紙は開け放してあつた。兄は此夏休暇にはあつてこうしてと様々な考を持つて居たが愈々休暇になつてみると先づその飽き果てた口癖にして居る故里へ歸るより外の方法は無かつた。かつ兄は病弱のため全く學校を放棄して歸郷した弟に會ひたい念もあつた。七月の未だ涼しい風は植付の濟んだ許りの田を渡つて靜に室に這入つた。用の無い兄弟は勝手に臥をべつたり本を讀んだり畑や庭を散歩したりした。兄は弟が思つたより丈夫らしいのを見て安心した。然し別段口に出してかれこれは言はなかつた。

もう蚊の多い頃であつた。日暮頃になると家の隅々からもやもや襲つて來た。夕飯が濟むと兄も弟も戶外へ出た。村の小學校へ行つて居る一番下の弟と甥とも必ずついて來た。螢が藪や叢から幾つも光り出した。末弟や甥は様々な學校の出來事や見聞を語りながら螢を追つた。兄は黙つて襲つて來る蚊をばちりばちりと手でたきながら久し振りで會ふ弟達の話を聞いた。然し弟達は進んで兄に質問を發することは稀であつた。そうした弟達の性質であつた。夜の暗に覆はれた

田の上に火が見えたり遙かな山腹のあたりに光るものがあつたりなどすると子供らは化物だと言ひあつた。稻田の上を行く煤け提灯の話などか兄が頭によみがへつた。いつまでも化物を尊重する村の状態を情無くもまた面白くも思つた。全く暗くなると皆家へ歸つた。兄は臺所の爐邊で蚊燻しの香を嗅ぎながら祖母や叔父とぼつりぼつりと話をした。時には弟も加つて先日徴兵検査の話などをした。その成績は丙種であつた。

彼ら兄弟は最も祖母と親しかつた。彼らは母親のもとで成長するより祖母のもとで成長した日が多かつた。殊に兄は祖母に對してあらゆる我儘を仕つくした。何かして恩を返さねばならぬと兄は思つた。近年めつきり數を増した白髪や腰の曲つたのも著しく目についた。然し祖母は未だ爲す可き事があると云ふ風に毎日體を動して休まなかつた。「もう四五年前ならな」と重い物を持つ時などは心から嘆聲を洩した。弟の世話は一切祖母がやつてゐた。晝過などに臺所の用を濟して風當のよいところに肘枕などうたゝねをして居る祖母の姿を見ると四十餘年以來この煤けた屋根の下に経験した悲しみ喜びの疲勞が一時に襲つて來て居る様に見えた。

兄は毎日の單調に飽きてきた。机の上には本は開いてあつても讀んで居る時は少なかつた。日記へ「むすやうに蛙が鳴く。そして段々稲苗が延びて行く。悲しい」など。彼にとつてはかく目がつて行くのが實際悲しかつた。然し施す可き手段も知らなかつた。彼がこんな考を抱くに至つたのは四五年前からである。「志大にして行伴はず」などと他人の口調を借りて見ても満足するところは無かつた。彼は現在と言ふものが何故思考と一致せぬか(極めて明白なる事實かも知れぬ)

を疑つた。そして結局思考と現實とは全く調和すべからざるものだ。かくして時の流は進みやがて一切が終ちののだと思うた。徒なる探究は已めよ。只一瞬一秒を充實して行けば足りるのだ。彼は何も考へずに只働く周囲の百姓の力を偉く思つた。虚偽も隠蔽も無い生活。たゞ内に溢るゝ力を揮ふ生活を美しく思つた。彼は徒に狐疑する思想を有し内に力の無い自己の卑小を認むると共に精神的勞働に耐へる者であるかをも疑つた。たゞ習慣的にたゞ傳習的に精神的勞作をとらんとするならば誤れる此れより甚だしきは無いと思つた。百姓の倅は百姓で學者の倅が學者であらねばならぬ時代はとくに過ぎて居る。彼の父は屢々彼に「鉄をこれ」と怒鳴つた。あの白日の下あの大地上に汗を流して鉄を振ふことが實に彼の使命(としも言ひ得可くば)であつたかも知れぬ。彼は「傳習の奴隷となりたくない。自己を開拓せねばならぬ」と考へた。然しそれは至難のことであつた。兄は一面にまた極めて常套的な男であつた。「青年重不來」など言ふ句の意味が彼には可成の力があつた。そして清き杯濁れる杯共に飲み干して見たいなどゝ柄にも無い考にこづき廻される事もあつた。現在の束縛多い状態が様々癢にさわつた。

冷靜なのは弟であつた。病を得て特に著しくなつた。彼は兄が無暗に感激したり慷慨したりする様を見て相變らずだと思つた。彼は自分の趣味にまかせて動物や音樂の書籍を読みあさつた。兄が歸つて來たのは嬉しかつた。多少の傾向の相異はあつても話相手であつた。兄が怪しい語學を振りまわす時彼は笑ふ可き誤謬を發見して失笑した。彼がひゞく羅馬字に興味をもつて居るの

で兄が彼に送る手紙は大抵羅馬字文なのを微笑して讀んだが國訛の發音違があるのを氣の毒に思つた。かくして一つ違の兄は弟に啓發されねばならぬ点を有して居た。

段々暑くなつて來た。もう土用に近くなつた。兄は午前の時を費すために遠くの畑を廻りに出た。あらゆる野菜の葉が青々と輝いて日光を享けてゐた。その間に忙しさうな汚い山着物の村人か傍見もせずに働いて居る。農家の前を通つても大抵は戸がしまつて鶏がくつゝ彼の足音に耳すまして居る。見渡すところ爲すことの無い人間は彼一人の様に思はれた。そつと胡瓜畑の影へ日光を避けて腰を下した。蟬の音がする。森を隔てゝ小學校から合唱の聲が響く。

、、、寄せ来る敵は十餘萬

己れ憎い元軍め、、、

その吞氣そなな旋律が幾らか彼の心を和げた。彼が初めてかの小學校で唱歌を歌つた頃から今まで成長した事實が彼には何となく奇觀であつた。猶ひたすらに成長すべき彼が成長の奇觀など思ふのは彼の發達が常規で無い故であるかも知れぬ。

時には更に歩き續けて隣町まで出て町の一方に列る樹木の多い丘陵を經廻り石油の湧く野の異臭を嗅ぐ日もあつた。彼は町の軒下を通りながら一軒一軒の店を覗きながら歩いて居た。彼の覺ある顔はあつても挨拶をする面倒は無かつた。床屋藥種屋小間物屋菓子屋文房具店郵便局病院皆それゝ新手が代つて仕事をやり初めやうとして居る。「我らの時代」と言ふものを暗示される。彼は人氣の少い山ではいつでも大聲で叫んだ。それは無意味でもさうせずには居られなかつたのである。頂には神社があつた。その下の平地は小學校の運動會場であつた。十年前こゝで走せ廻

つた友達が或は死んだり或は離れたり、或は會つても話の出来ぬ程違つてしまつた事實を一大事に思ふ程彼は感傷的な点があつた。山の見晴の善い部分からは國境の山々や白帆の船を通ずる大川や鐵道や石油鑿井などを一望の裡にをさめることが出来た。山の下油田では汗と油とにまみれて働く男女労働者の群を見た。そして彼自らも汗と塵とにまみれて家へ歸り鐵分の多い赤澤ある井戸水を浴びた。

兄と弟とは近い親類の家から夕食に招かれた。弟は辭退したので兄は祖母が出て呉れた夏羽織を着込んで手土産をもつて出かけた。その家の主は村の利役で人好の善い老人であつた。やがて村の校長が來た。叔父が來た。校長はいかにもそうした境遇に鍛へられた風であつた。學校の話が出て校長は兄に「もう凡て紳士として遇して出缺席などは一切干渉しないさうですが」など言ふと兄は何だか悪く拜み上げられる様な不快な氣がして、ぶつきら棒に「そんなことはありません」と答へた。坐敷の床間の前へ坐らせられたのは主の所謂「本家の兄さま」なる彼であつた。校長は器用に坐り込んでよく食つた。叔父は自分の智識の限りを絞つて彼此と話した。兄は村の手料理と酒とのうちに陶酔の快を得て歳月を送つてゆかねばならぬ人々を幸にも思つたが、もしたら自分もその一人であらねばならぬと想像したとき淋しかった。膳が引き取られてからも話は續いたが兄はたゞ聞いてゐるだけであつた。最後に主人が最近の東京見物の話をして「瓦一枚一枚に電氣のついてゐる」三越の説明があつた。歸る時には家族の人々が一々挨拶をした。

雨の樋を下る音が騒々しい。稻の成長する喜に村中は鈴を鳴らして半日の勞作を休む様に布れ

た。雨の少しはれた時兄は裏門を出て四五丁隔てた郵便箱のある小店へ行つた。壹錢五厘の切手が無いので端書を買つた。その駄菓子など賣る店先に往來を見て悄然として居たのは弟の舊友であつた。東京へ行つて方々に働いて居るうちに病氣になつて歸つたが大分重いので先日日の検査には荷車にのせられて引かれて行つたと祖母が先日話したのを思ひ出した。その母親が顔を出してつか／＼あなたはまあ御丈夫さうで」など、兄の面炮の出で居る黒い顔をながめた、途の或家には雨降で外出を妨られた若者が四五人寄つて何か手細工をして居た、大抵兄の顔は知つて居たが長い境遇の差異で言葉をかけることも無かつた。彼は「我らの時代」に至らんとする誰も彼もが一樣に受けつゝある目まぐるしい變動の精神と肉體とを思ふた、また裏門から入つてぶら／＼納屋の後へ出ると家の下女が居た。下女の手に光るものが動いた。近づいて面の凹凸してゐる安鏡を知つた。髪を結はうとして居るのであつた。油の少くなつた燭が木の端にかゝつて居た。毎日畑仕事に使はれて休日の外は髪を結ふ暇も無い彼女を氣の毒に思つた。其夕は雨水を溜めた風呂へ入つた。

弟は折々汽車で市の病院へ行く外遠くへ出ることは無かつた、自分で案出した將基を子供と共に遊んでゐる程閑散な日を送つて居た。裏の杉林の下などに口する聲は聞きとれぬ程低かつた。

Am Brunnen vor dem Thore,

da steht ein Linden baum;

ich träumt in Seinem Schatten so manchen süßen Traum.

弟の淋しい日はいつまでも續く。兄は例の頭で何故我々兄弟は此の様にいぢけてしまつたのだらうと獨り憤つた。彼らの末弟はまた一層柔弱な子供で恰も自身の幼い頃を思はせる様な場合が多かつた。

兄は薄暗い倉へ這入つて古びた本を探し初めた。學問などに冷淡であつた祖先はまどまつたものどては一冊も供へて置かなかつた。何遍探しても讀んで見たい本は無かつた。手摺のした表紙のち切れた破本などに昔の記憶がちら／＼と浮ぶ、反古の下から前後の幾頁かの切れてしまつた「繪入倭文範」が三四冊出て來た。手にとつて開いてみると見覺のある挿繪が出た。阿波の順禮だの三十三間堂棟木の由來だの哀れにもまた凄い話だと此の粗末な挿繪が教へて呉れたのであつた。彼の叔母達が若い時に讀んだものであらう。その叔母の一人は死し一人は三人の子供の養育に忙しかつた。紙くづ屋の籠の様な中から紙魚が匍ひ出した。狭い明り窓から入る光線で倉の中が坐敷牢などの様に思はれた。窓から見える庭の松や躑躅やさては母家の瓦など皆しつとりと濡れて居る。彼は押しつけられる様な陰氣さを感じて厚い扉の倉を出た。倉の下の梅の枝ががさがさ動いて居る。洗足の下女が青い實を落して居た。

再び天候が回復した。蟬が朝からぢい／＼鳴きつゝけた。兄は朝から杖を振り廻して田の畔の露を拂ひながら出かけた。祖父はその小さい體を小さきぎみに運びながら村端れの役場へ行つた。町

から來る新聞配達の女が定まりの時分に緩い鈴の音をさせて誰に言ふとも無く「今日は」と戸をあけて新聞を投り込んでまた靜に去つた。臺所でご／＼と動いてゐるのは祖母であつた。役場へやる辨當を拵へねばならなかつた。

兄が暑い暑いと言つて歸つて來たのは晝近くであつた。「また運動に行つて來たか」と祖母は腰を立て、孫の汗ばんだ顔を見た。彼は新聞を拾つて二階の室へ上るや臥轉んで新聞を顔に覆ふた。そして眠入つてしまつた。家中の者が並んで食事をするのが此家でも習であつた。その日の晝食には祖父と兄とが缺けて居た。

午後の暑さははげしい。叔父は晝寢から起きると山着物を着て忙しさうに日照りの中へ出た。叔母は兩膚ぬきになつて臺所の爐で砂糖あられを造つてゐた。兄は例の室の椽側へ出て弟の持つて居た西洋剃刀で疎髻を剃り初めた。初めて剃刀を使ふ彼の手つきを弟は笑つて見てゐた。

夕方になつた。入口の土間を行儀正しく踏む下駄の音がした。祖父が歸つたのである。祖父が行水を濟ますと兄甥は順次に汗を流した。そして彼らだけ早く蚊の出ぬうちに夕食を濟ました。家の裏で小甥を負つた女が「また上らぬかい」と垣の向ふの田にゐる男に呼びかけた。「あい、なかなか忙しての」と答へた男はそのまゝ田の中でちやぶちやぶさせてゐる。空には三日月が出てゐた。「もうぢつき盆だの」と言つて女は家の方へ去つた。男は長く田の中でちやぶちやぶさせて居た。暗い杉林の向ふから兄弟や子供の高低の聲が聞える。半里を隔てた鐵道の上を走る汽車の音が近く遠くになつて聞える、誰か笛を吹いて往來を通る。

三日月が高く上つて冴えた頃には凡てが一層静になつた。兄はすっかり村の家の單調に酔つて使命も(彼の所謂)天賦も忘れた様な格恰をして爐邊で茶を喫んで居た。脊中の曲つた作男は御辭儀をして龕燈に燈をつけて裏の寢所へとぼくとして出て行つた、流しではちやばちやばと祖母が行水を使つて居た。

兄弟は二つ蚊帳を釣つて一つ宛に入つて寝た。一つの洋燈が真中に置いてある。二人とも黙つて本の頁をめくる音のみさせてゐたがやがて兄が言つた。「もう飽きたなあ、そのうちに東京へ行かうと思ふ」。「いつ行く」と弟は答へた。「近々中」と兄は言ふ。それから兄は東京へ行つてあの自由な天地で様々の爲す可き事を想像してみた。彼處には父母が居る。姉妹が居る。友達がある。無數の書籍がある。明るい電燈がある。耳を聳する許りの旋律が響くかと思ふと寂寞の單調に耐えない様な諧調が起る。眼の眩む様な惑亂な色彩が一過すれば水の様に淡い氣分も生じて來る、久しく都會から離れてゐた兄の官能には都會の諸形象が福音の様に響く。

弟の頁を繰る音はやんだ。三日月の薄い光が障子にうつゝて居た。

浮びゆく映像

塚本貞二

今日の私達には、數知れぬ若芽が伸びんとしてゐる。花も咲き、堅い實もなるに相違ない。けれど僅かの重みのために、折られた枝は少なくなつた。止むなき心の搖ぎはとゞまる時もない。

やれがきの名もなき花、この花を解き得たらむには、萬有も解くに難からず、とテニソンは云つた。私はこの花を掌にさらへてゐた。そして神秘の色濃き迷宮に解決なき悲哀を叫びつゝ種族的犠牲の迷想におちんとした。云はゞ私は千斷れ雲に情懷をひく遊子であつた。ふと私は人生の凄じい回進機の音に心づいた。

汝の少き日に、汝の造主を記へよ、——傳道書、

舊廬を捨て、私は、敬虔なる豫言者の聲のかたへ行かねばならぬ。人生に附した夢に似た冠詞は、之をなげうてよと誘ふ耳語が聞える。私は明日の魁をなさうとする。暫しも私は休んでおらぬ。鯉と鵬とは決して最大のものではない。莊子の例はもう小さいものゝ一つとなつた。

船は果てしない中を、自己と云ふ指針を頼りに、行かなければならない。けれど私は戦闘しつつも希望の光をはなすまい。

見よ、基督の復活祭には長い冬が去つて、自然が春の輝きに夢の如く醒めて來る。暗い心の露西亞の少年はギクラを弾き、マンドリンを弾じて、この祭は終日歌ふて暮すのである。私の心地も通路にたつて彼方の明るい燈火を望むそれに異ならなかつた。

今日からの私は、傲るべき暇がない。その昔羅馬人は世界の覇者となつて、凡てのものに飽いてしまつた。美に飽く時、人は初めて血を求めるものである。今も羅馬の七丘に横はる Colosseum は彼等の只ならぬ氣象の鋭さを語る遺物である。沸騰した葡萄酒に、香料やサフランを混じて蒸發した香に、惡臭を殺し乍らも彼等は、血を見るに勇みたつた。

arena には鹽粉や朱がまぜられ、寶石の粉末をさへ入れることがあつた。然し軟い白い石の粉は、最も珍重せられた。天蓋の下に皇帝は坐し、近く黄金や、象牙の席は處女なる神女の席と共にあつた。野天に張られた覆いの色は、紫が好かれた。

それは雪の様なアリーナと、市民の着てゐる紫で縁をとつた白色の toga に美しい薔薇色が映るからであつた。けれど信心深い者は、到底血を見つゝ席を列ねるに忍びなかつた。

かゝる程に北方急を傳へ、ゴート人は轡をならべて羅馬を脅した。皇帝ホーリアスは元來暗愚の人であつたが、主將その人を得て幸ひ之を破つた。當時すでに民はジュピターの殿堂の代はりに、基督教の寺院へ詣り、捕虜の殺戮はなくなつたが、未だ血に渴する性癖はやまなかつた。然翌年元老院は凱旋式を以て之を迎へ、マーチが終はつて、コロッセオの催しは初まつた。時に突粗服を纏ふた一人の老人が、アリーナに跳りて、流血の非を説いた。

然したちまち彼は、萬人叱咤の中に、刃に刺れてしまつた。この時、流石に羅馬人は我れに歸つて漸く悔悟の心を感じた。心無き者にも、祈禱に聖い生活を捧げる hermit の一人である事が、其の着物で分かつた。

以前見たことのある人の話によれば、この老人は、羅馬の社寺に參詣し、クリスマスを迎へんがためにアジアの荒地から巡禮をして來た者であつた。

人々はこの老人の聖者たることを知るのみで、名はアリマカス Allynachus といつたか、テレマカス Telenachus といつたかよくは知らなかつた。

彼れは死んだ。然し其の死は無益でなかつた。この隠者がコロッセオで死んだ其の日から、劍士 Gladiators の格闘は永久になくなつた。かくして亡び去つた羅馬の最後は榮華の報であつた。

時の軌道に果てしないが、滅亡の到るは早い。メキシコ人はいたつて花を愛する。迷信的なメキシコ印度人は、ローマ加特力教に固有の宗教を混じた教を奉じてゐる。四月の花祭には、クヱツアルコートルの偶像に花を捧げ、御堂も教會も春さながらの様である。

傳説によれば、創造の神ファイチロポトリの四天王の一人「輝く蛇神」は彼等の救主であつた。國は亡んでも、敬虔の心に變はりなく、四季の果物や草花を供へて祭典を怠らない。

このメキシコには多くの龍舌蘭を産する。土人は之から釀した酒を驢馬に積んで市中へ賣り出すのである。トルテック王朝の時、ある美少女がこの酒を作つて王に献じた。

昔支那では禹の世に、儀狄が初めて酒を造くつて、禹王に贈つた。所が聖人と云はれた王丈あつて、之を飲んで甘しとし、後世必ず之によつて國を亡すものがあらうと之を却け、儀狄をも遠けられたが、聖人ならぬトルテックの王は、たちまち龍舌蘭酒の癪となつしまつた。

夏の國が禹王の後十代經つて、桀王が姫妃を愛し、酒を好んで終に商の湯王に其の國を亡ぼされたが、この王も亦只酒を好んだ丈ではすまなかつた。

この少女と結婚して王の性格は次第に荒み、政治は怠り、果ては堪え難き暴君となつた。

この酒の魔力は今もメキシコ人間に絶えない。小羊を覘ふ鷲の如く、いつも弱い彼等を篩ひ落さんとしてゐる。

私はこのことを忘れないがために、耳朶に響く世上のごよめきは、心をそばたてゝ逃がすまいとはかる。ボールはかつて言ふた。

Whatever is, is right.

けれど眼に映る凡ての物の色は濃く塗られた幻惑の色である。

喋て仕舞ふたこと、弦を放れた矢、神の御思召、及び過ぎ去つた時は取返しのかね四事である。又雄鶏にとつて氣味の悪い日は、足を綺麗に洗らつて貰つた其の日である。絨壇の上を歩くより、甲蟲でも寧ろ乗る方がよいと云ふ諺に法つて、潜みつゝ鶏頭となる人が多くなつた。

If money go before, all ways do lie open.

シエクスピアは言ふた。黄金が先導をすれば途は坦々。之が現代の聲かも知れぬ。私を誘ふ様な人の言葉の後に私を衝つ人が控えてゐる心地がしてならぬ。

私は公孫樹の小さい若葉をのばす頃、黄昏の様な生路に潜ぐりいつた。秋の末で其の葉が黄に染みたつ頃、漸く默思の殻から脱けんとしてゐる。

君子不盡人之歡、不竭人之忠、以全交

私は深く求めない。只この心を以て歩まねばならぬ。そして完全な人となることは一番幸福である。けれどブルタスやナポレオンみたいな人間味の豊かな悲劇的人物の功績は、歴史的遠近法によつて、時代と共に聲價を増して行く。谷間を逍遙ふ Alpine glow の様な光を一生の歴史にもつて、之等の人々は皆逝つた。

其の悲は緑鏽の澁けさに似て、何處ともなく、青銅獅子像か、死顔に被せて取つたベートウエンの面か、マラルメの詩を想はしめる。倥傯の裡に文藝の作物を心ゆく迄味はつた將軍もある。佛蘭西の悲劇の師父コルネイユの作は、いたくナポレオンに愛せられた。又彼は征露の役に際しては、モスコウの宮殿にあつて大火の後特に劇場を設け、悲壯の作を演せしめた。劔をもつて起つた彼は、けれど自ら好んだ悲劇の主人公となつて、其の生涯は儂ないものであつた。若い生の法悦を體現するのは我々である。からたちの中に武裝を解かないで私は自由を歌ふてゐる。

私は自ら起つて、劔を進めることを欲せぬ。我々は正義の國に生れた。複雑な社會の悲劇を味はなくてはならぬ。自己を肯定する傍から、深酷な否定の聲が叫ばれて来る。光明と云ふ域は、凡て暗黒な幕で鎖されてゐるものである。

私は不徹底な社會の間に、固く築きあげた自我の城廓を守つて、最早や消極的の埋れとはならない。

私は私を繋ぎとめる理性と、勤務の力に索かれて、この大きい舞臺を走つてゆく。紛もなく、私は生育の途にある。私は自分の頭上をかすかに流れ去る、タイムの氣配を感じる。この時は不斷に、現在を未來に兩替して、提供してをる。

この平等な幅が擴げられて、いつか私が、私の足をどめて見た其の日の姿は、きつと美はしい姿に相違ない。

私は返へらぬきのふの杞憂を捨て、大きな心を培ふがために、今靜かに愁の中を出た。強い颶風にはむかつて、地平線のかたへ、私は進んでゆきます。幼い巡禮となり、燃ゆる信念を抱いて、舊衣を脱いだ私は邁進して行きます。(四・一〇二八)

山東旅行記——雪 松 生

暑い日盛りに白山の頂の雪も残り少なくなつて人々は海邊に山に避暑に赴く時我等四高の旅行團は高橋先生引率の下に一行八名長い旅路に上る爲に七月九日午後二時薩摩丸で神戸を出帆しました。旅行に就いて長篇の旅行文を書いて向ふの面白い事や有益な事や珍らしい事を載せ十分に支那朝鮮の様子を諸君に御報したいと思つたのでしたが筆不性なのと時間がなかつた爲に延び／＼になり今になるまで試験が切迫して來ましたのでとても十分には書けません。然し何か書けと申されますに書かないのも一度諾した男兒の面目にかかはるから其の責任逃れの爲に其の日／＼に書いた日記の中で主なる町々の處を忌憚なく僞らずに發表しやうと思ひます、何しろ日記を其の儘書くのですから別に大した所感等はなく時には矛盾した感想があるかも知れませんがどうか朋友の誼を以つて見逃を願ひたい。後に折があつたら何か書いて見やうと思ひますから其の時に又載せて貰はふと思ひます。

青 島

九月十三日 晴れ先日の餘風未だ靜まらず支那海の怒濤甲板を洗ひ二千噸の薩摩丸動搖する事甚しく酔ふ者多し。

起きて見ると昨日の怪雲は名残りなく消えて十時の支那海の日も中々に麗しい。朝飯も漸くにして濟して甲板に出た。

昨日の風に激された海若は餘憤尙醒めずに押し寄せて來る中を船は斜に突き切つて進む時々怒濤のため甲板は洗はれて飛沫は四方に散じて征衣中々に重い。

十一時頃飛燕が二羽又は三羽風の中を南に向つて飛んで居る。暖かな南國、生れし故郷の懐しく懸命の努力で進むで行く。時に風に妨げられて後退しながら。と此の事を考へると東の空が慕しい。懐しい故郷は眼前にある思かする。殊に一昨日夕暗の中に没した筑前の山々は明瞭に吾人の意識に上つて來る。燕!! 故郷!! 風!! 努力!! 其の中に深い意味のあるのを認め唯さい重い袖は一層重い。歸らうか故郷へ!! 否!! 否!! 矢は已に弓を放れた何等の得る處なくして此の儘おめ／＼戻つては男兒の面目何處にある。突進!! 奮闘!! 之即ち日本男兒の性來だ、本分だ例へ身を異境の空に埋むることも。屍は名も知らぬ異鳥の飼食となることも。十二時少し過ぎると勞山が霧の中に漠として顯れる。早三日の航海も終りに近い。之を見た乗客にも船員にも希望の色が輝いて來た。急いで船室に飛び込んで一行に話すと今迄青い顔して寝て居つた大館君や間君の頬に淡く紅の色が浮んだ。後二時間で目的の第一角たる青島に上陸出來るのだもの希望の色が顯るのも無理はない。時計は秒一秒と進む、勞山の姿は刻一刻と明になつて來た。やがて勞山の肌が明瞭になり木立も見える程になると漸く孤山も形を顯はし續いてイルチス山ビスマルク山も笑顔を出して吾人を歓迎する様であつた、其等山々の深い緑は麓の赤い瓦屋根と共に二日間渺漠たる海の外何も見なかつた僕等の視覺を満足させた。

流石に威を振つて居た海も漸く靜まり彼處此處に點々と支那漁師が前後の區別も別らない様な

船に乗つて舊式な釣をして居た。

港口の檢疫も無事に済み上陸準備をして甲板に上ると最早船は大港近く入つて棧橋上を有名な山東の苦力が往來するのが見える。吾等一行は將校の案内に従つて棧橋より右折し税關の前を通り獨人商館を過ぎて青島市街に出た。其處に支那式と日本式の俥が乗客を待つて居る。而して半里程で僅に六錢位のもの故日本人は労働者如きに至る迄皆之に乗り歩行して居るのは我等一行許りだ。然も服裝は稍整つて居るのに重い靴や何かを持つて歩くので支那人は皆驚嘆の眼を以つて見送つて居る。

坂を少し上つて山東通り邊に來ると日本式の低い小さい家並だ、而して其の十中八九は飲食店で看板には見るも嫌らしい事許り書いてある曰く美人あり曰一宿料何錢但し美人給仕云々と。其の次は雜貨店で主に日人を對手にして居るらしい。

四時漸く宿所に着いた、船から上つて半里の間實に五六里も歩いた程に足勞れた、吾等の宿舍は濱松町通りの元の獨乙海軍々人集會所であつたのだから今では旅店と市民會堂を兼ねて居る三層樓で内部に芝居や活動寫眞をやる廣間もある中々廣い家だ。

夕飯後米谷、間、大館、鷺尾と共に入浴に赴き青島に流通せる貨幣の複雑せるに聊か面喰つた。市街を散歩の後カッヘー、クロンブリントツに行き獨乙製の淡き麥酒に互に健康を祝し繪葉書を買ひ求め故郷の知人に音信をなしてから宿所に戻り床板の上に毛布を敷いた上に固い枕をしながらも船中の勞のために熟睡した。

九月十四日

晴れ、朝霧が霽れると共に暑氣加はり砲臺に昇るに際しては流汗服を通して不快を感じずる程なりしが午後に至り東南の微風來り一時に爽快を覺ゆ

朝目覺めて見ると早八時に近い。階下には一行の案内者の飯田參謀大尉を始め三名の將校が來て居て早起連中と快談最中だ。あわてゝ起き出し支度もそこゝにして出發した。

霧隠れの市街やアカシアの茂つて居る並木を右折左行して軍司令部前を通り青島小學校を訪ふた、庭前の廣場に我軍の二十八瓏の砲彈の破裂せる跡と紀念彈とを見て校内に入ると何しろドイツ時代に總督の命令で費用惜しまずに建築した小、中學校だけに壯大な白堊の三層樓で内部の機械標本に至る迄内地に類のない程設備が完全して居る。現在生徒は十三學級六百六人だ。其の成績も内地に比して毫も劣つて居ない。唯服裝は内地に比すると少しく贅澤な傾はあるが殖民地で被支配者との間に徑庭を付けるためには仕方あるまい。

孜孜として勉強して居る生徒を驚かしてから有朋町の海水浴場の傍を通り右方に我が歩兵二十名宛三組練兵して居、左に敵飛行機の滑走臺のある大きな競馬場の中を過ぎ高等山林局に向ふた、園丁の案内で園内を縦横に見物し林檎や名も知れぬ果物を貪り食ひ獨乙山林の制度の發展せるに一驚してから勇を鼓して一舉に羊腸の急坂を攀ちてイルチス(旭山)東砲臺に赴き砲彈の破片の散亂して居る中で參謀大尉から日獨戦について詳細なる講話を聞いた。

砲臺の頂上に我が戦死者の墓標がある、一同は無言の中に其の冥福を祈りながら四方を見ると彼我交戦の陣地は一々指點する事が出来る、先づ砲臺の前面に遠い、青く見ゆる山々は勞山と石

門山とて其の間の低いのが我が重砲兵の陣地の黒見の鞍部其れより近く右方に兀として天空に聳えて居るのが浮山其れと並んで左方の膠洲灣岸にあるのが孤山。砲臺の脚下にあるのが小堪山の東、西堡壘と中央堡壘、少しく左方にあるのが大東鎮東砲壘、次いで大東鎮堡壘、更に遠く松林中にあるのが海岸堡壘で皆一目瞭然である。

戦争の経過については新聞紙上で詳記された事故略すが滑稽なのは大東鎮堡壘に向つた英軍だ千五百の大兵を以つて之に當り他の諸堡壘は皆我軍の領に歸したにも尙命大切で之を陥す事が出来ず英軍に附いて居た我工兵一小隊が先頭に立ち之を占領した後で堂々と進入したそうである。僕は今更ながらに日本軍の勇敢と英軍の弱いのに驚いた。今西歐の天地で聯合軍の振はないのも蓋し理由のある事と思ふた。僕は一体現代流行の個人主義なるものに對して憤慨で堪らないのだ、こんな主義が天下を風靡したら折角二千年來練りに練り鍛えた大和魂なるものは消滅して義勇報國の美風は地を拂つて我國もやかつて西の隣國の様に亡國の悲運に會ふ様になるだらう。

次に僕は軍事上の智識は無いのに批評するのも變だが今回の青島攻撃は餘りに用意周到で大袈裟過ぎはしないかと思ふた。陸軍では旅順攻撃の經驗に照らしての事だらうが一体旅順と青島とは軍事上の價值が違ふ。旅順は滿洲軍か何時日本軍を突破して應援に来るか知れぬし又港内に遁入して居る海軍は例へ多少の損害は蒙つて居るとは言へ日本海軍を威嚇し又時に一大決戦をやるに十分であるが青島は懸軍萬里を隔て、後詰の來る當はなく海軍も無く殆んど軍事上には必要のない土地だから籠城して居る將士も決死の意氣はなく多少の面目さへ存するだけ應戦すれば降参す

る積で居たのだから遠くの方から大砲で少し砲撃して敵を威嚇さへすれば黙つてゝも落ちるのだ之は其の時の状態から推して見ても間違はない。要心して作つた電光型の攻道も亦三個旅團の兵も必要なかつたらうに――。

山を降て坦々たる道を中央堡壘に進んで其處にて更に説明を聞いたが要するに堡壘とか砲臺とか言ふものは全力を盡して人殺をする所だ。

歸りは道變へて大東鎮市街を通りモルトケ兵營で晝飯を喫した。此の大東鎮は獨乙が青島を経營するについて以前に其處に居た支那人を移した處で市街整然として碁盤の目の様で我京都より更に規則正しい町並だ。然し支那人一流の韭菜臭い様な油の腐敗した様な何とも言ひしれぬ一種異様の香には閉口する。此の町の青島に近い方には日本人の借小屋式の低い天井の曖昧屋が澤山あつて海山千年の石膏細工の女が多勢居て有象無象を綾なして居る。

モルトケ兵營は中々壯大なもので廊下には到る處軍人に對する金言が獨乙語で澤山書かれてある、例へば「君國の爲には身命を鴻毛の輕に比せ」とか「獨乙の將來は汝等軍人に待つ事多し」とか。兵營を出發してからビスマルク砲臺に向つた。始めはアカシアの涼しい並木であつて道幅も廣かつたが近道をした爲に道が峻しいのと暑いので閉口して仕舞つたが漸く絶頂に達すると涼風徐に面を吹いて涼氣頓に加はり神氣頗る旺盛となつた。

眼を放つて南方を見ると大港小港皆眼界に集り海の藍は山の緑と對映し其の中に赤や黒の家が立つて居て馬鹿に景色がよい。青島(島名)は港口に近く又他の島々も判然と吾人の前に展開して

居る少時は茫然と景色に見とれて居たが遂に其處を降り神尾山無線電信所から獨乙膠洲灣占領記念碑を見た。

碑文には大体「千八百九十七年十一月十四日獨乙皇帝と獨乙國の爲に海軍大將ジードルリッヒ此處を占領し此處に其の記念として此の石に刻す」とあつたと思ふ其の傍には支那人の大德國(獨乙)に對する稱徳碑がある、其の獨乙語の碑文の上に大きく「大正三年十一月七日」と雄健な筆勢で書いてあつたのは痛快だつた。

獨乙は支那人間には村老が勢力あつて一切の事は彼等の中で左右するのを見て其等の老人に賂して此んな碑文を書かせ支那人を鎮壓する等中々する。日本人は軍には強いが此んな事になると遠く彼等に及ばない、其の證據には三十七人の獨乙で此處を治めて居つた時には盜賊等は無かつたそうだが今は軍政中で憲兵の力で治めて居るに拘らず鼠賊が絶えぬそう。兎に角殖民が初ると先頭には天草女次には浮浪人其の次は飲食店雜貨店と小資本家の人々が入つて殖民地の劣等な奴等と互に少さい利を争ひ居る様な現在の日本人で巧く彼等を統御して行く事の出来ないのは當然だ。僕等は内地の元氣ある取進的な資本家かごし／＼移住して彼等にも多少の利を得させ自分でも亦利する様にならなくてはとても完全な殖民地を經營する事は不可能だと思ふ。又來る日本人も一擱千金を夢見て來るから間違つて居る。何處にでも金は轉つて居るものではない。其處に着實に永住して金を貯め様と思へば食糧品は割合に安く仕事は多い故容易に蓄財する事が出来るのに泡錢を宛にして少し金を得ると贅澤な方面に費消するから何時迄經つても貯へられずおま

けに持參の金は失ひ仕方なしに勞働方面に行かうとすれば生活程度の低い國民の爲に壓迫せられ遂には金を得る道無なつて日本人同志互に食ひ合つて日本の國家的名譽迄傷ける様になるのだ。

市街を見ても平凡故音信に時を費した。

十五日 今日昨日に劣らず中々に暑然し夕方の微風の爲大に慰められる。

昨日は青島の北半面を見學したが今日は南半面の視察でかくして全部の見物が終るのだ。

八時半に出發して停車場前の廣場を経て日本經營の新市街の未だ設計のみで道路すら完成せず此處彼等に日本特有のバラック式板張の家を点々せるを見ながら屠牛場に向つた。

此處は其の設備の完備せる点では東洋に於て誇るに足るそう。現在人夫の不熟練に拘らず能く日々四百頭の山東牛を屠り皆冷蔵して浦鹽に送り露軍の糧食となるそう、所長は尙將來全力を盡したら日に五百頭は十分に屠殺し得られると言つて居る、獨人の造つた屠牛場で殺した牛が歐洲の天地に行き敵國の露軍の糧食となる等如何にも面白い。

屠牛場を辭して裏手の下水排出唧筒のある處に行つた。元來下水排出は水道の有る處では必ず設置しなければならないのだが日本内地では設計費用の多額なものと使用材料即ち日本紙では下水に滞りが出來るので最大都會の東京市でも問題になつて居るが此處のは永久的の組織になつて市街が尙三倍に擴大しても十分に用の便し得られる様に出來て居る、其の地形に依り全市を三分し其の各々にて沈澱物を取り除き下水のみを此の中心部に送り來り其の下水は更に唧筒の力によりて二里程離れて居る灣口に送り其處より海に放出するのだそう。

下水排出所から發電所に行つたが僕は少しも此の方面に智識も趣味も無いから唯見物した許りだ。

暑は次第に加つて来て緑並木の下道も堪らない程だ、汗を拭ひながら沈没船引揚事務所に至り小蒸汽に乗り大港の港口近く行き其處で最後の引揚事業を見た、船は千八百噸許りで十一時半頃から浮き上つたので僕等の到着した頃は漸く船腹が水面上に表れた位のものであつたが刻一刻に浮いて一時頃になつたら水平線上七時も上つた。

小蒸汽の中で暑い炎天の下で飯を食つてから更に浮船渠に向つた之は全部五體から成り、初め一體を作り漸次に補つて完成したものだそうだが船渠の修理すべき船の最大噸數は約一萬八千噸で現時東洋方面に活動して居る二三の商船を除いたら皆いづれも修繕する事が出来るそうだが、今は底部を破壊されてあるので海底に固着して三尺位しか水面に顯れて居ない。

是で青島の見物は終つた。僕等は直ちに腕車を驅つて總督府官邸に赴いた、然し總督は少し前に軍司令部に行かれたので其處で麥酒と紅茶の御馳走になり贅澤な室内の裝飾を見てから軍司令部に行つたが又行き違ひとなつて總督に面會する事が出来なかつたが軍司令部の樓上で山田參謀長より山東鐵道に就いて講話があつた然し是は再三新聞紙上に載せられてある事故除いて其の話の中の二三の逸話を書かう。

十月三日に日獨戰爭に就いて日支間に交渉が濟み維縣以東は戰爭地帶となつたので陸軍は鐵道の破壊せられん事を恐れて騎兵約〇〇〇を特派したそうだが。其の時に其の日の夜の十二時を期し

て日本軍は占領に來ると獨人等は思つて夫迄に鐵道を破壊して逃げやうと考へて居たそうだが、然し其の時には士官も兵士も皆一樣に時間を〇〇〇早くして維縣驛に乗り込み機關車に盛んに黒煙を上げて將に出發せんとするに先ちて驛長か知人と別離の盃の最中に飛び込み彼等を捕虜にして以つて鐵道の破壊を免れたそうだが。外交の成敗の分岐点は實に此の機微の間に存在するものであると信ずる。

次に維縣以西も占領しやうとすると支那では其の以西は戰爭區域でないのを楯として一步も却かず濟南の一個師團をして之を守らしめ我が鐵道の占領を妨げたそうだが。日本では仕方ないから最後の窮策として鐵道線路の我が權利内にあるを利し維縣以東に兵を派して支那人は例へ往來なりとも一步なり我が線路内に入るを許さないで半島を南北に別け交通を遮斷して仕舞つたそうだが。其處で彼は仕方なく線路外に出ないのを約として以西の占領を許したそうだが。

青島の視察も講話も愈々終つた。最後に僕等は自由行動を取り三名の友と共に獨逸海水浴場に行き西洋人の攻撃あつたにも拘らず日本の慣習を楯として澤山の男女の異人中を猿股一つで縦横に游泳して日本男兒の元氣を示してやつた。

夕方友と打ち連れて山に昇り更に市街の見物に散歩がてら出掛けた、僕の宿所のある獨人町を二三丁波止場近く行くと支那市街で瓦の色で別けてある。即ち獨人の市街は赤色の瓦で邸宅の十分の六は庭園だに拘らず支那市街は黒色の日本式の瓦で庭園等は殆んど無い。

始め獨人は支那人全部を大東鎮大西鎮に移して青島に獨人のみの市街を作らうと計畫したが種

種の不便の爲に特に一部を限りて彼等の住む事を許したるうだ、然し其の支那市街の表通は殆んど日人の家と化し彼等は多く裏店の様な處に住んで居る。而して彼等の大部は雜貨店飲食店で主に支人の労働者を對手にして居るらしい。

支那人町の不潔不快に散歩がてらの清興も破れて歸つて寝たのが十時。

四日の月は西の方に當りて淡い光を投げて居る、明日は晴らしい。而して明日からは愈々山東の内地に入るのだ支那の中原に臨むのだ。願くは旅行に幸あれかし。」

のアルプス縦走記——實

發端

近年殊に今夏は登山熱が甚しく盛になつて各地に各種の登山計畫が企てられ恰も其極度に達したかの如き感があつた。私も多少山岳に愛着の心を抱いて居るので此等の登山計畫を耳にするに堪へられない執拗な精神に囚はれ身となつた。今まで可なり登山も爲したが今年も何かと物足りなく感じて居た矢先に叔父の南日重治氏等に伴はれて十一日間に亘つて山岳縦走旅行をする幸を得たのである。今其の概要を同好の士の参考にも記して見る。

先づ同行の人を擧げると。木暮理太郎(山岳會員)南日重治(同上)人夫として宇治長次郎(富山縣上新川郡大山村大字和田)宮本金作(同上)澤崎源次郎(同縣下新川郡前澤)である。

諸君も知つて居るだらうが木暮氏は二十幾年南日氏は十數年の登山の経験ある人々で今回の縦走は二氏によつて二年前から計畫され今夏其の實行を見るに至つたのである。人夫長次郎は先達として深き経験を有する剛の者で嘗て參謀本部陸地測量部の先達を勤め越中劔岳に登り一路を開拓して其の登つた豁谷を長次郎谷と命名された位であつて登山家には随分重きを置いて居る。而して其際に山頂で發見せる錫杖は今も尙ほ參謀本部に保存せられてある。宮本は元は獵夫であつた

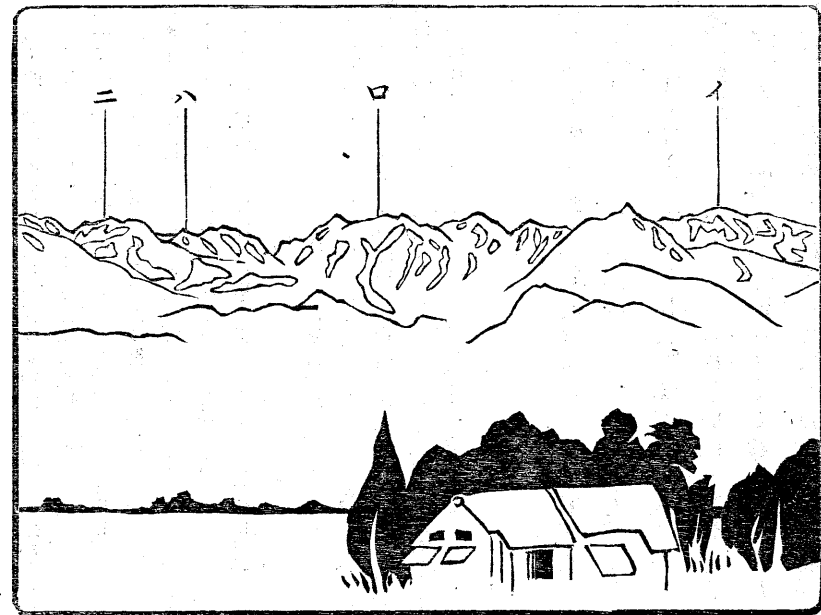
が傷を負ひなごして感ずるあり今は全く止めて四足獸の肉を口にしない程に身を慎み登山の先達をして居る。宇治も宮本も大柄で頑丈なこゝは板金で包まれてあるやうな體格で住所や職業の關係上で立山、劔澤、針木、黒部などの地理に最も精通して居るから其邊の跋涉については第一に指を屈すべき先達であらう。澤崎は弱年で深山に踏み込みし経験こそはないが山に育つただけ山に就いての知識には乏しくないから人夫としては先づ役に立つた。私達は最初三人に人夫二人として出發したが如何しても堪へ切れないと知れて途中頼んだのが最後の澤崎である。これでも私達は各々二貫位は背負つたのである。元來一人の登山者に一人の人夫では辛じて間に合ふに過ぎないので少くとも二人に三人の人夫が必要である。序だから言つて置くが信州あたりの人夫より越中の人夫は總てに堪へ得るゝ登山家は一樣に言つて居るが私も此の旅行によつてそのやうに思はれた。

次に所持品を列擧すれば各一人リュックサック、カンヅキ、氷斧(鹿口に可)、飯盒、毛布二枚、冬褌衣三枚、冬ズボン下、燈油紙、莫塵、細引繩、湯呑、ノート、鉛筆、ナイフ(大)、興奮飲料一壺などで凡そ二貫餘り人夫には天幕(六人入)、鍋、米、味噌、副食物(鯉節、油味噌、紫蘇粉など任意適量)、茶、砂糖、漬物(奈良漬一貫目三日にて消費せり)草鞋(五十足)、小田原提灯(必携)、蠟燭、マッチ(大箱一ツ)等にて人夫三人に分擔して一人に七八貫は背負はせればならぬ。此外寫眞機、望遠鏡、絆創膏も必要であるし草鞋掛の如きも極く強きもの二三足は準備すべきである。

鯨捕り

七月二十五日日本アルプス縦走の第一步を富山縣下魚津町より起すことにした。兼て約束した通りに私達を始め人夫も總て五人は此日の午前中に魚津に集つたので鍋を買ふなどの準備をして都合上早かつたけれども中食を濟して十一時過ぎ愈片貝川に沿ふて踏み入るべく發足した。相變らず暑さ強く直射の日光が磧の石礫に照映するあたり堪へられないほど苦熱を覺えた。魚津から凡そ三里にして前平澤に着いた。此處で食糧品の大部を得んとする考であつたから直に奔走した。立山まで四日行程と見積りそれ丈けの分を買ひ入れることにした。所が一行の大に困つたの

は味噌だけは得られたが最も大切な米が求められないことであつた。僅か一斗五升のものも白米としてはないのである。全村を東西に馳驅し對岸の東藏をも求めしめたが矢張り骨折りに過ぎなかつたので痛く當惑させた。そこで荷も重過ぎるから人夫を雇ひ入れて米を買ひ入れ明朝露宿地で會合すべく止むなく言ひ付けた、是が澤崎である。かゝる間に盛夏の太陽も漸く西に傾き出したので此處を去つて更に奥に向つた。暮色片貝の谿谷を罩め兩岸の翠色奔馳する激流に淡く反映して居る。も早や進むべくもあらず奥平澤を離れて僅にして磧に適地を擇び野宿の第一



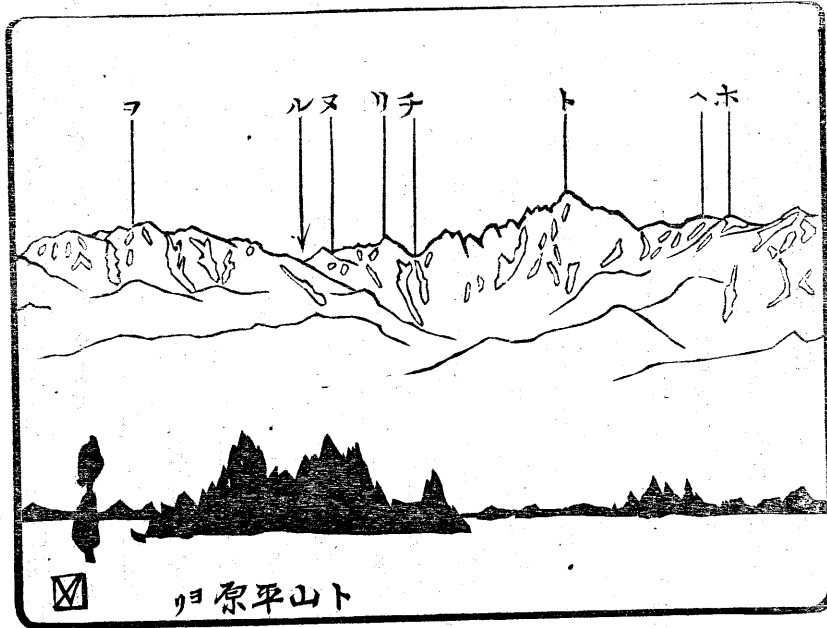
(五六)

イ、藥師嶽
ロ、淨土山
ハ、雄山
ニ、大汝山

夜の準備をした。程經て夕食は出来たから焚火を中心に車座となつて味噌汁に胃液の満足を充した。五つの面が赤々と輝いて居る。食事も済む頃箆や網を手にしたる鯨捕りの數人が來た。彼等は立ち寄りながら焚火を圍み暫し話をして私達に興を添へて呉れた。此處は未だ高くもないので天幕内は蒸し暑く加ふるに蚊軍に押し寄せ來られては殆ど圓かな夢路を辿ることが出来なかつた。

雲の海

二十六日朝四時床を蹴り片貝川の谷を罩めたる冷かな朝の霧圍氣の間に身を起した。上流の方を眺めると重なり重なつて居る山々の



ト山平原

ホ、大日嶽
ヘ、別山
ト、劔嶽
リ、三ノ窓
ヲ、仙人山
リ、小窓
ル、大窓
ヲ、毛勝山

(五七)

間から奥大日岳の残雪が見えて山といふ氣分を味ふことが出来てすがすがしい初心な心になった。前日雇つた澤崎は約に従つて米を擔うて來り合せたので今までの不安な心を靜めることが出来た。一同發足したのが六時であつた左に僧ヶ岳を見て。やがて一里も片貝の川谷を行くと二つに分れた所に出た。右をミナマタ谷と言ひ左はアブキ、ヒノマタの二大雪溪の合して來るものである。數年前南日重治氏は同姓の二三の者とヒノマタ谷から毛勝山へ登りこゝから半日行程で達したといふ經驗を有するので異を好む私等は右のミナマタ谷から登ることに決心した。此の点から一里の間は炭焼小屋が散在しあるかなしの小徑は此等を縫ふて居るのであつた。間もなく此の徑も消え失せて跡方もなくなつたから藪の中を潜り谷水を渡り川を傳うて強て路なき所を辿る辛さは人の想像出來るものではなかつた。程經て正午近くになつたから食欲の促すまゝ奈良漬に舌鼓を打ちミナマタの谷水を沸して茶を入れそれを啜る味は普通のものではなかつた。

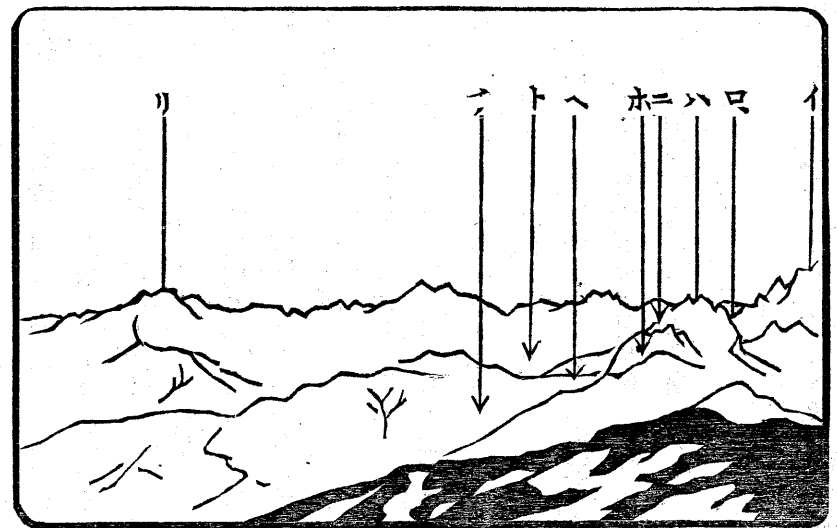
坂様谷の落合からは一大雪溪となつて居るのを知つた。雪溪の底からは融け流れる水が轟々奔騰して岩にせき風を起して飛沫天に冲し白雪散じて朦朧たるものであつた。實に一大雲の製造所である。危ぶなげな足付をして心元なく上へ上へと雪の上を行くのであつた。聽て二十丁も來たかと思ふ頃最大難關に突き當つた。それは直下數十尺の大瀑布が行く手を充塞して居ることであつた。兩岸は峻崖絶壁で足の踏み場もないのである。無殘や前進は斷れて仕舞つた。思はず歎息して途方に暮たが長治郎始め他の人夫等は彼等の熟練なる巧妙を以て脊に八貫そこの荷を負ひながら岩間を見逃さず手を入れ足をかけて遂に此の難關を通り越して登つて行つた。後に取り殘

された私達は進退維れ谷まつて茫然自失の有様であつた併し何とかせねばならぬので三人は細引繩の助を借りて心もおどろしなから辛じて乗り越すことが出来た。全身は冷汗でビツシヨリになつて居た。木暮氏は此の人夫の熟練を歎稱して他の人夫ならばなす能はざることで恐らく引き返すの止むなきに至つたであらうと言はれた位だから一寸口には言へない嶮難であつた。參謀本部五萬分一地圖にもこの瀧のないところを見ると恐らくは陸地測量部からもこの邊には來なかつたのだらう。是のあたりからは釜谷といはれて大岩塊は轉り雪溪は所々瀧のため破壊せられて進路はかぎらない。かゝる困難を身に感じつゝも急ぐほどに暮色蒼然としてあたりを達めて來たから仕方なく山腹の僅な適地を卜して露宿の地と定めた。傾斜地で天幕も張れない。これで今日は凡そ六里位進んだのである。以上の次第でミナマタ谷をとりし爲めに一日も豫定が狂つて來た。こゝは標高一八五〇米を示し(以下標高の數字は總て米なり)日本海上照り榮え鮮かなる落暉を見ては偉人の終焉を見るが如き感として自ら氣宇の廣大なるを覺えた。すでにして高空から沈む雲が靜止すれば一大雲の海を現して私達は恰も孤島にあるの感がした。全くの露天であるから冷氣烈しく夜中眼覺ると衣袂露を結ぶこと頻りであるが舊六月十五夜の月は皎々と薄靄を排して現はれて床しく雲の海も拂れて遙か富山あたりの電燈が月下に燦然として眼眸に入り來つて沈々たる夜も自ら更け行くのであつた。

兎の子

二十七日午前六時出發更に雪溪を登りて遂に毛勝の尾根に達した。こゝで羚羊に遭つたのは嬉

しいやうな賑やかなやうな氣がした。越
 中で猪シといふのはカモシカの事で眞の猪
 は居ないやうである。右は劔岳から立山
 連山が手近かにあつて續いて鹿島鎗、白
 馬の連山が黒部を隔て、前面に並んで居
 る。呼べば答へん位だ。此の邊は薄桃色
 の石楠花今を盛りと綻びて雪に映つて非
 常に私達を慰めた。是所に荷を下して左
 へ尾根傳ひに這松を踏み雪田を渡つて凡
 そ一里にして毛勝(二四一四・四)の頂上
 に達した。岩穴から二疋の兎の子が現は
 れて捕へられたも暫しの興であつた。休
 み乍ら展望を恣にして英氣を蓄積し臙て
 元來し路を再び辿る。此時も亦雷鳥の雛
 を捕へることが出来たが間もなく自由に
 してやつた。再び荷を脊負つて尾根を下
 るほごに清澄なる谷水を見出して午食の

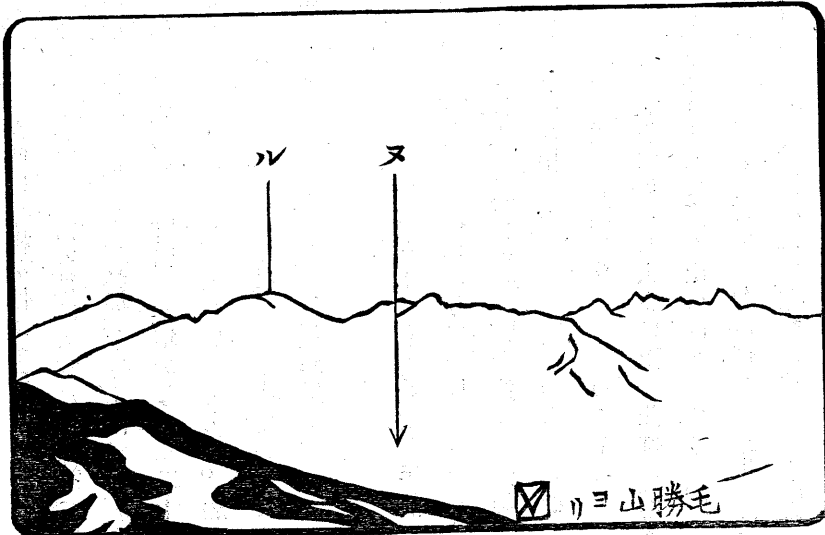


イ、劔岳
 只、三ノ窓
 ハ、仙人山
 ニ、小窓
 ホ、大窓
 ヘ、池ノ平
 ト、黒部谷
 チ、小黒部谷
 リ、鹿島鎗
 嶽

準備に就いた。

午後黒部に面する雪溪の部分を経んで
 少し登ると猫又山(二三七八)の頂上に直
 ぐ達した。毛勝より此の邊の雪溪の一勢
 に黒部に突進するあたりその雄大なるこ
 とは白馬のそのの到底及ぶべきものでは
 なかつた。頂上の僅の叢の間には白きゴ
 ゼンタチバナ、紫赤のオホサクラソウ、
 黄金のキンバイ、イハカガミなどとりど
 りに色どつて色彩の美なること恰も繪を
 見るやうであつた。

大窓へ出でんとすれどもガスが襲ふて
 方向すらも判然しない。小さな尾根が多
 いので磁石で見ても見當が附かないで五
 里霧中に迷ふばかりであつたが僅の霽れ
 間を擇んでは長治郎の神通眼を以て尾根
 と谿谷との關係を見誤らずに千仞の鬼と



ス、黒部谷
 ル、白馬

化すること丈は免れて少し宛進んで行つた。かうした間に尾根を傳ふて居る切り分けを見出した。蓋し十數年前農商務省が開いたもので今は下生が繁茂して何の役にも立たず却つて切株などが邪魔になるのであつた。之が終ると小さい乗越^{ノリコ}へ出たが早くも野營地を擇ぶほごに遅くなつたので黒部へ向へる折尾谷を下ると雪溪の盡きた積にと定めた。野營の適地がないと二十丁も谷を下つて明朝の苦しいのも犠牲にして仕方なくかへることもせねばならないのである。然もさほどの適地ではないのである。山上から吹き下す氣は冷さを感じるに甚しいものであつた。亦も雪溪上にカモシカの跳び歩くのを見た。此所は標高一四〇〇であつた。行程四里半。

鍔鎌の刃渡り

二十八日六時半出發昨日の雪溪を登り左に折れて小さな谷を上ると赤谷山の手前で昨日の尾根續にとりついた。是を辿つて赤谷山(二二六八)を越えて僅に切り分けを見つけた。或は嶮難惡路を攀ぢたり、或は草を數丁の間滑り右に下り左に上り或は熊の足跡を辿りて精神的肉體的に疲勞して夕方漸くにして大窓に着いた。赤谷山附近の尾根に至つては實に鍔の刃の如くに鋭く瘡せて左右は急勾配にガレて赤肌を現はし加ふるに代赭色の岩石風化してぼろ／＼となつてこれに據まりこれを踏むの危険いふばかりなかつた。一体釜谷附近から大窓に出る間殊に猫又より赤谷を経て大窓に至る間及び仙人山、劔岳附近は木暮氏等も未だ多く出會はざる危險の所と云はれた。諸君とて行程から察して理解さるゝであらう。この日の行程驚く勿れ僅かに三里。これで終日全力を注いでの仕事である。身には傷も可なりを負ふた、途中にて左側に當つて常に奥鐘山のガレ

を見餓鬼山の右側に當つて大黒銅山の小屋も見えた。これ等の山蔭には祖父谷、祖母谷、奥不歸谷が黒く妖氣を立ち昇らせて居る様である。大窓は白萩川の左を遡りつきたる所(二二八〇)である。

仙人に成り損つた

二十九日今朝は顔も洗へなかつた。水は小黑部に面せる雪溪を數丁降つて僅かに得られるのみであつたからである。このころは私達は毎日續けて雪の上許りなので雪の日光反射で熱くはないが皮膚が焼けついて顔の皮もすっかり剥げて眞黒になつて居た。傷もついて居る。ズボンが全く形なく破れて居る。それに顔も洗はんだから私達の有態は如何か諸君の御判斷にまかせて置く。雪で焼けるのも偉いもので澤崎も眼を悪くした。

今日は辨當と細引のみを腰にして空身で出發した。仙人山を趣えて劔岳に登らんと企てたが全然失敗に終つた。今日の惡路は格別でその嶮難なことは言語に絶して従つて路も抄らず仙人山にさへ午前前に達する見込みがなく前途の望は疾に斷れて引き返すの止むなきに至つた。結局仙人山に登ることが出来なかつた。併し元來た路を歸るも亦殆ど不可能事であるを發見した。折から右側に當つて白萩の雪溪を見出したからそこそ容易ならんと思つて行くことか大岩壁又大岩壁、這松又這松で人夫すらもごまきするの處であつた。細引繩を屢々使用して命から／＼雪溪に下り着くことが出来た。間もなく大窓からの會合点に達したので更に大窓に上り始めた。すると右方に當つて十數人の人夫が路をつけて居るのを見た。即ち小黑部の鑛山道であつた。道と

いへば立派に聞えるが型ばかりで針金を渡してあつてそれに縋つて辛じて行ける位のものであつた。此の道は下つては早月川の伊折に至るのである。此れに登つて大窓についた。早々に荷を整理して發足したのが午後三時過ぎであつた。小黒部に傾斜せる雪溪を下ること約一里にして小黒部鑛山事務所に達した。此處で探掘せらるゝものは近時砲身などの合金に用ゐられる輝水鉛である。鑛主醫學博士岸一太氏が此日到着したとの聞えがあつた。地圖上で豫測し或は富山平原から見つたて魚津から立山まで四日で十分行けると見積つたのが抑々の間違であつて今日で早や五日を費したので食糧も残り少くなつた。事務所の好意で一升の價貳拾四錢の實費で分與して貰つた。此處を去り更に鑛山道を進み雪溪を下ると池ノ平に出た。交代時とて鑛夫二十數名の歸途に出遭つた。彼等は口々に困難なる勞働なることをこぼして行つた。山腹の試掘を歩きつゝ見ると黒灰色の鉛の如き鑛石が岩に輝いて居つた。是れから小窓の雄大なる雪溪を下つて劔澤の岩屋(二六九五)に達して露宿することになつた。劔澤の名物山竹の竹子を味噌汁に入れて喰つた。その美味と柔さに歎賞叫を發せざるを得なかつた。今までも汁の中へは野營地附近で採つた獨活、蓬、ダケワラビ、薊など入れたのである。

金カンジキの音

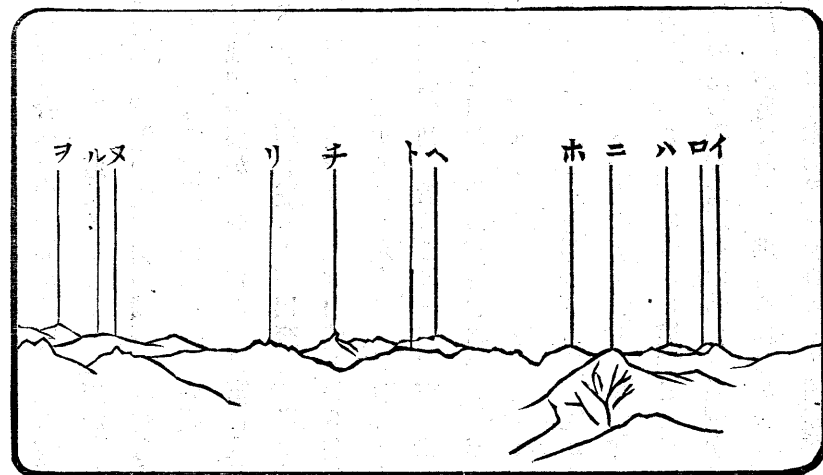
三十日午前六時半出發昨日來の路を戻ること二三丁にして左に急峻なる長い雪溪に登り始めた。餘り急勾配なので危険を感じ到底登れさうもないので初めてカンジキを穿ちて登つた。ザキリザキリと云ふ音は實に何とも云へない快感を與へて歩行を確實ならしめた。人夫等は猶もカン

ジキを用ひず然し容易に登つて行つた。折から重なり合へる山の間から照し來る朝暾に雪溪の上部二寸位は融けて軟くなつて居るのでカンジキも却て滑る道具となつて心を驚かしたことも少くはなかつた。二時間ばかりにして遂に三ノ窓に達した。遙か淺間山の噴煙は稀薄な上層の大氣を透して天に棚引いて居つた。是よりは嶮阻を以て有名なる劔嶽に向ふので氣の張り方も一通りではなかつた。この劔嶽も數年前長次郎の先達で陸地測量部から登つた迄では實に人跡未踏の地で又決して登ることが出来ぬとなつて居つたが其の後引き續き登る者が出來た。道は總て例の長次郎谷である。尤も二三年前木暮氏、南日氏等の一行が危険を冒して別山續きから登つた例等がある。扱て是よりは劔嶽獨得の枯れた岩石を踏み攀るのだから危く足をさらはれんとして身の毛もよ立ち冷や汗をかいたこともあつた。それで例の細引の助を借ること三回、右に絡み左に絡んで岩に縋り石を踏んで登る程に長次郎谷の雪溪の上部に出た。此の雪溪を斜斷して遂に雪溪の頭に出た。是からは足跡も發見せられて臙氣ながらも路らしいものが頂上の方へ導かれて居た。これを辿れば割に樂に頂上(二九九八)に達した。未だ成功したことを聞かざる三ノ窓からの劔嶽登攀に成功していふべからざる愉快を感じ脱俗の身は超然たる崇高の念に満ちつゝ中食を濟した。此處の三角臺の板切に一行の名を書き又此の山の岩室にある罐詰の空殼に慣例とも見ゆる各自の名刺を入れて記念の名を留めた。此の際一高及び其の他の學校遠足部の名ある名刺を見ては彼等に占有せられた如くに思はれ四高の名を見なかつたのが實に遺憾に堪へられなかつた。愈山を下る時には全く長次郎谷をとつた。此時若い元氣な澤崎は一本の杖を支柱として滑走するその目覺し

いこと總てのもの、眼を見張らしめた。一時
間許りで右に山深く入り込んで居る雪溪に出
遭つた。此のものは別山に達して居るのであ
る。更に雪溪を下ると露營地近くで雪もなく
して劔川となつて居つた。あちこち川を渡つ
て四時元の岩屋に歸つた。時間も早いが再び
此處で天幕を藉ることにした。今朝登つた三
ノ窓の雪溪を人の四ツ這ひになつ居る位な大
きなカモシカの登り行くのを見ながら炊事に
従つた。

雷 鳥

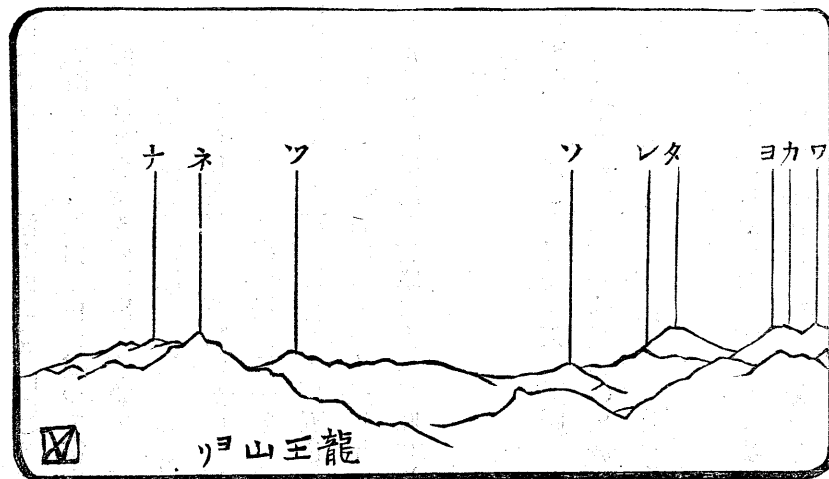
三十一日昨日の歸り路を黒部別山を左に見
て長次郎谷と出遭つて居る別山に向ふ谷に登
る。此雪溪は左迄で急峻ではないが餘り長い
ので飽き／＼した。かくて右に劔嶽續きの奇
岩怪石を眺めながら別山續きの尾根に達し
た、此處に來ると立山の彌陀ヶ原道、地獄谷



(六六)

イ、笠
ロ、御
ハ、乗鞍嶽
ニ、赤牛岳
ホ、水晶山
ヘ、穂高岳
ト、五郎岳
チ、鎗ヶ岳
リ、三ッ岳
ヌ、烏帽子嶽
ル、キダガ岳
チ、ノコギリ
(?)

の噴氣、ミクリが池、室堂などは足下に見え
て人の歩くのすら認められるのであつた。三
人の人夫を此處から一直線に室堂へ遣つた。
それは食糧品の買入れの爲めである。そして
浄土山の表麓で待ち合せることを約した。分
れてから私達三人は別山に向つた。雷鳥が二
羽行く手に見つかつたので石を投げると一羽
は鮮血を流して殞れたが一羽は遂に見失つ
た。倒れた一羽は哀れだつたが喉を絞めた。
雄山通過の際して神官に咎められるのも小面
倒と早速リュックサックに収めた。頂上(二
八八五)も過れば登山路があるので是を辿つ
て大汝を過ぎて雄山神社に参拜した。三角臺
標高(二九九二)。



(六七)

ワ、コマガダ
ケ(?)
カ、アサヨ
(?)
ヨ、地藏(?)
タ、富士
レ、餓鬼嶽
リ、唐澤嶽
ツ、七倉岳
ネ、針木岳
ナ、蓮華

本校遠足部立山登山班の諸君に會ふことも

ないかと期待したが既に發足せられた後であ
つたのは何だが物足らぬ思をした。

一ノ越からは室堂へ出です右に見て直に浄土山へと志した。浄土山(二八四〇)では二高生其他三人の學生、六人の人夫から成る一行に遭つた。大町から来て立山諸山に登つて富山へ出て歸ると云ふて居られた。浄土山を西に下りると室堂の南に當る小廣き原に出た。兼て一直線に出發せしめた人夫と出遭つた。米、味噌、パン(菓子望んだが菓子とは唯このパンだけであつた)漬物を仕入れて來た。一寸云つて置くが室堂は御承知のあんな所だから荷物運搬の駄賃も掛つて居やうが米一升金參拾參錢からしたのであつた。此處(二六五〇)は南に湯川に一氣に迫る急峻を控へた高原で湯川に沿ふて刈込池、新湯から立山温泉を見下ろし左手に當つては五色ヶ原續いて大鷲、小鷲の山々が眺められて眺望もよし場所もよかつたから今朝から容易く五里半の路を來て猶ほ時間に餘裕があつたけれどもこゝで野營と決した。先の雷鳥も食膳に上つて味はれた。若干臭かつたが私達には美味く咽喉を過ぎて行つた。

黒部の深潭

八月一日早や八月となつた。七月始めからの晴天續きで何より私達は天に感謝した。ほんとに斯くも長く續くのは不思議な位で今年は山登りの當り年であつた。一体私達の出發は普通より遅れて居たのであつた。一般の山登りは早や既に済んで居るのである。此等の人達は實に當てたのであつた。

昨日の路を登つて再び浄土山に至り更に龍王山(二八七二)に登つた。空晴れて雲の漂ふなく四圍の展望はよりよくきくのであつた。遠くは笠ヶ岳、御嶽、乗鞍岳、穂高、鎗ヶ岳、北ヶ岳、駒

ヶ岳、地藏岳、餓鬼嶽、唐澤嶽。地藏、餓鬼の間には彼の富士までが紫灰色の山態を判然と現はして居るのであつた。富士は此處から直徑七十里の處にあるのである。近くは藥師岳より赤牛岳、水晶山(一名黒岳)、五郎嶽、三ッ嶽、烏帽子嶽、針木岳、蓮華岳などは皆眼眸に入り來つて此等を摺伏せしめたかの感がした。

此の龍王山も亦岩塊だらけの枯れた巔で困難な山である。此の山を或る人は浄土山の頂上だと言ひ或人は別な山だとして居る。而して普通浄土山に登つたといふ人は所謂龍王山を窮めないものである。成る程見ては、僅か下つて登りその距離も近く共に一山を成して居る様であるから浄土山頂にするも良らう。然し昔から龍王山と呼び來たつて地圖にもあつたのを今更參謀本部五萬分一地圖に削つてあるのを見ると物足りないし又その名も面白いから私は特に龍王山と呼び度いのである。

是から東麓に下り又も雪溪に出て猶も下ると御山谷の上流に出た。右に曲つて行くこ小さい乗越を見出したからそれを越えんと分け入つた所が形ばかりの路を發見したのでそれを拾つて中ノ谷へと下つた。其際私は枯れ下る時に岩石を踏み誤つた爲めにその石を自分の足の上に轉がせて押し潰されんとし暫しは足の歪みも回復せず歩行は困難であつた。中ノ谷を少し登るとザラ峠から來る針木路に出て此處で中食した。此からは全くの路で苦勞もなく難作もなく此の白樺の林を縫ふて居る路を黒部へ下つて行つた。平ノ小屋の手前で右折してヌイク谷が黒部本流に合する所に出た。下流を望むと見える筈の籠の渡しが見えなかつた。後で聞くと今年はこの黒部の名物籠

の渡が幾何なる理かは知らぬが作られなかつたことであつた。今や名だゝる黒部の峽谷に身を置くのでその雄大に恍惚として實に天下に紹介するに十分價值あるものと信じた。深淵や岩壁に出遭ふと山に分け入り迂回せねばならぬから路も容易に埒らなかつた。かくして、磧のカモシカの足跡を拾ひ或は川を涉つて黒部と東澤の合流点(一五〇〇)に來て野宿することにした。今日はこの合流点近くの磧の無數に印せられたカモシカの足跡の邊で計らずも彼の劔澤でとつた山竹の子を發見したので早速多く摘んで晩飯の際に食したので相變らず頬を打つて喜んだ。多くの流木を拾つて盛に焚火をして川を渉る際濡したものを乾かし焚火を圍んで人夫等の痛快なる話の數々を聞いた。行程六里半。

熊の跡

八月二日東澤を遡り石を傳ひ水を涉つて進むに連れて烏帽子嶽、三ッ嶽、五郎嶽などが左から前方に互つて見えて來た。標高一七五〇のあたりたら右に谷を求めて赤牛岳に向つた。この東澤を幕直に飽くまで行けば水晶山に達するのである。赤牛に向つた谷を登ると、所々に瀧の落つるありて當惑したこと屢々であつた。二三〇〇位からは此谷も雪溪となつて居た。その雪溪の破れ間からは濛々たる白雲の漲る内に雄大なる瀧の懸るを見た。それで行手を阻まれたので右に藪や叢の中を潜り抜けて居ると聽て生々しい草を分けて踏み込んだ熊の趾跡を發見した。それは幅三尺位で追々に上に向つて居た。その跡を傳うて上に行くに従ひ這松のため甚だ惱まされた。更に上つて行くと這松も丈け低くなり一面の草原となつて居た。是を登り盡すと赤牛岳の尾根で赤牛の

名に背かず赤い岩塊から成つた此の赤牛の脊は左に頂上を過ぎて遠く水晶山に續いて居る。此所から頂上が眞近に見えて居るが赤い岩赤い土砂の爲め容易に達せられなかつた。漸くにして頂上(二八六四・二)に達した。展望を恣にするに右は立山から五色ヶ原を望み前は直に黒部の峽谷を隔て、藥師嶽の大カールは一面に白雪に掩はれて對して居る。又その藥師堂すらも肉眼で認められた。左は奥平の高原の手前に岩苔小谷の池が見下され水晶山に續いて五郎嶽、三ッ嶽、烏帽子嶽を綴つて居る高低少なき緩かな尾根が赤牛から水晶に連る尾根に平行して走つて居る。水晶山と五郎嶽との間からは遠く鎗ヶ嶽も見える。扱て此より水晶山に行くには比較的良き尾根を這松が外縁となつていくらか人の足跡が見出された。水晶山に近づくに黒き大岩石が積まれて山をなして居つて幾分危険を感じた。斯くて水晶山の頂(二九七七・七)に達したが茲に心を惱ましたのは今まで續いた夏の空も怪雲に遮られ天候の變徴を示したことであつた。由來當山は水晶を産し昔越中有峰から嶮を冒して探りに來た者である。それで人夫等は漸く日も暮れ雨も降り出したにも拘らず珍らしくも水晶を掘り出すに餘念なく出發を促しても頓着せないのです甚だ困つた。かゝる間にも日は暮れ雨となり風さへ加はつたので大急ぎで尾根を東に進んだが僅にして宿りをせねばならぬやうになつた。併し適當な地がないので仕方なしに尾根の東澤に面した空地を定めて烈風雨に抵抗しながら露宿の準備をした。自然の威力は愈猛烈となり人爲の能く防ぎ得るものではなかつた。加ふるに腹は空となり水はなく寒氣はいや増しに強烈となつて血行も爲に凍え止まらんとするばかりとなつた。所謂萬年雪を鍋に融して米を炊ぐといふのだから手数がどれて仕方がな

かつた。しかも四邊は晦冥で展望するに由もなく只管此の風雨中に天幕を張り支へるに努めた。それから尾根の這松を伐採し來つて焚火をなし暖をとりながら今後の方針に就いて凝議した。最初の豫定では是から鷺羽嶽へ出で笠岳、雙六岳より鎗ヶ嶽に登りそして上高地に下る筈であつたが今や天候の回復は覺束なくなつたから最初の豫定を變更せねばならぬことになつた。それで先づ最も安全の法として五郎、三ッ嶽を経て大町に出づることにした。裂けんばかりの寒き烈風雨の間に眠に就かねばならぬといふ慘めさは又譬へんものもなかつた。其晩はウト／＼毛布に絡まつて寝たけれども大空を響かせ前方の東澤の雪溪を吹き上つて來る疾風に夢破られて今にも倒れんとする天幕を支ふべく起ち上らねばならなかつた。

こま／＼

八月三日雨猶歇まず。顔も洗へず燈油紙で身を包み雨装束をして五郎嶽に向つた。ところが路の様子といひ山の状態といひそれと思はれぬ所があるからよく考へて見ると鷺羽に續く方向に辿つて居ることがわかつて引き返さねばならなかつた。かくて漸く雨を冒して五郎に續く尾根に出ると赤い枯れた岩石、砂礫から成つて居るので雨の日は可なりには險阻であつた。これから以後は今夏朝日新聞連載の日本アルプス縦走記にも詳しくあるから御參照を願ひます。これからは足跡の印せられあるを發見して眞砂嶽續きを越えて猶砂地を蹴つて進むと五郎嶽の手前で眞砂嶽に面し岩で囲まれた窪地に獵夫が小屋を設けて居つたが雷鳥が居つたといふと彼は直に銃をとつて獲物にした。五郎嶽(二九二四・三)の頂上を窮めたが雨に妨げられてそこ／＼に下つて今までと同じ

様な尾根を傳うて居る程に天候も直り雨も止んで來た。かくて露宿に適する稍開けた地があつて時間も良し此所で中食した。それから又更に三ッ嶽(二八四四・六)に登つて悠／＼休憩した。五郎より三ッ嶽にかけて彼の有名なるコマクサが可愛らしい花をたくさん見せた。三ッ嶽を下りると雲のためあたりの山も見え分からなかつたから方向を誤つてか何時の間にか元の方向五郎に向つて居る事がわかつて此處でも引き返さねばならぬ愚を再び演じた。今や三角点に磁石を据ゐて方向を定めるやら岩角に攀ぢて雨の斷れ間からあたりの山容を見んとするが見えないので心ばかり焦つて居つた時に長次郎の神通眼は遂に遙か斷雲の間から高瀬の谷に續いて大町の平原の横はつて居るのを見出した。是により大概の方向も見當がついたので進むことが出來た。聽て今まで山の傍に隠れて見えなかつた烏帽子に續く尾根が發見せられたから安んじて進むことが出來た。間もなく烏帽子嶽より手前十數丁にして一の窪地に出た狹少な地域であるが數組の野宿の跡が印せられてあるのを見受けた。是を越して一丁ばかりにして高瀬谷に下る路が發見せられた。此は烏帽子から濁澤に至る大ガレの右側を通つて居るから容易に發見せられる。一体此の路は林道で僅か一里半位で二五八〇から一一八〇まで下るのであるからその勾配の急なることが推知せられるのである。だから高瀬から登り來る時は空身で半日人夫は荷を擔ふ時は全一日を要するのである。故に下ると云つても二三時間は要するのである。時は早や四時を過ぎて居るから途中で日の暮れる憂があるから飛び下りるやうにして走り下り轉び落ること數回辛じて木の根に引掛るのであつた。この調子で一時間十分で下り盡して高瀬と濁澤との合流点に達した。餘りの早さに一行は驚

いた。豫想外に早かつたのを喜びホット安堵の思をして高瀬の谷を下つて濁の小屋に尋ね着いた。数名の岩茸取りが既に占有して居たから入ることも出来ず止むを得ず不動澤と高瀬との合流点(一二六〇)まで来て露宿することにした。岩茸採りの話によれば彼等は殆ど生命を賭しての業をやつて居るものである。上から数丈の繩を垂れてそれに絶つて懸崖数丈の岩壁の間の岩茸を採るので屢繩の切斷によつて千仞の谷に消え失せることもあるといふことである。

露宿地の直ぐ後にある不動瀧は有名なる華嚴よりも雄大である。稱せられるほどあつて鬼氣身に迫るものであつた。その飛沫を浴びながら露宿の準備にとりかゝつた。此處は不動澤から流れ来る水は濁り高瀬の水は上流の大地獄の硫黄のため色づき居つて何れも炊事にはよくなかつたけれども詮方なく高瀬の水を使つた。昨晚暴風雨に惱まされた意趣返しに圍り六尺長さ三間餘もある大流木の數本を持ち來つて磧一面の焚火をして濡れた物どもを乾し且つ煖をとりて心安らかに眠ることが出来た。あたりの山は焚火のため紅に照り返されて滿山の紅葉瞬時にして來たかど怪まれる程であつた。

山 火 事

八月四日起ると昨晚の焚火は猶盡ないで朝風にゆらいで燃えつゝあつた。出發の準備をして居ると早や昨日の岩茸採りの數名は各々數條の棕櫚の太繩の束を脊負つて仕事に出かけるのであつた。彼等は今日も數丈の斷崖に命懸の業をするのであるか。

是からは高瀬川に沿うて立派な路があり川を横ぎるに釣り橋もあつて容易に二里餘で葛の温泉

に着いたのは十時近くであつた。

途中左側國有林が一面に焼けて、尙ほ煙を上げて居るのを見た。これが可なり長く續いて居た。温泉で聞くと一週間前から起つた山火事で昨日の雨で幾分その勢衰へたのであると。山火事も手の出し様がなく唯燃え行くに消え行くに任せてあるのであつた。

温泉からは荷馬車も通ふ大道で山も次第に開け右後に當つて餓鬼唐澤左に針木岳などはアルプスの名残として姿を見せ行く手には大町の平原が山の人を待ちあぐんで居るやうに全面を擴げて居る。野口で午後一時頃中食をどつて大道一里餘りで直ぐに達した對山館上に人となり旬日の汗臭い身を湯に入れると氣も爽かに心ものび／＼して來た。宿の寄書帳に本校遠足部の佐々木君等の名を認めたときは會つた如くに嬉しかつた。私も稍誇大的に名を録して置いた。かくしてアルプスを背景として珍らしくも鷹揚な落ついた酒食に人夫諸共歡を盡し聽て平和な夢路を彷徨ふべく床に入つた。

翌くれば八月五日又も雨が降り出して針木越えも危ぶまれたので人夫等も私達と共に明科から汽車で歸途に就いた。

附 記

以上で先づ大約を書いたが後で抜け落ちたことが氣附いたこともある。又間違も無いとは絶体に云へないから先輩諸君の御教示を願ひたい。今冬或は明年の山岳にもこの縦走記は木暮氏によつて載せられる筈であるから特に詳しいことはその山岳を御参照下さい。山の見取り圖も二三葉掲げましたが勿論詳しくは解り難いであらう。地圖を指示しての話も面白からうと思ひますが御望みの諸君は何時でも私の所に御出下さい。櫻島の高臺から朝夕白禿山の肩に僅か頭を見せる越中皐嶽の白雪を遙かに望んでは今尚ほ當時のことを思ひ出すのであります。

友の死をきいてから——越路淡雪

(七六)

試験が済んだ、緊張して居た心が一時に緩んでぐらくして何も手に付かない、只歸郷と云ふ思ひが、一週間の健闘に疲労し切つた頭を、獨占してる。

六月二十三日午後十二時と云ふに、金澤發の汽車に乗つた、三等車の乗心地の悪いのに、虫が多くて尙更弱つた、が、この乗客を見ると、何れもこれも堪え難い生活に窘む流轉の身を、こうした喧騒の裡に夢の觀樂に酔ふのであるか、勝手な形相をしてにくたらしい程靜として居る。

トンネルから出た時、窓を開けると、大きな螢が數の知れない程、田から林へと闇を縫ひ行く……曇つた星のない夜。

神経の苛立つた頭にはそれが、云ひ知れぬ悲しい衝動を與へた、そして不安と懷疑とが交る／＼自身を壓迫する、けれども、自分には螢がどんな者と思はれたのか、それさへ云ひ得ない、やがて自分も睡りの神の暖い懷に抱かれて、現實の苦痛を超脱した夢路をとりとめもなく辿り入つた……労働者の多い汗臭い氣の漂ふ中で……夜はどうしても睡る爲めに作られた者であらう！二十四日午前五時久し振りで故郷の地を嗅ぎ得る誇を持つた、悲しい様な、なつかしさが胸一杯になつて、物めづらしく家人の顔が、映つて来る、何れもぼんやりしたうるんだ眼で私を覗き込んで、きまりきつた挨拶をする、俺には其の吞氣さ加減がにくたらしかつた、彼等は一体生きて何をしてるんか、生活と云ふ者に信念とか意義とか云ふ者があるのか、さすがに兩親の望は

俺の蒼白い顔を氣にして下さつた、これを除いて、彼等が俺に向つて云つた事は奔放な情熱的な、俺の激昂を何處迄流させた事であらう、俺はすべての事を嫌忌の中に浸した、俺の空虚な頭がどんな事を生み出して彼等を呪つた事か？午後七時と云ふに寢やうと思ふた、枕に頭を押し付ける様にして、眼を閉じたが蒸し暑い様な寒氣立つた様な空氣に神経は次第に昂奮して一時間許りねかへりを打つたり、色々とおせつて見たが到頭堪え切れなくなつて、起き上つた、コーヒーを啜つたり、煙草を輪にしたりしたが血の涸れてる故か益々神経は昂奮する、學校か休みだから表面丈でも吞氣に暮さうと思つて、力めて頭を空虚にし様とするけれども、色々な空想や追憶が充ちて來た上、俺が時々やる人生問題の煩悶が亦もや繰り返へされる様な事になつて、俺自身にも解らぬ様な事に思ひ耽つてる内に九時が過ぎた。

外へ出た、梅雨期のじめつたい空氣がいやに哀思をそゝり立てた、魔の手から逃れた様な月が冷かに人生の虚偽の争闘を嘲つて居た、螢の二三が新しい緑の叢の暗みから果敢ない光を放つた、そしてそれが泣き度い様な心の波立ちをさせた、靜つと佇んでると心臓がどん／＼鼓動を早めて血管全体に異様な響を感じた……やつぱりこんな晩はいやだ……と家へとび込んだ。

弟が葉書が來たと云つて渡すのをだらしく受取つた、見ると驚いた、驚いた刹那無意識に突飛な聲を出した、目はくるめえて手足はふるえた、激しいしつよくに立切れなくなつてばつたり尻を衝いた、堪へ切れない溜息がなきじやくりの様に壓迫してくるほんとに泣きたかつた。……それは友Aの死の報知……親友Aの訃であつた。早くから人生の束縛や苦痛を脱して自由な

生活に憧憬したAは石油坑で彼の職務に生命を奪ひ去られた、葉書丈では詳細を知る由もないが明朝頃には種のない田舎新聞にうるさく書き出されるであらう……、彼は到頭彼に月々薄給を與へた仕事に殺されて人間の罪過を殖したのだ……俺の頬には熱い泪が幾條か後を引いた。

それでは今夜はこの悲惨な報知を俺に豫知して居たのか？人生の暗澹な道程にふみ出した若い男の頓死を俺に暗示したのか？月の光は何んともなく凄く輝いて居たもの……葉書は讀みかねる程取り亂した字で認めてあつた、讀み返し讀み返しAの死に様を想像した、自分の室へ入つてから思ふさま男らしい情熱的な涙を流した、色々な過去追慕を次から次へと悲しいなきじやくりに移して行つた、俺の頭の中には苦痛煩悶懊惱困憊……包容し切れないこんがらがりが出來て短い一夜は次第に曉の光明に接近した。

翌朝七時頃疲れ果て、ぐつたりと寝込んだ、重い物で胸を壓されて息苦しい様な氣がして眼醒めた、うす曇つた空に越路の梅雨が哀思に沈んだ俺を鬱々しい氣分に包んで骨と皮丈に細らせ様とする、俺は直ぐに新聞を開いた、悲惨な記事は不要な所を誇張して人の死を輕視して居た、石油坑の瓦斯管破裂工夫三名焼死の外にAの死が加へられて居た、モト俺は混亂した、頭を冷靜にする丈の自覺を得た、追想は一年前の事を蘇生させる、Aは俺等と同時に中學を出て石油坑に技師見習として出勤した、彼は瘡せこけた男であつたけれども其の根性は浮薄な虚榮な青年に見受けられない眞摯な所があつた、彼は不斷の努力と不撓の勇猛心とで運動の暴虐に反抗しやうとあせつた、彼は石油坑で毛唐の技師の下で泥まみれになつて職務に盡した、労働の割に報酬は少なか

つたにも拘らず彼はこゝした過激な日々の労働と汚ない鑿井の仕事に云ひ知れぬ感興が湧いてと一とロータリーの技師となるのを望む様な欲求さへ萌して來た、そうしてこれが彼の生命を斷つ可き運命の惡戯に愚弄せられて泥まみれの仕事に執着し人生の奮闘の最初の階段であるなく落伍者となつた事を彼も人も夢想だになかつたであらう……

Aの性質には或る不可解な所があつた、所謂義侠心が餘りに逼狭に曲解されて彼を支配した事で、これが彼の美德であつたと同時に彼を死てふ不明の裡に導いた呪ふ可き運命の仕打ちに過ぎなかつたのだ、Aは瓦斯管が破裂して工夫が死際の苦痛を呻吟するのを聞いて、人の性は善と云ふ事の直感からしてか、彼はそれを助け様と火中に身を投じ逃げ所を失つて悶死した、屍体は黒くすく、け焼け爛れて異臭が鼻粘膜をついて名狀し難い凄惨の感を見る人々の腦裡に何か強い印象を與へたと云ふ、その男らしく情ある彼が行爲よ！美はしい強みある彼が心よ！それは讚美し嘆稱して止まないけれども、友たる俺は悲まざるを得ない、俺はそれが彼の死地ではなかつたとかやしく思ふ、中學時代の彼の曲解された義侠心を俺は思ひ浮べては泣く、彼は死んだ、俺は今友の無慘なる死を見せつけられて自分の貧弱な頭に科學や宗教で死の問題を釋かうと試みた、死は生の破滅だ、Aはも一居らぬ、骨丈は野邊の奥津城に投げ入れられて雨の夜毎に鬼火でも上げてる事か？心的作用は生きてる間丈かAの靈は何處に居るの？不可思議の界限は次第に侵されて科學が勝利を得るとか云ふが靈と云ふ事は人が不可思議に名をつけた不可思議な物か、果して存在するものか亦ないものか？宗教は只殺人の利刀だ毒刃ではない、佛教も基督教も現今吾々を魅

する様に美化せられて居る宗教として創始されたものではない、而も今の宗教家は其の宗教をなす可く缺陷のない様にして死を恐れる人間の弱点で衣食しやうとしてゐるではなからうか、宗教は各自に勝手に創造した方がよい、こんな情熱的な若い淺薄な思慮は不倫だかも知れぬがいくら釋迦でもクリストでも今日の飛行界の現實は夢みなかつたであらう新しい者が古いものに代つて行くのが當然で基督教も佛教も其の創始時代のものとは殆んど別物と思はれる程一方に偏倚してゐるものがある、妻のない僧侶が人生問題の全部を解決し得やう筈がない、キュリーが陰陽二元論を唱道してゐるが宇宙の成立は何處迄も兩性であるかそしてそれが物質上の説明のどん底か？人間の生命の餘りに果敢ない事よ！

Aは其の斷末魔に自分の死を知覺して死んだか？自殺者は其の死を知覺し死か生よりも強みのある事を思ふて自殺するのであらう、Aの死はほんとに悲しい、けれども死に方の淺慮か殘念でならぬ、高山博士は若くて死生を云ふものを罵倒してたが自分も四十にならずに死んだ、親友は愚痴どうぬぼれの屑籠で子弟や後輩は法螺の埃溜だとか云ふ人があるが博士もそれをやつたにすぎぬ、Aとは愚痴を云つたり云はれたりした自分には永劫にAの影は宿つて行くであらう、中學時代の幼稚な記憶がAの輪廓を明瞭に描き出す。Aの顔には活快な様な所に悲愴な相好がひそんでゐる、彼が死の誘因は其の遠くは彼其の人でなければならぬ、世間の噂も次第に立消え、激しい生活の争闘に日々に劣敗者を殘す人生の漂泊者にもAの影はうすらいで行くであらう、けれども自分にはAの死を報知した葉書の差出人の不明の事と共にAの死は自分の生命の續く限り時々よみ

返つて若い時代の追憶に生の暴露を泣かしむるであらう。

くれゆくあきのある日—— 嵯峨伊平

※

ある植物園の池のほとり、ある大木のかげに温室あり。

温室には叢生の花ほのかに顔ふ。池は、さびたる、藤だなをもつて蔽はれ、濃き緑色のかげに、かすかに波うつ。波の色は深く、汀の草花は、あたかも、まごろむに似たり。汀をはなるるやしばし。棚には、おほいなる金屬製の鳥籠をつる。その色は青くして且つ冷えたり。うなだれたる巢、中にささる。草花の千種のかほり、あまねく、あたりをこむ。されど、それは悲しきに過ぐるがごとし。

※

この小曲の第二節はある日の午後にして、温室四圍の玻璃は、鮮やかに耀くべし。第二節はその日のゆうべより、夜半にいたり、月光、園に漕ぎくんだり、しら露、樹々の肌に爽かなり。

現代、くれゆく秋、樹の葉はまだ染めざるころ。
ある植物園。

園守、 年老ゆ。

乗彦、學生。
園丁、少年。

(八二)

園守、温室の右角、ましろき切株の上に銀色の鉄を置き
さだめなき所作に耽る。年老いたり。

園丁、その傍に立てり。顔色容子たゞ眞純にして、少年
の夢、やうやく盡きなんとする齡なり。

園丁、おちいさん、梟が泣いてるせ。人間のやうに涙を流してね。ほんとうだ。ちつとあゝして、
いつたい、なにをおもつてゐるんだらう。(暫しのほど、かんがへに耽る。なにしろ、けふはおそろしい日
だからね。まだどんなことがあるかもしれない。もりちゃんも卒倒するしね。)

園守、そうかね。

園丁、そうかねぢやないよ。おちいさん、もりちゃんが死んぢまつたんだよ。それにね。人間
のやうにも、いへない梟が、人間のやうに泣いてゐるんだよ。ほんとうに僕にはわからない。

園守、ぢやが、(わしにはやつぱりそうかねぢやよ。(少年の顔みづめながも、もりちゃんが死んぢまつ
たね。そりや、わしにも、もりちゃんにも、あたりまへの事なんだしね、それよりか、おまへ、わ
しは、けさまで、栗鼠みたいに動いてたおまへが、いまのいま、そうして、おどろくしてゐるの
が、よつぽど不思議な氣がするせ。梟が泣いてるつてかい。そりやおまへ、あいつが、どんな
こゝろで泣いてるか、わしにだつてわからないさ。(所作をつゞく)

園丁、ぢや、おちいさん、おまへほんとうに、梟が可愛いのか可愛くないのかね。

園守、可愛いよ、むろん、梟は、わしを親のやうに慕つてゐる。わしは梟を子のやうに可愛
がつてゐる。

園丁、ほんとうだらうか。

園守、ほんとうだ。(平然として)

園丁、僕には解らない。ほんに親のやうに可愛がつてゐるほどなら梟のこゝろは解りさうなも
のぢやないかね。

園守、ところが、わかれや結構だが、わしにや、わからない。だと云つて子のやうにおもつて
ゐるのはほんとうだ。

園丁、僕には、ごつちだつて解りさうぢやないなあ、だが、まあ、おちいさん、行つてごらん、
梟は泣いてゐるから。

園守、あいつだつて泣くこともあらうさ——生きてゐるんだからなあ。(瞳をつぶりて) けれども、
わしにやあいつの涙は見えない。いゝや、わしはあいつの泣いてるのを、いちごだつて見やしな
い。

園丁、そんなに剛情いふんぢやないよ、ほんとうだから。(間を置いて) こんなおもひはけふはじ
めてだ。胸の底から、なにかが、ちん／＼こみ上げて來てたまらない。(瞳を伏す)

園守、おい(怪しみて) どうしたんだい。悲しい瞳をするね。あゝ、そんなに涙を流してる。(柔

(八三)

しゝは、何でもない人だよ。わしにだつて、こんなになるまでには、そんなことはなんどあつたか知れないよ。だがなあ、わしは、平氣で通り越さうとほりこさうとしたんだ。そして、もう平氣だ、そんなことがあつても平氣だ。わしひとり平氣にこゝに住んでゐる。いゝやわし自身を平氣にどちこめて居る、わしの涙は乾^ひ枯びてしまつて居る。(否定の態度にて)そうぢやない。わしの涙はわしの力でおさえつけられて居る——わしの力だね。わしはお天道様を合掌する。わしの力をまいにちまいにち新らしくなされますやうにつてよ。わしの力はわしに勝つ。そしてね。わしはいつも大きいんだぜ。

園丁、おぢいさん、いつたい、それはどういふことなのかい。

園守、どうでもいゝさ。おまへも、いまから平氣で、その日その日を暮らせてことよ。然しこんなことをきかすのは、おまへには早過ぎるかもしれぬ。ぢや、梟に餌でもやつて來ようかね。

園守、いったん、溫室に入り餌箱をもちつゝふたたび出

づ。池の方に歩む。園丁さきになつ。

園守、おい。

園丁、なにかねえ(振り返りて)

園守、なにつてね。おまへは、つい、いま涙ぐんだね。わしは、ふいに、こつちの若旦那のことをおもひ出した。——三年振りだけ、ふ歸つてらつしやるんだかね。わしはよくおんぶしてこの園をあるいたものだ。ところが、やつぱし泣く子だつた。

園丁、それから、どうしたのだ。おぢいさん。

園守、それから、そのときの若旦那の腫^うと、おまへのいまの腫^うとがそつくりだとおもつた。——なあに、おまへみたいときには、ありがちの腫^うの恰好で、ありがちの腫^うの色に過ぎないことだがね。

二人黙す。籠に近づく。籠のまへに立つ。

園丁、そうれ、ごらん、梟は泣いてゐるだらう。(園守、餌を與へんさす)おぢいさん、その様子では餌なんか、たべつこなしだよ、きつと、やつぱり悲しいんだが。僕だつてこんな籠の中に入れられる身になつたら、どうしよう。ねえ、おぢいさん。そんなことを考へると、入つて居る梟の姿が僕みたい氣がするんだ。そして、もうたまらなくなつちまう。

園守、妙なことをいふね。梟はなにも悲しくつて涙を流してゐるぢやない。可愛そうに、けふはちつとばかり夢を見過ぎてゐるんだ。おまへだつて、こちらに居る間は、やつぱりこの梟のやうにちがひないさ。ぢやが、わしには、おまへがだな。おまへのその日その日をどうしてくらしてゐるか。おそろく、おまへは自分自身のからだを考へて見てだ。涙を流すほど悲しんだことはないとおもふがね。梟もそうだ。この中にゐるのは悲しいことぢやない。くひものは不自由はない。晝にだつて夜にだつて、棚の蔭は、梟には、ちようどいゝくらやみだ。すつかり、なにからなにまで安樂に過ぎるほごだ。だから悲しいことはないや。けれど、ふは餘計に夢を見過ぎてゐる。

園丁、(わびしげに) おちいさん、おちいさんの言つてゐることは、僕には遠い遠いところにきこえるやうだ。遠い遠いところへ引いてゆくやうな腫だなあ。もりちゃんの卒倒するときの腫だつて、かうだつたな。たまらない腫だこと。(鼻を見つめながら、いつしんに) そうれ、羽ばたきた。腫をどちた。腫をあげた。空をうかがつた。飛ぶやうな恰好をした。

園守、(懸念に絶えざるものゝごとく) さあゆかうせ。こんなときには鼻のそばに居ない方がいゝ。さあゆかうせ。

園丁、(ほとんど正氣なく) また頭をあげた。耳を立てた。なにかをきくやうな様子だなあ。また腫をどちた。どちたまゝで空をうかつた。腫をあげた。なんといふ黄ろい悲しい色だらう。ふいに嘴を胸にあてた。もうぢつとするのか。しつ。もうぢつとするのか。

園守、さあゆかうせ。もうゆかう。さあ。

園丁、あゝ行くよ。だがもうしばらく此處にゐさせて呉れ。

園丁、くづるる如く汀にねむり、たちまち、夢に入る

園守、ねちまつたのか。仕様がないなあ。(餌箱を置き手を組んで去る)

舞臺、一呼吸ごとに闇黒となり、やがて全く、沈黙となるやがて、やゝ明るみを加ふ。少年の夢に入る白晝にしてしかも温室の内部なり。すべての調度よくさゝいひ、叢冤の花の群れにはのかなる輝きあり。花の中に、乗彦と園守と相向ひて話す。

乗彦は學生にして顔色蒼白。その思想は、あらかじめ知るを得ず、優秀なる顔

遙かに白晝なる路次の物音断えみ断えずみきこゆ。平

靜なる對話。

乗彦、おちいさん、久しぶりだね。相變らず丈夫さうな血の色だこと。まあ結構だね。(靜かにあたりを眺む) あゝ、こころは叢魔をうゑたの。おれの立つた年は、たしか、さふらんの花だつたね、おれが立つとき、こゝへくると花がいつせいに散つたつけ。おれはなにもおもはなかつたが、おまへは眉をくもらせた。(硝子越しに、そらを、あふぐ様に) そしてね。靜かな、靜かな、青い、痣のやうな氣のする大空だつたよ。

園守、左様で御座いました。三年も長いやうな短いもので御座いますね。あれから、あんな日は幾日もつきました。(掌に落つる光をながめながら) わしはお立ちになつた次の日から、けふの日を御待ち申してゐました。そして、なんだかけふぐらいわし、が眞のわしに歸りましたやうな安樂な氣のする日は御座いません。

乗彦、おちいさん、それは眞實のことかね。おれには、どうもさういふやうな氣はしない。(窓外を眺むる様にて) おゝ、あの池の籠はなにかね。おほきい鳥籠だね。

園守、あれには鼻が入つてゐるんで御座いますよ。

乗彦、鼻が入つてゐるつて？ いつごろからゐるんだい。どこから買つたのか。

園守、いゝえ。なんでも、おとゝしの恰度いまごろ朝鮮においでになるあなたのお兄い様が送

つてくだすつたんださうです。

乗彦、あゝそうかね。ちつとも知らなかつた。だが妙だな。だいいち狩なんて絶対にきらひな兄さんだし、それに梟つてなほさら可笑しい。おほきいやつかね。

園守、えゝ、これつばかし。(巧みに手にて示す。)

乗彦、さうか。見て來たつていゝだらうね。

園守、えゝ、(丁寧なる態度にてうなづく。)

乗彦去る。園守これに従ふ。

叢薺の花、音なくしてひとも散る。同時に、溫室内は夜のごまぐらし。

やがて、以前のごまぐら、かすかなるあかるみを帯ぶるこ

ろ、乗彦踰跟として入り來り、ややありて園守入り來る。

乗彦、窓に倚りて立つ。園守、花のもとに蹲まる。昂奮

をさもなへる寂しき對話。

乗彦、ねえ、おまへ、おれは、よくおまへに負はれて、あの池のほとりへ行つた。おさな心にもおれはそれが好きだつた。その時分おれは、おまへの言ことばをしんみになつてきいたものだ。(足元の花をみつむ)おゝ、そうゝ、いろんなことをきいたね。この叢薺さざんかなぞには、いつたりの王妃が緑のすそをひいて立つてらつしやる……そういふことも、おまへからきいたのだ。私は夢心にも不思議なことにおもつた。のちほど、やつと私の先生にたすけられて「花の智慧」を読んだとき、まつたくおまへの云つたとほりなのに驚ろいた。小供心にもおまへをたつとんだ。

園守、乗彦様、そんなことを仰言つちやいけません。たゞ、わしがこちらの植物園を守つてゐます。草花といつしよに暮らしてゐます。そのあひにそんなことに氣づいたやけなんで御座いますから。

乗彦、いゝや、おぢいさん、そうぢやない。まあ語らせてもらはう。私はね。そのとき眞におまへを立派な思索家のやうにおもつた。(空を見つめ悲しげに)それから私には、おまへがすつと若いとき、もうちつと自分を強く有つてゐて呉れて、こんな植物園なんかを離れちまつてゐたなら、どんなに立派なこすもぼりたんが出来あがりはしなかつたらうかと考へられた。私は植物園へやつて來ても以前のやうに惡戯いたづらはしなかつた筈だ。たゞむやみに草花を戀ひ、おまへを慕ひ、おほぞらの色と、太陽の光と、池の反射とを好んで、あけくれ、靜かな物思ひを描いた。そして、私は植物學者にならうとおもつた。けれども、おぢいさん、いまになれば、私はおまへが悲しくなる。植物學者にならうとおもつた。——それはおまへのおかげなのだ。だが、おとゝし、おれが、うちから離れて、しんみに植物學をやるやうになつてから、ふいに自分のやつてゐることが、この世から全く切り離されてゐる。あともさきもないやうな氣がしたのだ、おれはそのときから自分の小さいことに氣づいた。おれは自らどういふのかと怪しんだ。そしてどうしてもおれはおれのやつてゐる仕事を人生の上に、びつたりと置きたいとあせつたのだ。(瞳に昂奮ありて)おれは妙な男だと云はれた。すいぶん人にも莫迦にされた。けれども、おれにはそんなことはちいさいことだつた。そしておれは、すべてのものには深い意味のやどることを知つたのだ。おれの仕事は新

しくはじまつたのだ。(こまばを改めて)けふ、たれは植物園にやつて来るときにふいに思つた。なるほど地面は繪いたやう、こんなに綺麗な蘇枋色だ。それに草花はいつせいに瞳をあけてにほつてゐる。けれど、おちいさんひとりの命のやうにおもへる。おちいさんはおちいさんのくはだてをたのしんだ。そしてそのくはだてを實行すること、知らず知らず、この植物園に漲つてゐた——いへと云つていへないことだが——なにかを失つた。おちいさんは三年のあひだこの園を守つた。たいまつてたに過ぎない。(外部に瞳を投ぐる様にて)あの梟だつて可愛そうに、おちいさんが守つてゐるばかりに、あれの命はけふとも知れぬやうになつてゐるぢやないか。あの子のいふやうに、ほんとうだ。泣いてゐる。だいいち、たべものを與へたり、水をのませたりばかりであれのならしが安樂だと信じてゐるのは、たしかに間違つてゐる。お星さんよりはあれ一羽の一生はたいへん重大なものである。さつきも云つた筈だ。私はすべてのものをどうしても私一箇つから切り離して考へることは出来なくなつてゐる。然し、まあ、いゝや、とにかくあの梟は、けふともあすとも知れぬ命に迫つてゐる。あのまゝにして置けば、きつと二三日のうちに、あの籠のうちに死ぬ。園守、乗彦様、わしを信じて戴きます。きつとあの梟は夢を見てゐるんです。ですからきつと死なぬ。——きつとです——失禮ですけれど。あなたにたいいまほんのいちど見てお出でなすつたばかりで御座います。わしはあれの生活をまつたく握つてゐます。だから死ぬか死なぬかぐらひは解ります。

乗彦、それだけがおまへの誇りのかね(冷やかに)籠のなかに閉ぢこめて置いて生活をにぎつて

ゐるつて、誰でもすることだ。

園守、乗彦様、ともかくもわしにおまかせください。わしははやくつまをなくしました。子もなくしました。この世界といへば、たゞこの植物園ばかりなので御座います。ですのわしはこの園の樹々、草花それからいろんなものに、わしの命を吹きこまう吹きこまうといたしました。御覽ください。あすこに咲いてゐる野ぼたんしろ、この叢魔にしろ(温室の奥の方を透し見つ)南国の草花にしろ、そのほかのものみなは、わしのおもひのまゝにおほきくなつてくれます。

乗彦、あゝ、よく解つてゐるよ、おちいさんにすれば立派な藝術だらうよ。けれど、おれはおちいさんの企てにみんな讀してゐないつて、さつき云つた。それは解つたよ。だが、おちいさん、梟をどうして呉れる。あの梟をさ。

園守、死なないからつて申しました。

乗彦、おれは、それでは承知できない。おれはおにいさまがどんなところで送つて呉れたか知れぬが、生かすでもなし殺すでもなし、ほとんど彼の生活を封じこめて、あのまゝ、あれの命を無意味に絶つてしまふにしのびないんだ。それにおれの眼では、あれの命は今宵を越さない。

園守、ですけれど、乗彦様、あれは淋しいわしのせめてものつれなんで御座います。わしはなんにも知りません。こんな失禮なことを申上げてゐるいかも存じませんが、あなたがよいよ大學を御でましになる。そしてどこかにおつとめになる。——もちろん、かりのお話しなんですけれど、——そしてづんづ御年をお重ねになつてもう四十の坂をお越しになる。でもおれはま

だ若い。いよ／＼いまからだとおもひになる。その矢先き、おつとめさきのおひまが出ることになる。——世間にはそんな話はたんと御座います。え、——あなたのお心持はごうなんで御座いませう。わしだつてそれで御座います。わしにとればあの梟がわしのつとめさきで、あれを飼つてゐることが、わしのつとめのその日その日の大切な一つです。——お屋敷につとめてゐると同じいで御座いますよ。で、あの梟がわしにどうかなつてみれば、わしはくらしのことよりか、ずつとひごくわしの心をえぐられます。わしはもうこんな（うなだれつ）老いてゐます。せめて、あの梟にでもわしを子やうに考へさせたい。親のやうにおもはせたい。いいえ、現にそうおもひもし、おもはれても居ります。そして、あれはきつと死には致しません。

乗彦、おちいさん、それはね。まことらしい、ね、ごといふものだ。さつき、おちいさんはあの子に梟のころはわからぬと云つたさうだ。何故わからぬ。おれには解る。立派に解る。わちいさんは自分のわがま／＼なころをみたために、めくらになつてゐる。梟の涙を流すのは夢を見すぎてゐるからだといふ。いや異ふ。あれには、からだぢゆうに燃えきつた本能といふものがある。たもふま／＼に生かしもせず殺しもせぬとらはれの悲しみで泣いてゐる。おそらく二年つゝけて泣いてゐたに違ひない。そしてけふといふけふこそは大空にかけりたいとおもつてゐる。——もう最後が来たからだ。——おまへばかりでない。いつたいたれがあつて置けと云つた。殆んど意味のない残酷を平氣でやつてゐるね。ねえ。おまへ、梟だとおもつてはいけない、これが人間だつて同じい。おたがひにおたがひの身に引きあてゝみたなら、かういふことはしてもらひたくな

い。

園守、では乗彦様！あなたはごうなさるおつもりです。

乗彦、放すのだ。でなければ殺すのだ。

園守、放すのだ、でなければ殺すのだ（痛みを、おどろきにみちて）

乗彦、うん、そうだ。放すのだ。でなければ殺すのだ。たつたそれだけだ。

園守、あなたは死ぬと仰言いました。今宵も待たぬと仰言いました。放すとしたら生きませうか。

乗彦、いゝや、死ぬかも知れぬ。生きるかも知れぬ。多分死ぬだらう。けれども死ぬにしても籠のうちで死ぬよりは梟には、それだけよろこばしいかも知れぬ。悦びにむせんで死ぬだらう。さいせん、おまへとおれとが見てゐたときごんな、容子をしたか知つてゐるか。

園守、羽ばたきました。空をうかがひました。しはがれた啼聲をいたしました。

乗彦、さうだつたなあ。

園守、（感に堪えざるもののごさく）では殺すと致しましたなら。

乗彦、殺してもいゝ、けれども殺すにはもう時が遅い。

園守、（低き聲にて）乗彦さま、わしにはあなたの仰言することは解ります。ですがわしにはどちらにしてもあんまり、極端です。

乗彦、（やさしく強くして）放せ。放さないのか。

園守、え、わしは放しえませぬ。どうしても、そして死ぬやうにはおもひませんですもの。

この頃より梟のなきこえしきりなり。少年の夢やうやく
終らんとして温室あかるみを加ふ。

乗彦、おちいさん。おまへは老いたな。おれはおれの心よりか、おまへの心がよつぽど極端な気がする。ともかくもおまへに負^{おんぶ}されたおれと負して呉れたおまへとが、なぜこんなみちをあるかねばならぬのか。おまへはおれを若いやつがおもつてゐるだらう。——だがおれはおれの眞實の路を辿つてゐるに過ぎぬ。わちいさん。おまへには氣の毒だがおれはおれのすることだけは是非するから。(あはれみのまなざし哀しく園守をまもり)さよなら。(深き調子にて)さよなら。

乗彦、退場す。園守、力無くうなたる。

梟のなき聲おさまり。舞臺、まつたく闇黒なる。少年の夢こゝに終れるなり。

舞臺の闇黒しぼしにして晴る。

以前のごとき植物園の景なり、温室玻璃の耀きいふにさびし。みそらの色、さみざりにして、その一部に紫雲沈黙せり。しかもゆうに哀れなり。

少年籠のまへに立ちて、いま全く盡きたる夢を追想しておもはず、なみだ、したたる。

このとき、温室の左より、園守悄然として、出で遅きあゆみののち、籠のまへに來りて立つ。少年の顔をうちながめさらに籠をながむ。

園守、まだこゝにゐたのか。

園丁、え、夢を見てゐたんだもの。

園守、あ、さうか。(おもひに耐えざるもののごきくにて)わしはどうして、これをまもらなくてはならぬかなあ。

園丁、まもつたつて仕様がな。い。(悲しげに解するもののごきくにて)まもればまもるほど梟は泣くよ。

ねね、おちいさん。乗彦さんのいふやうにしたらいいせ。

園守、(驚きの様にて)おまへきいてゐたのか。

園丁、いや、僕はたゞ、そんな夢をみた。さういふ氣がする。

園守、ほんとうに、おまへも妙な兒になつたな。(憂に耐えざるもののごきくにて)

園丁、おちいさん、僕はね、もうすつかり、自分で自分の見たり行つたりすることを信じない譯にはいかぬやうになつたんだよ。夢だつて、生きてゐて見る夢だものね。なにか、やつぱり僕にはわけがあるやうにおもへるんだ。だからやつぱし僕はほんとうにする。

園守、おまへは乗彦さんのやうなことをいふ。

園丁、そのくせ、僕は乗彦さんをちつとも知らないんだよ。僕のお屋敷に上つたのはきよ年だつたから。けれどおちいさん。僕はついいま妙な夢を見たんだ。そして僕は乗彦さんも見た。おまへもみた。話もきいた。だから僕は妙なのだ。そして僕は乗彦さんがしたしくなつたのだ。でも、僕はごつちとも解らない。

園守、そうかね。

園丁、おぢいさん、おまへはごういふのだらう。

園守、ごういふのだらう。ともかくもわしは今晩も、おそろく幾晩も幾晩もこの鳥籠を守らねばならぬのだ。おれはおれのすることは是非すると乗彦様は仰言つた。それでわしにはみんな解つてゐるのだ。自分のためだ、自分のために守るのぢや。わしはもうそのうへは解らなくなつた。この梟が大切かわしが大切かそれすらもわからなくなつたのぢやがね。たゞわしは守りさへすればいゝやうにもおもふやうになつた。

園丁、けれどもねえ、そんな心はおぢいさんばかりの心のやうだ。

園守、そうかもしれないぬ。ぢやがわしはわしを信じてゐるから。

夕べの斜光、園を去り、風肌に沁む。舞臺、夜に入る、

二人ともに闇のなかにきゆ。

二、

舞臺、はじめ暗くして、なにももの見えわかず。この幽暗の底より
謡の音、かすかに重くきこゆ。ややありて月、仄かに出づ。

遠き鐘の音、天地に訴ふるがごとし。現實にして現實に似ず。ほざ
んご過去のごとし。

棚に吊るせる鳥籠は地上におろされ、園守、これに倚りほさんご身
をもつて蔽ふがごとくす。

園守、(鳥籠に寄りながら)わしは老いてゐる。あゝ、老いてゐる。そりや、ほんとうだ。だが、わしは若い。若くて平氣だ。はゝ、おゝ梟！(夢のごとくにそらをおふぎ)あの月を見ろ。いゝゝろだなあ。おまへが死ぬ、とは、わしはおもへない。(梟をみつめながら)大きい瞳だなあ。然し曇つてゐるやうだ。いつたいごういふのだ。

(園守、歌ひはじむ。)

森のしみづは涙かこえか、むせびなくともなかぬとも、

あすもゆうべも悲しさに、しんと啼いたる梟のこねに、

とけて流れて、せかれて、海へ。

海のあかい帆は梟の瞳にも、あはれわびしやとらはれの、
胸のおもひかおもたげに。

はしるゆくへの海霧に、泣いてあかした幾夜のあとは、
籠にとざされ園守の、こゝろ沁んだる樹の肌を、

吹いてくる風、行く風に、森の夜毎を夢にみる。

梟の聲しきりにして、園守、夢におちいり、舞臺の光景、
一變す。

鳥籠の内部なり。ふさき網をすかしておぼろに園の景を
見るべし。日光。

ほごんど、その大いさ人間にひさしき梟、これにじゆんぞろ宿木のかたはらに立つ。園守の幻影入り来る。謡。哀れにして、ものすこき舞踊はじまる。

梟のまなこはいよいよ哀しく、その翼、病めるに似たり。

森のよごさを夢みることは、けふで七百七十九日。

ひと夜すんだるその夜の夢は、森の梢に照る月の、くろい斑と朽ちはて。

ふた夜すんだるその夜の夢は、森は炎につままれて、森のわが巢は炎の玉と、散るもかなしややるせなや。

三日くらしした涙の夜の、夢に重なる兆さへ、

この日のこの世のどらはれの、陰に咲いたる涙の花かも。

七夜かさなる七つの夢に、わが身一つのころさへ、

くちてすたれてかなしやな、くちてすたれたわがころ、

空にのぞみの星もがな。

(梟の啼聲)

けふもうつゝか夢のうち、七百七十九つの、

夢にみてさへおそろしや。

わが兒わがつま餓えはてゝ、夢にみるさへおそろしや。

夢にみるさへおそろしや、森の夜毎のわがつまの、

深く落ちたるふる堤、夜の夜毎のわが兒さへ、

深く落ちたるふるつゝみ。

うかぶ瀬もなく泥づぶれ、業をふかめてごろづぶれ。

どうせ死ぬ身のこの身すら、羽をならせてさら〜と、

籠を破るに夜もよし。月はみそらにほのぼのと、

水はみないろ、のむによし、のんごうるほせ羽ならせ、

さら〜〜

梟まじぐらに綱にさび、籠をやぶらんとす。

園守の幻影、これをさへきる。胸毛霧のごく散る。

園守の幻影、いや〜、わしはわしのために、おまへをまもるのぢや。梟の聲、いや〜、わしはこゝを出る。どうせ今宵がわしの定命なのだから。

梟、ちから及ばずして宿木にかへる。急調。

籠はつめたやとまり木の、青に沁んだるわがなみだ。

知るや知らずやまもるとは、

まもるその身と、わがいのち、知るや知らずや、まもるとは。

いざぐぐ、

牢やぶり、おはりいちごのわがちから、

梟、さらに走らんとす。

このとき外部より、大いなる銀色の鉄の先端たくみに動き綱を破るあり。籠全く破られんとす。

梟、そこに飛ぶや、銀色の鉄は、あやまつて梟の脚に觸れ、その右脚切斷されて、鮮血の淋漓たるをみる。

梟、低く鳴いて走りいづ。園守の幻影、籠のうちにたはれ、つゞいて消ゆ。

舞臺、闇黒。闇黒のうちに、乗彦と園丁のこえきこゆ。

乗彦、これでいゝ。どうか飛ばしてしまつた。

園丁、え、え、音もたてずに飛んで行きました。

乗彦、その鉄の血はごうしたんだらう。

園丁、え？あゝ！あれの脚をやつちまつたんです。おゝ、こゝに落ちてゐます。

乗彦、すまないことをしたなあ。だがどうせ死ぬだらう。

園丁、可愛さうに、切つた脚から一里も飛ばぬうちからだぢゆうの血がみんな出やしますまいか。

乗彦おちいさんは死んだやうに眠つてゐる。きつと驚くだらう。けれどもおちいさんもすることはした。おれもすることはした。おまへもすることはした。さあ。あちらへ行かう。

闇黒盡く。

舞臺、本節の初景。

園守、空虛からの籠をまもりて、眠る。なかば瞳をひらき、

うつつのうちに籠を見る。

園守、おそろしいことだつた。とうとうほんとうだつたのか。

いったん立つて見る。瞳をつぶれり。

園守、うゝゝ、もう梟はゐないのか、

くづるゝごさく座す。なほまもるが如き態度にて眠る。

月光、舞臺に降る。

夜半のしら露樹々の肌にかゝやく。

幕、

霧ふかき夜

私は當初、不徹底なから私も私自身にまづては、しんげんなる考察の所産たる「善を敬ふ意志と窮極の力」ならびに「動物と靈智」（長詩）を發表さして戴かうと思つておました。けれども、私の頭はこの問題については、もつと書きたい。もつと考へたいといふ慾念にたぎられて、締切の間際になつて、この見るに足らぬ一小曲の試作をもつて、これに代へなくてはならぬことになりました。曲中の事實と、こちらの植物園に飼養されてゐる梟と、なんらの關係もないことを附言します。

翻譯

ある印象

メイ、ベイトマン
繞石譯

雲見ぬ蒼空、

西にひろがる家無き荒野、

奇しき不安に呻る海原、――

海鷗かもめの叫び。

汐あらひ行く

夕日にすぎき磯近き岩、

水は碎けて白泡千筋

意に満たぬかに。

上も、あたりも、――

草枯れ死せる旱靜かに、

涙生む待つ産婦の無言、――

そよこの風も。

動くものたゞ

土にひそめるちいさき地虫、

濱のやは砂甜め行く小波、

水雞の翼。

岡の上には

雨に渴ける針金雀花ねにしだ。遠く

地平線近く一つ星低く

淋しく照れる。

(原詩は一節四綴音、十綴音、十綴音、四綴音の四行より成る。例の逐字譯にて、句讀は原詩の儘なり。)

道行く二人(トルストイ)

芳

月

モスコウからツラへ行く汚い往還を、二人の男が包を背負つて歩いてゐる。若い方の男は短い上衣に、天鵝絨のすぽんを穿いて農夫の被る様な新しい帽子をかむつてゐる、そして帽子の縁

の下から眼鏡が閃いてゐる。今一人の男は略々五十歳位の好男子で僧衣を着て腰には帯皮をしめ新參の僧が被る様な黒い圓い丈の高い帽子を被つてゐ、そしてその長い黒い髪も髯も、もう灰色になりかけてゐる。

若い男の青白い淡黄みの顔は塵にまぶさつてゐる。餘程疲れたと見えて足が前へ出そうにもない。年よつた男は愉快そうに手を振りながら胸を反らして歩いてゐる、で彼の顔には塵がかゝらうともしない、そして疲れてゐる様な様子がない

若い男はサルジ、ヴジリギ、ボージンと言つてモスコウ大學の理學博士である。年よつた男はニコラス、ペトロギ、セルボヴと言ひ、以前はアレキサンダー帝の御代に歩兵少尉であつたのだが、後に僧侶となつた。然し何かの非行の爲に寺から追ひ出されたのであるが、まだ僧衣を着てゐる。此の二人は次のやうな具合で一處になつたのである。ボージンは博士となつてからモスコウ評論と言ふ雑誌へ二三の論文を出した後に田舎へ行つて百姓生活をして心身を休養してゐた。こんな風にして全く孤獨に暮してから一ヶ月も経つて、彼は文學上の事で知り合つた友達なるある雑誌編輯者へ次のやうな手紙を出した。

我が親愛なるイヴン、フイノゼイ君！——ロシア國民の不思議なる田舎生活によつて解せらるべき問題の終局の解決を前以て言ふことは吾々の爲すべきことではない——いや實は出来ないのだ。ロシア人の雑多な心理状態とその現象とは嚴密に考究すべき事柄である——彼等の隠遁生活それからピーターが行つた改革なども又大に考究すべきことである

手短に言へばこうである。ロシア人の日常生活に深く印象を刻みつけられたボージンは、ロシア國民の運命を決定すべき問題は、彼が想像してゐたものよりも遙にむづかしいそして錯雜してゐる問題で之が解決を爲すには、ロシア國を徒歩旅行せなくてはならぬと考へるやうになつたのである。それで、彼が旅行から歸つて来るまでは、此問題に關しての論文は一切雑誌に出さぬ様に彼の友達に頼み、そして旅行中に發見せることは悉く發表すると約束した。

此手紙を書いてしまつてから、旅行の支度に取つかつた。五月蠅くは思つたが、着物は何を着て行かうかと考へぬ譯にはいかなかつた。彼は、靴、上衣百姓の被るやうな帽子を買つて來た。そして下女どもを自分の部屋から出して、可なり長く鏡を見てゐた。非常な近眼のために眼鏡をかけぬことは出来なかつた。それは兎も角最も肝心なのは旅費の調達で、少くとも三百ルーブル(約參百圓)は要るが錢箱には金が無いので、執事と會計を呼んで帳簿を調べさせた、で百八十クオーター(五百貫位)の燕麥があつたので其を賣るやうに命じたが其の麥は種子に保存してあるのだと執事は言た。そこで彼は又別に百六十クオーターの黒麥と記入してあるのを見つけて、此麥も種子にするのかと尋ねると執事は、それでは去年の古麥を蒔けとお仰やるのですねと答へた。こんな話が濟んでから執事はボージンは農事に就いては赤ん坊のやうに何も知らないのだと思つた。ボージンは、黒麥は夙うくに蒔いてしまつたことや去年の古種子を蒔くのではないこと、それから百八十クオーターの麥の中から毎日の入用だけを取り去つて其の残りを賣るのであるといふ事を知つた。

金の調達が出来たので其の翌日出発することにした。其の時玄關に聞き馴れぬ聲が聞えた。そしてステフエンといふボーシンの父の下部が来て、ニコラス、ペトロビキ、セルボヴが来たと告げた。

「それや誰だい」

「あなたのお父さんの處へよくお出でになつた、あの坊さんをお覚えでないですか」

「ちつとも覚えなないがどんな用事で」

「あなたに會ひたいと言つてゐますが何だか氣が違つてゐさうです」

セルボヴは部屋へは入つて挨拶をした。そしてガタガタと床を踏み鳴らしながら言つた。

「セルボヴです——旅行してゐるのです」二人は握手した

「僕は全く無教育な無智文盲ものです。僕は露細亞に就いて研究して見たが全く無益に終つてしまひました露細亞は馬鹿です農夫は勤勉ですが、露細亞は馬鹿です。そう思ひませんか。僕は君の父さんをよく知つてゐます、よく、話の途中に「君は大に成功するでせう」と言はれました。それは兎も角、失禮ですが、君は何故、そんな服装^{ナリ}をしてゐられるのですか」

「僕は徒歩旅行しやうといふのです」

「僕も今旅行の途中なんです僕は希臘へ行つてアソスの寺へも行つて來ましたが、露細亞の農夫のやうに正直な人はゐません」

セルボヴは坐つた。そして酒を貰つて飲むとすぐに寢床に就いた。

ボーシンは非常に當惑した様子であつた、その翌日セルボヴは、ボージンから、種々の話を聞いて、ボーシンの學說や旅行の目的が如何なるものであるかを知つた。それで彼はボージンと一緒に旅行したいと言つた。一つはセルボヴの願ひに斷り様がなかつたのといは熱狂的に頼み込んだのと又その主なる譯は、僧の生活は不可解なるものではあるが、大に注目すべきロシア人生活の現象であると考えたためにボーシンは彼の申出を承諾した。

二人は出發した。その往還を歩いてゐた時には、最初の夜泊る豫定の處へ近づいてゐた。そして出發してから、もう十三哩歩いたのである

セルボヴは居酒屋へ入つて酒を飲んで非常に元氣づいた。

農夫と旅人

對話

レオ・トルストイ

一農家の内部。老いたる旅人は讀書し乍ら椅子に腰掛けてゐる。此の家の主人たる農夫は丁度仕事から歸て夕食に就き旅人にも食事をすゝめる。旅人は之を拒む、農夫は喰べ始め食事が終ると立ち上て祈禱を上げその老人の傍に腰かける。

農。どうしてまわれ出でになつたんです……

旅。(鏡眼を脱して本をさし置き)明日まで汽車がありません、それに停車場も非常に混み合て居りましたから、お内儀さんにお願ひ申して一晩泊めて頂き度いのです。

農。よろしう御座いますとも、おどまり下さい。

旅。有難う、して此頃の景氣はどうです。

農。景氣ですつて……私共の生活がどんなたと仰しやるのですね。まるでお話しになりませんや。

旅。其は又どうした譯で……

農。そりあ、あなた、喰べて行く物か無いんですもの。もし私共の生活のみちめなことたら、これ以上悪い生活なんて鐘や太鼓で探し廻つたつて御座いますまい。御覽の通り私共家族は九人居ります。誰しも物は喰べ度う御座いますが私が儲けるのは只四ブシルの米丈です、ですから嫌應なしに働いて賃銀を貰はにやなりません仕事なんか選り好みでもして居様ものなら賃銀は下落して仕舞ひます……金持の奴等は私共を好い様に致します、増すものは人間許りで土地は殖へす税は重くなる許り、小作料や地方税や土地税や、橋梁保険警察米庫等に對する税金……一々舉ぐる事も出来ない程です。又一方には僧侶や地主といふ奴が居まして、その中の道樂者を除いては皆、私共に枷をかけます。

旅。私は又、農夫さん方は此頃景氣が好いのだと許り思てゐました。

農。時には數日飢もじひ思をする程な景氣なのでもの。

旅。あなた方お百姓さんたちが多額の金を浪費する様になつたゝめに私はさう思たのです。

農。お金を浪費するんですつて……妙な事を仰しやいますね。此處に飢ゑ死にしさうな人が居

るのにあなたは金を浪費するなと仰しやる……

旅。これはしたり、新聞紙の報する所に依れば、去年は七億ルーブルをお百姓さん達が飲んでしまつた相です。

農。飲むのは私共仲間の者許りでは御座いません、あの坊さん達を御覽なさい……あの人等は飲む方では第一等で御座いませう又紳士とかいふお方にも決してこの方ではおひけを取る方でも御座いますまい。

旅。だが、そりあ少部分だ。大部分はやはりお前さん達にふりかゝつてゐるのだ。

農。さそ、其かどうしたので御座いますか、私共は一体飲んではいけないのでせうか。

旅。さういふ譯ではない、が、私の考へるには若し七億ルーブルも一年に飲んで仕舞ふなら景氣が悪い方とも申せますまい……七億ルーブル……大したものですよ、殆んど想像もつかぬ様な額ですよ。

農。ですが、酒が無くてどうしてやつて行かれませうか、私共か何もかうした例を始めた譯では御座いません、ですから私共に止めろと仰せらるゝは不當です。教會の饗宴もありませうし、結婚式も、紀念の宴會も、酒に酔ふべき機會は澤山あります。どうしたつて酒が無くてやつて行かれません、之が習慣ですもの……

旅。しかし世の中には一度も盃を口にした事のない人もあるじやないか、さういふ人もどうかこうかやつて行くよ。要するに飲む事はあまり賞めた事ではないよ。

農。そりあ少しも善い事ではありません、實に悪い事です。

旅。そんなら、飲まうと思てはいけない。

農。ですか飲むにも飲まないにも喰べる物さへ無いのですもの、私共は地面を持て居りません、若し地面さへあれば、どうにかこうにか、やつて行けるでありますうに……その土地さへも無いんですもの。

旅。持つべき土地が無いつて？こんなに廣い土地があるではないか、たゞ眼さへ開けば土地が目につく程あるじやないか？

農。成程土地は澤山御座いますが私共のでは御座いません、あなたの臂は口に近う御座いますが其を嚙むで御覽なさいまし、丁度其通りです。

旅。お前のじやないといふと誰れのだ？

農。誰のだつて？なる程誰れのか？……「腹の太い惡魔」のですよ其奴が五千エーカーも持つてゐるのです、其奴は養ふべき家族などは一人も御座いません……其れでも尙満足しないんですから、どうく私共は養鶏を止めねばならぬ様になりました。鶏が遊ぶ場所が無くなつたですもの、それから又私共が牛を飼ふのも止めねばならぬ時機もおつつけ參るで御座います……彼等にやる飼草が無いんですもの。若し犢にしる馬にしる畑にでも迷ひ込まうものなら罰金を拂はにやなりません、無い財布の底を拂ても銅貨を彼にやらなきあなりません。何故其奴等はそんなに土地か入用なんのだ。

農。そりあ勿論、種を蒔いて刈り取て、賣て銀行に貯金して置くのでさあ。

旅。其奴は一体そんな廣い土地をどうして耕して、どうして收穫をとりいれるのですか。

農。まるで子供の様な事を仰しやいますね、そりあ労働者を雇はなかつたらどうして金が入りませう……耕したり刈り取つたりするのは其奴等の仕事なのです。

旅。思ふに此等の労働者はあなた方農夫の或者でせうね。

農。勿論さうです……私共と同じ様な。百姓でなくて誰が働くものですか……エー勿論百姓達です。

旅。そんなら若し百姓たちが其奴等の爲めに働きに行かなかつたら。

農。行くか、止めるか……其奴はそんな事を自由にさせては呉れません。よし土地が放り出されてあつても彼奴は手放しは致しません、まるで秣槽の中の犬の様に自ら草を喰べ様とせせず、又人にも喰べさせは致しません。

旅。しかし其奴はどうして土地を保て行きますか、恐らくは三四哩に擴かつて居るでせうに……どうして彼奴は其を監督しますか。

農。妙な事を仰しやいますね、其奴は仰向けに寝込ろんでゐて、腹を肥やしてゐるのです、彼には番人かつてゐるのです。

旅。多分、その番人も亦百姓でせう。

農。他の何人になる事が出来ませうか、勿論私共です。

旅。それじゃ農夫が金持の爲めにその土地で働いてやつて、おまけに仲間の見張をするのだね。

農。しかしどうも致し方が無いでは御座いませんか？

旅。そりあ譯のない事さ、其奴の爲めに働きもせず、番人にもならないまでさ、さうすりあ土地か自由になる。土地は神様のものとして人民も神様のもの。やり度い人に耕やさして、種を蒔かして、とり入れさせてお置きなさい。

農。それじゃ同盟罷業をやるべきだとお考へになるのですね。ですかあなた。さういふ事に敵する爲めに彼奴等には兵隊か附いてゐます。彼奴等は屹度兵隊を向けます、……………一、二ズドン……………或者は彈丸にうたれ、或者は捕虜にされる事でせう、兵士等は私共に短い懺悔^{くわい}を味はせる様になります。

旅。その兵士といふのもあなたの方のお仲間でせう、何故彼等はあなたの方仲間に向て發砲するのですか。

農。そりあ致し方はありません其がOATHなのでもの。

旅。OATHだて？OATHとは何ですか？

農。お分りになりませんが、あなたは露西亞人ですか？……………OATHとはさう——OATHですな。

旅。それじゃ「誓ひ」といふ意味ですか、さうでしょ。

農。勿論さうです。彼等は自分の生命を國家に捧げる事を神かけて誓つてゐるのです。

旅。なる程、だからそんな事する必要は無いと思ふ。

農。そんな事とは？

旅。誓を立てる事……………。

農。せぬと言ても？法律か其を要求するのです

旅。いや、そんな事は法律には無い。キリストの聖典には明に禁じてある、曰く「苟にも誓ひな立てる」と。

農。さうですか、坊さんに就いては……………。

旅。(本を取り上げ或る場所を探し讀む)「昔より言ひなせるには汝の誓と自ら偽る勿れど、されど我は云はん苟めにも誓な立てる……………然して汝の言葉はYEAとNAYとのみならしめよ以外の言葉は惡しき物よ」(MATTHEW:33)。

それ故キリスト聖典に従てた前は誓を立てゝはなりません。

農。若し誓約が無かつたら兵士は無くなつて仕舞ふで御座いませう。

旅。左様、しかし兵士は何の益になりますか。

農。何の益と申した所が……………まあ、他の皇帝がやつて來て私共の皇帝を攻むる様な場合を考へて御覽なさい、……………その時はどうでせう。

旅。若し皇帝が争ふ様な場合には倒れるまで戦はしてお置きなさい。

農。さあそんな事が出来るかしら。

旅。譯もない事さ。神を信じてゐる人ならあなた方が何と言はうと決して人を殺す様な事は致し

ません。

農。そんなら何故坊さん等は教會で「宣戰か布告され後備軍は用意して置かねはならぬ」など、讀むのですか。

旅。そんな事は私は知りません、たしか六章の「天誡」の所に次の様な事が言てあつた、即ち「汝殺人を爲すべからず」とお前さんも御承知の様に、人として人を殺す事は禁せられます。其はほんの國內で通用する許り、戦争の時に於てそんな事は致し方も無い。彼等は敵で御座いますもの。

旅。キリストの福音に依れば敵と稱する様なものはありません、何人をも愛する様に言てあります(聖書を開いて、所を探す)。

農。さあ讀んで下さい。

旅。「汝は殺す勿れ、殺す者は何人たりとも裁判に逢はん、と昔の人の言ひしを聞きしや。汝は隣人を愛し汝の敵を嫌ふべし、と言ひしを聞きしや、されど我は言はん、汝の敵を愛せよ汝を苦しむる者の爲めに祈りを上げよ」(MATTHEW 21:43-44) (長き沈黙)。

農。なるほど、して租税に就ては……又其を拂ふのを拒むても差支へないんでせうか。

旅。いゝとも、若しあなたのお子供さんが餓えてゐる様な時には、どうしたつて先づ食物をやらなければなりませんまい。

農。それであなたが絶対に兵士が必要でないとお考へになるのですね。

旅。彼等は何の役に立ちます、幾百萬も幾百萬ものお金が彼等の爲めに、あなたや又多くの人民から集められます——その大軍勢に衣服を着せ食物を與へるとはなか／＼冗談所の額ではありません。かういふ怠け者が殆んど百萬人許りも居ります、さうして、その爲す事と言へば

國家を安全にしてゐる丈で却て彼等はあなた方に發砲しやうとしてゐるではありませんか。

農。(嘆息して頭を振り) 御尤もです。ですか誰れしも云ふ事を聞いてはい／＼してゐるからよい様なものゝ、若し此の中で一人か二人でも抵抗でもする様なものがあれば其こそ撃たれるか、サイベリア行となつてもう萬事窮して仕舞ふのです。

旅。然し世の中には、神の法則に従て世に處し兵役につくを拒む人もあります……青年にすらありますよ。かういふ人か言ふには「キリストの教訓に従て私は殺戮者たるを欲しません、御勝手に爲さいまし、ごんな事があつても私は手に銃は決して持ちません」と。

農。へー、それから……。

旅。彼等は牢へ入れられます。その可哀相な人等は三年も四年もかうして牢に入てゐます、ですが私は別に此は其人等にとって悪い事でないと思ひました。何故なれば官憲も其人等を尊敬する相ですから。そして或者は兵役には不適當な身體薄弱といふ名目で出獄を許される相です。時には其人が如何にも倔強な肩幅も大きな人でも不適當となつてしまふのです。其は當局もその人が兵役は神の教訓に背く事を他人に語る事を恐れてその種類の人を捕縛しない様にしているからなのです。それ故官憲も彼を放免致します。

農。なるほど……。

旅。この様に時には放免もされるが時には又牢で死ぬ事もあります。兵士としても、死ぬか又職務の爲めには不具者——足か腕かを失ふ様な目に逢はねばなりません。

農。なか／＼うまい事を仰しやいますね。議論はお立派ですか、さてその様にうまく行きますかな。

旅。何故うまく行きませんか？

農。あれですもの……。

旅。あれどは……。

農。官憲は與へられた權力を持てゐますもの。

旅。彼等はあなた方が服従するなればこそ權力などを持てゐるのです、官憲に服従などはしなされるな。然らば彼等は何等の權力も持たぬ様になりませう。

農。(頭を振て)あなたは妙な事を仰しやる、若し官憲^{おかみ}がなかつたら人はどうしてやつて行けるてせうか。何等かの當局者かなければ安樂に暮して行く事は出来なくなるでせう。

旅。勿論其はさうですそんならあなたは何人を當局者として選びますか、——警官ですか、神様ですか。警察官と神様とどちらに服従なさいですか。

農。いふまでもない事……神様より偉いお方は御座いますまい。神様に従て生活して行く事はこの上もない事です。

旅。左様、もしあなたが神様の御力に依て生活して行かうと思へは先づ神様に服従せねはなりません、人間に服従する必要はありません。そして若しあなたが神に従て生活して行くならば人々をこの土地から追拂て仕舞ふ様になるでせうあなた方も巡査にならなくとも村長にならなくとも收税人にならなくとも番人にならなくとも就中兵士にならなくとも濟むでせう……人を殺さにやならぬといふ譯でもありますまいから。

農。それじや、あの「長い鬚」の坊さんはどうなるでせう、あの人等は物事は總て神の法則に従てやらねばならぬといふ意見を持てゐるに違ひありません、そんなら何故あの人達は、かくあるべき事を教へて呉れないのでせうか。

旅。私はそんな事を知りません、その人達には、その人達の道を歩ましてお置きなさい。そしてお前さん方は、おまへさん方の道を歩んでおいでなさい。

農。彼等は「長い鬚」のある悪魔だ。

旅。其様に他人を言ふのはよくない。我等は自分自身の缺点をよく顧りみなくてはならぬ。

農。左様其はさうです(長い沈黙、農夫は頭を振て微笑む)すると決論はかうなる。若し我等が官憲を捕へて仕舞へさへすれば土地は忽ちにして吾等の物となる。そして最早租税などは無くなつてしまふ。

旅。イヤお前さん、そりあ私の云ふ意味をはきちがへてゐる。よし私等が神様の意思に従て生活してゐるとしても、土地は私共の物となり何等の税も無くなるといふ譯ではない。私は、私

共自ら惡事を行つてゐるから私共の生活が悪いと言ふのだ。若し人か神様の意思に従て生活してゐるならば、生活は自然悪くはなくなる。といつてその我等の生活がどんなものかは、神獨り知る許りで私共は窺ひ知る事は出来ません、ですか、その生活が悪い物でない事は確かな事實です。

私共は酒を飲んだり、人を吐つたり、戦たり、法律に服したり他人を羨やむたり嫌たりする——私共は神の法則といふ物を知らない——で、他人を色々と批評する。或者は「腹が太い」といひ或者は「長い鬚」だと言ふ。而し若し何人でも金さへ呉れる者かあれば、其の人の爲めには何事を爲すも躊躇しない。——番人にも、警察官にも兵士にもなり或は他人を零落させるのを助けたり、自分の同胞を殺したりする。かやうに我等其物が、惡魔の様な生活をしてゐながら、尙他人の不法を鳴らしてゐる。

農。其はさうです、然し生活といふものは實につらいもので、時には忍ぶ事か出来ぬ様な事があります。

旅。だか、精神といふ方面から見れば忍ばねはなりません。

農。なる程さうです……神といふものを忘れたから私共の生活が悪かつたんです。

旅。さう、その通りだ。其が人間の生活が悪いといふ理由なのです、革命史を續いて御覽なさい。それに「吾々をしてかの大地主達や腹太き金持ちの輩を殺さしめよ。然らば吾人の生活は安全ならむ」と云つてゐる。かくて彼等は殺戮を恣にするにした。その結果益する所は何でありま

せうか、皆無でありました。官憲に於ても同様であります、又彼等は「我等に時を與へよ。然らば一二千の人を縊り若しくは牢獄に於て殺さん。而して人生は益々善良に趣くなるべし……」と云てゐる。而し其は益々悪くなる許りです。

農。左様、それはさうです、人を裁判したり罪する事か何の益になりませうか。其は神様の法則に従てせなくてはなりません。

旅。その通りだ。お前さん方は神様か、惡魔か、どちらかに事へなくてはなりません、若し惡魔に事へるならば何處かへ出掛けて飲みて、怒鳴て、戦て憎むで貪りなさい。そして神の法則に従はずに人間の法律に服しなさい。しかしその生活は惡になります。若し神につくなら只神様に服しなさい。盗んだり殺したりなさるな。又何人をも咎めたり憎んだりしなさるな、悪い行はせぬ様にしなさい。さうしたら自ら悪い生活では無くなつて仕舞ふのです。

農。(嘆息して) お前様、なか／＼面白い事を仰しやる。——少しは物が分かりました。まあ、私共がこんな風にもつとよく分つたなら物事はまるつきり變るで御座いませうね、よく人々が町からやつて來ては、改良なんて云ふ事を盛に言ひます。彼等の云ふ處は如何にも立派ですか、しかし要するにつまらないものです。有り難う御座います。御言葉を有難う。さあ何處にお休みになりますか。窯の上でよろう御座いますか。鼻に床を取らせませう。

私は猫が大好きで、今までに東西兩半球の色々な土地や色々な時代に飼つた種々な猫のことを書き出したら、大きな本が出来らうと思ふ位だ。然し之は猫の本ではない。たゞ私は玉を心理的理由から見えて書いて見やうといふのだ。玉は私の椅子の傍で、眠り込んだまゝ、一種特別な妙に私の心を動かす聲を出して居つた。かうした聲は一体猫が自分の小猫に向つた時に限つて出す聲で——軟かな震ひを帯びた鳴聲——混ざりけのない愛撫の調子である。そしてころりと其處に横になつて居る時の玉の姿勢が、どうしても何かしら或物——新しく捕まへた或物を掴んで居る猫の執る姿勢であると私は思ふ。物を掴むやうな工合に前足を差伸ばし、眞珠のやうな爪が動いて居るのだ。

私共は此奴をタマ(玉)と呼んで居るが、美しいからと云ふ譯ではなく、尤も美しいことは美しいが、玉といふのは習慣上愛猫にくつ、ける女名前であるからだ。玉が始めて私の所へ贈物として持つて來られた時には、大層小さな鼈甲色の小猫だつた、尤も贈物と云つても受取り甲斐のある贈物としてだが、と云ふのは三つ色の猫(ミケネコ)は日本では幾分珍らしいものだから。日本の或る地方では三毛猫は幸運を齎らすもので、鼠は勿論妖怪をも恐がつて逃げさす力を持つて居るものだと信ぜられて居る。玉は今年二つだ。私はどうも玉の血管の中には外國種の血が混ざつて居るやうに思ふ、といふのは日本猫としてはちと優し過ぎるし又纖弱し過ぎるから、そして尾

といつたら随分長い尾をして居る、かう長くては日本流の見地から見たら先づ奴の唯一の缺点だ、多分玉の先祖の一人が家康の時代に和蘭か西班牙の船に乗つて日本へ渡つて來たものだらう。兎に角ごんな先祖の子孫であらうが習慣(例へば米を食うやふな)から言つたら玉は全く日本猫だ。

玉が始めて子供を持つた時には、非凡な母の態度であつた——小供の世話に全力を盡し又そのためにまめ／＼しく働いたものだ、があまりせつせと小供を育てたり小供のために苦勞したので遂には可愛想な程に又可笑しな程に寢れてしまつた。玉は小供に身體の清潔法や——戯れたり、跳たり相撲とつたりする方法や——獲物を求める方法などを教へた。勿論最初は唯自分の長い尾だけを弄ばして居たが後になつて小供のために他の物を見付けてやつた。即ち小供の所へ鼠、騾鼠は言ふまでもなく、蛙や蜥蜴や蝙蝠などまで持つて來た、そして或日の如きは近所の田圃でやうやうのことで取つたものに違ひないが小さな鱈を持つて來たこともあつた。暗くなつてからも私は始終玉のために書齋に通じて居る梯子の天邊にある小さな窓を明け放しにして置くことにして居る、——何でも玉が臺所の屋根を傳ふて獲物を捜しに行けるやうな工合に。ところが或夜其窓から自分の小猫に弄ばせやうと思つて大きな草鞋を家の中へ持ち込んだ。玉はそれを畑で見付けたのだ、そしてそれを持つて高さ十呎の木垣の上から、家の壁を傳うて臺所の屋根へ出て、それから例の小窓を潜つて梯子の所へ持つて來たものに違ない。其梯子の所で玉と小猫共が夜の明けるまで騒しく其草鞋を弄んで居た、ところが其草鞋か泥だらけだつたものだから梯子の所をべたべたに汚してしまつた。兎に角母親となつての最初の經驗に於ては、玉はご幸運な猫は他になかつ

た。

然し二度目には幸運ではなかった。玉は随分離れて居る他の街の仲間を訪ねる習慣になつて居た。ところが或晩其歸り道で誰かむづかしい人のために傷つけられた。家へ歸つた時には馬鹿のやうになつて病氣して居た、そして子供は皆死んで生れた。私は玉もいづれ死ぬことだらうと思つて居た、ところが誰だつて想像がつかなくなつたらうと思はれる程早く全癒つてしまつた——尤も道理なことながら、子供を失くしたといふので心を痛めて居たことは居たが。

一体動物の記憶といふものは、或る種の相對的經驗に關しては不思議な程弱いばんやりしたものだ。けれども動物の本質的記憶——無數の生を通じて集めた經驗の記憶——となると人間の力の及ばぬほど生々したもので、間違ふなんてことは滅多にない。……試に猫が自分の小猫の溺れたのに息を吹き返らす恐ろしい技倆を考へて見給へ。始めて出會はした危険な敵——例へば毒蛇のやうな——に面を向ふ學ばずして居る能力を考へて見給へ。又小さな動物やそれらの様子を廣く知つてゐること——野草の藥用上の智識——獲物を求めることにも、戰ふことにも巧みな兵法上の才能を考へて見給へ。猫の知つて居ることは眞に大したものだ、而もそれを悉く完全に若くは殆んど完全に知つて居る。然しこれは前世に得た智識である。現生の勞苦に就ては、猫の記憶はどう見ても短いものだ。

玉は自分の子供の死んだことは、はつきりとは覺えて居なかつた。たゞ今頃は小供がなくてはならぬ時だと思つて居た、それで小供が庭に埋められてしまつてから餘程後に、あちらへ行つて

もこちらへ行つても子供を捜しては名を呼んで居た。玉は友達に向つてひどく愚痴をこぼした。それで私は戸棚や押込をすつかり、明けて見せてやつた——何遍も何遍も——家の中にはどこにも子供が居ないんだといふことを證明するために。どうく玉はもうこれ以上捜すのも無益だと合點が出来た。けれども夢の内で小供とふさけたり、賺したり、小さな形のない物を捕まへてやつたりして居る、——多分或るばんやりした記憶の窓から薄氣味悪い草鞋までも持つて來てやることだらう。……

本篇は先學年語學部の英文和譯懸賞第二等を得たるものにてラフカディオ、ヘルン著「コット」中の一編なり(部員)

詩歌

前書付——繞石生

攝津平野郷町末吉氏の忌辰に際し松に寄する追悼句を乞はれて(三月)

花よりも松と松植ゑ給ひしが

壺焼を磯松風を興せしも

丹波和田村塚口氏の父君の八十の賀に(三月)

奉る黎の杖も用は無し

健かの父母あり子孝に菊根分

越中新湊町柴氏の鯽漁見に招かれて(十二月)

鯽網の不足かごとも日々の漁

木枯の吹きつのる漁なほ盛る

大谷派講師龍山慈影氏七十七の賀に句を乞はれて(三月)

健にませば青きを踏みもして

石川郡可夕氏二十五回忌に句を乞はる。可夕氏は蠶業農業の先覺者にして賞を受くること數次。(五月)

蠶飼する村となりしも君故と

薰風や君が拓きし田の一面より

下總なる秋元梧樓倉庫業を創めて數棟の倉庫建築中とか。祝句を乞はれしに。(六月)

門納涼にも建増す庫敷地談など

句佛上人金澤一泊。奉りし書中に。(十二月)

時雨るゝな越の旅寢を重ねます

句囊重らせ給ふ思ふも此寒さ

カアライル、ハウスの寫眞の裏に句を乞はれしに。(一月)

その蔦のまばら這ふ壁春淺き

硝子屋根春寒き雲仰ぐかな

岩城孤秋の奈良に轉任するに。(七月)

到る處社寺に涼しき歌あらめ

夕納涼がてら子連れて鹿見るも

子規忌(九月)

雞頭の句柿の句こゝに十四年

袂から柿出す人や獺祭忌

庭前の柿摘むも今日忌日とて

陸軍大佐佐藤肋骨某任務を帯びて歐洲某國に赴くを送る。肋骨は隻脚なり。(十月)

いつも靴の寒き日特に足いとへ

來山忌(十月)

句の寺へ句に集る事に來山忌

一輪挿に女郎花こそその人形

養老孟を給はりし人に。(十一月)

菊の酒千代まで酌めの御意にして

恩師故小泉八雲先生の贈從四位を給はりしに。(十一月)

色殊に濃き紅葉日に照り映えて

御即位式

今日の爲に十戸の村も菊植ゑて居り

貧しきは垣の野菊に祝ぎ酌みて

妹は歌を我は句を菊に祝ぎ詠めり

大饗第一日饗饌を給ふ

ありがたの賜饌歸り來て菊に詠む

寶珠のゆくへ

(詩)

多田不二

私が生れたとき神様は神様の大事の大事の寶珠の行方を探ねよと私に命せられた、

私は毎日毎夜私の天職を果すために野といはす山といはす歩きまはつた、

私は未だに探しあてることができない

世界中はゆめとみづですつかり埋つてゐる

その上が空である

私の求めるものは自然の奥底に沈んでゐるにちがひないと私は考へた、

そして自然に入りこむ道を思つた、

どこへ行つてもまよひとあこがれは自然の扉をみつしりおさへてゐる

私は瘡せほそつた自分の腕をふりまはし、はげしい悲しみにうたれた

私はどうしても、もつと力がなくてはならないと思つた

私は神様に力を下さいと願つた

神様は爾は自分で力を獲なければならぬといはれた

私は泪に濡れた頬を清らかな朝風に吹かれながら大きな大きな力を獲やうとたゆまず今もつとめてゐる。

愛慕抄

福 光 生

草ばふしやまどりきなきさら／＼もものれも
ひなきゆふべなりしか
そとよれば草のみはじきわれらのみ無言のす
がたゆふばえにけり
あらしふき木まがくれゆく山ざりにゆふ日あ
かあかひざまつきぬる
なみだしてわれのちからによりそひてゆふべ
山みちきみ落ちばふむ
ゆめうつら落ちばさく／＼山ふかみいつか山
ざりこゑたてずかも
さびしさになみだすといふ泣くといひかのつ
ぶら眼に薄づきしかな
つぶら眼になみだ瀨ばみておちばさへこゑひ
そめ山のゝ氣もなし

なつかしかなしきをもてかへりきぬものみ
なゆめとあきはつげなむ

自愛自嘲

すなはらにひとりうれしみまろび寝のたはむ
れとのみなあざけりそ
まろび伏しとほみけぶりのそらをはふさまを
あかすもながめし日かな
まろび寝ばこゝろひえたる眼路はるどあまぐ
もひかりいゆきはばかる
いしたゝきつまをよびかふいしたゝき秋はふ
かめどいしたゝきをり
をどこゆゑこのなみだはやいしたゝきかせさ
ゆる日はなかつもあれや
まろび伏しきりふる山にあきをしるうすくゝ
もりて川ながるなり

落葉悲調

やまびこのいやごよみかもわがそでは峽まお

ちばの音をかもすなり

あきみじかひるのおもひを風しろきおちば山
ぢになごみてやます

かしの葉をかざしてまたむゆふさればきみの
はぢらひいろにいでにけり

落ちばする岡のべさむきひとと木朝はあか
すもどりなきかはす

かへりさくさくらはさびし木のくれにあかく
まばらか葉をつけてけり

隔離舎のくもり日こそはわびしけれ人もかよ
はぬ石ころおちば

なげきよりしげくもなみだ瀨ばめるはおち葉
あやなすくもり日にこそ

秋風雜感

あき日てりぬまの葦はらしらめけばこゝろひ
ろぐるのねなくて
ひろびろと蒼ぞらつき葦のはらかざかみし

(二二八)

ろく舟こぎきたる

かおのねにこゝろめぎむるまひるかなふなば
たたゝきうた／＼ひたり

雲いゆくこゝろうれしきかすが山かすがの宮
はゆれがてにみゆ

秋びてりかすがの宮はけふはしもよそに見な
しておく山ぢかも

奥やまぢこえざりゆけばかすが山くさかりの
めの鎌ひかるかも

くさかりは鎌をあやなくさかるも秋は峽ま
にてりてしひかる

くさせなふ馬ひん／＼とくびふればこだまし
かへす山ふかみかも

くさせなふ馬つゞきいづりん／＼と鈴なりや
ますすゝみけるかも

途上雜感

いのちわびこれやこの身のさまよひはひとを

(二二九)

秋風遍路

こふらくさびしき秋を
犬もゆきくるまどごろきゆふなべのひとをま
つなり水車屋のまへ

終日端居

雨こめて家にあり母のしごと座にめづら本よ
みものおもふなり
ふる雨に佛間しづけく線香のけむはくづれて
たちのぼりけり

風はやみなご

風はやみ野なかけむりのみだるればあはれい
つしか秋びみえずも
ゆふびさす澤べさびしき木がくれにこれやよ
しきりとびあへぬかも
ゆふ日あべは刈穂せなひてゆくひとのすがた
をぎりつかげをぎりいづ
夜をながす風のゆくえはそよぐ葉にみわけが
たかりひとりしをれば

浅野川水上逍遙遊六首

さびしさに寂しき秋の川に來つ水上遠くけふ
る山はも
浅野川瀬音の秋のつめたさに人こそ偲べ水上
の山
浅野川稻刈りければしらじらと秋日にうかひ
行方しらすも
山あひに煉瓦焼場の壁あかく見えてしづかに
秋の日の照る
はるばるとわが悲しみがしたひくる秋の河邊

別久谷 清

ものさびしさに

川の洲に焚火燃えいでやうにして消えけり川
の夕べ光るも

片山津發火演習行十首

防人も歌ひたりけむ水郷に兵士となればなげ
かるゝかも
水郷の水濁り日にかがやきて兵士のわれを映
すさびしさ

つかれつゝ山路下れば山裾の湖むらさきに暮
れのこりたる

身に力沸ざるを感じ高原の雜木林を馳せ入り
にけり

とみかうみ高原の草はつめたかり穂の上に光
る飛驒の山はも

陽の中にすゝきはゝけて高原の草生にわれら
身を投げにけり

高原に兵士となりて執る銃によりてな鳴きを

鳴きそこほろき

見はるかす空のあなたや白山のあまり清きに
強ふる涙は

うす曇る高原の草の蟲よわが兵士すがたに來
て鳴くなかれ

落葉ハララ落つれば空のはろばろと青きが中
に白山の立つ

憶母篇五首

落日にやぶれし肺をいだきしめ母はなげきつ
逝きたるらむか

母よ汝が住むは死の國ひとり子は悲しからず
や生きもまよへる

母よ汝が面影似たる子はしいま汝が住む國を
戀ひてやますも

落日落日いまか沈まむわが母の住める死の國
いまか照らさむ

母よわがなげきはすべてこれより來るさびし

き孤兒の涙ながすも

向山逍遙遊十二首

山に來て秋のあらはに見ゆる樹に草にわが身をいどほしみけり

天地にあらはに秋の見えて來ぬ泣かんとすれ

は果なしや涙

わが影をちつとおさへて秋の日の山に照るな

れ鳥ども啼き來よ

眼はなては日本海の白濤の木梢にゆれて心地

よきかな

北國の秋はもかなし山にして入日にむかひそ

よぐわくらば

×

松風やわびしき山路越えも來て黒土に浸みる

雨なつかしむ

しとくそわが行く山路秋雨の浸むなつかし

さわれも吸はれむ

(一三三)

秋雨にひたりてやゝに陽の沈むふもとの街に
光る暮れの灯

山に來て又しも人をおもふ身となりぬ麓の街
の灯を見る

×

向山のぼりてひとり草が根に霧ふる麓の街の
灯を見る

街の灯は青う月光にあらはるゝ海のごとくも
霧ながれよる

君が家の團欒の窓をもとめんと狭霧ぬれつゝ
のぼり來しかも

八月九月の交を能登の入江なる佐しき温

泉にありぬ歌十五首

ほの青き夜光の蟲のじに燃え能登の入江は
夜のふかみかも

かりそめの旅もわびしや能登の海浪の青きに
衣濡れてけり

海に來てわれもかもめとなりにけり波間にう

かび餌ひろひ啼かむ

欸乃かのろはれし鳥の啼聲か月夜の沖のあや

しき聲は

くゝと啼く、くゝと鳴か月の夜のゆりもやま

ざる海になげくは

机島に山火燃えいつ

さびしらに悲しみどもゝ燃ゆるらし島は煙に

みちみてりけり

山火はるか能登の小島に燃ゆる日はあやしや

胸のいたみおぼゆる

山火あはれ林をつくせ野もなめよ沖の小島を

残すことなけれ

山焼くる能登の小島に燃ゆる火の心あやなく

君にゆくかも

附近に信教寺なる寺ありきつれつれなるま

ま塵々ゆきぬ。

古寺の椽に出づれば稻の花しろく眼に泌む初

秋の朝

眇目の僧の片頬に稻の花しろくひかりて秋立
てる朝

青海やけふは小島に火も燃えずひたゝく岸に

浪まろぶ見ゆ

秋の朝白き埠頭の石垣に船むし群れて海ひか

るなり

浴室の玻璃戸をこえて見る海的光やゝ白し秋

立つらんか

朝の渚ほのかに匂ふ花藻あり身は飛沫ともわ

かなくぞ立つ

犀川河畔逍遙遊五首

秋の野にまろび寝すればほそと鳴る河床
の水もさびしや

聲あげて歌へは川も野も草も秋もわれより忘
れてありけり

(一三三)

狭青にぞ秋の夕べの暮れのこる空にあきつのみだれ流るも

蟲よ汝は何をたもふぞ秋枯るゝ原に啼くなりたえみたえすみ

ものかげに野菊一つは見いでけり枯草原の夕べさびしも

、あゝ平原のあなたに——以下二十二首

平原のあなたを見ずや薄明りいまわが道のひらけわたらむ

たごろき醒め伏していのらむ日よきたれ生命むなしきに飽きもはてけり

強かれとねがふ心のいつしかにかりそめとなる悲しきこゝろ

わらへ此はした男は泣くみづからのまづしき幸をはかなみにつゝ

群衆のしろくつめたき眼にうつるわれの姿のいかにさびしき

かへり見るなかれゆくてのひとすぢの道薄明り淡く見ゆるを

美しくき醜くきものゝ幻影よわがわかき日の前におどりね

×

閉ざさんと扉にかけし夜の手につめたく蟲のとびうつりけり

しかすがにつとめを終へてとざす戸にちらばる月の光やすけき

とざされて入るすべもなみ戸に鳴ける蟲をあらはれみ灯を消しにけり

灯を消せば卓の上なる白紙に月のひかりの青うかげすも

月光のさ青にむせび歩みゆく街にふとしも洩れ来ビオロン

君が窓とちてありけりうなだれてすぎ行く街の月の青さよ

何ゆゑにまよひ來し夜ぞゆきずりの人も狭霧に濡れてかなしき

×

さびしさに身さへ心もうちふるふ草枯れの窓にせまる夕闇

枯草にしと／＼秋の雨しみるわが窓はけふも夕靄みけり

祖母がよはひかたむき初めし悲しみをなげくは秋のくらき灯のもと

まさびしく祖母とふたりが住める家かこみてひく蟲のあはれや

物おもへばはら／＼わたる一むらの村雨すぎて日の淡みかも

金澤の城の下なるかよひ路ゆかよひなるれば落葉そむるも

通ひ路ゆ秋さりければ通ふ子に櫻もみちをこぼすなりけり

うらさびし古城の牆の蔭かつら枯るゝを見つ今日も通ふは

——をばり——一九一五・十二九脱稿。

Life is real ! Life is earnest !

And the grave is not its goal;

"Dust thou art, to dust returnest,"

Was not spoken of the soul.

——H. W. Longfellow.

はつたび

相川 孤歌

犀川の川面てらすあけの月てりはゆ影も波にままれつつ

こそこくの照る月影を仰ぎつゝ窓よりしのぶあづまのみ空

ともしびに向ひて綴る筆のあと我が手おのゝく何か知らねど

今宵また犀川の夕訪づれぬくれ行く流れ戀し
きまゝに
君思ひ露もてぬらす我がまぶた遠く出でにし
我が身なる故
白壁にまつはる鳶は淋しげに秋の夕に紅うそ
まりぬ

狂人の歌

露之助

茶碗投ぐれば音ありされど物足らず單調の秋
の日のわれ
朝別れ涙目する日の杉木立みん／＼蟬のなき
ゐたりけり
夏の房次がくつわ虫買ひてきたれどなきもせ
ず悲しい夜に
待ちかね山に出る月やそと病床にたよりかく
そなた照らせしか

夕ぐれは鳥なきかふ母のやむ京の家おもひて
公園ゆけり
このごろの木ノ葉に似たり赤と青のインク消
ゆるときなきわが指
秋のゆふぐれ街ゆきて氣持あしくなりぬ黄色
い女みて
笑へる白痴あり常にわらはぬ己れを幸福とい
ふ人を疑ふ
朝晴れやちい／＼家根に雀なくかつる朝こそ
旅立をせめ
旅をする叔父を送りて故郷を素通りせしは悲
しいかなや
血をみれば狂喜するぞと叫びてやまざりしわ
が心なり
* * *
今しん／＼と夜を雨ふれりこほろぎの聲をき
けばうらさびしや

しとしとしとしとと夜を秋雨の戸をうつに
ひとりきゝ入る
讀みつかれ心ぼんやり夜すぐる雨の唄ひをき
くなりけり
寢床に入らんとすれば机の上の御所柿に眼の
ひかる

われ — 短歌三十六首 —

高杉 階梢

振り上げし鐵拳はたと止まりて涙さめ／＼流
すわれはも
あせれども出口を得ざる惱しさ袋の外は麗ら
かならむ
我といふ者と語りて今日もまた涙ばなしに終
りけるかも
淋しさを賑はさんとしてすねてみし私の心を淋
しがりける

夏の夜はしら／＼明けぬ停車場へ走れる友の
白き股引
蚊帳にゐて歌詠むわれの眼の痛み蚊の聲繁き
五燭のひかり
おもむろに宵闇迫る川の面に小さき魚の銀色
の腹
夕暮のしゝま破りて遊びする人ありわれの肌
やゝ寒き
街の灯を浴びて群れ行くぞよめきを駆け抜け
て行く我なりしかも
戀もなく十九の秋は立ちにけり風うそ寒き日
のあじきなき
いらだてる心の角に觸れて行くよろづの物の
いと憎きかな
悲しみの極まり行きて哭きもえずたゞ茫然と
しはしつれども
我もいまをどことなりぬかたくなの父よ静か

に物云へよかし

なみ／＼の父の思想に謀叛して愕かさむとは
かりし我は

弟の頭の白毛めにつくも秋立つ頃の淋しさな
りし

父により歌によれども我胸の淋しさ癒へず蝙蝠
蝠とべる

悲しさの何ものなるか認め得ずたゞ悲しとて
我が靈は哭く

十六の汝がかむばせの醜さの哀しからずや美
衣の君

久々に送りし手紙の返事こす秋の疊のいとも
つめたき

現實の醜き潮よせ来る苦しき我は悲鳴あげつ
つ

空虚なる饒舌よりも沈黙の充實に生く我れと
ならまし

新しき黒地に白を散らしたる君が緋に秋ほの
見えぬ

はからずも君に遭ひたる嬉しさは青海原にあ
かるき日さす

初秋の宵闇迫まる並木街や、淺黒き襟足の美
き

忘れたる戀呼び覺ます初秋の風に吹かれて我
が靈は笑む

わが胸の穩かならぬあかしをば見られじとし
て速足に行く

喋れよと君は云へども性質に裏切れよとはさ
ても云へまじ

限りなき法悦に生く我なるを淋しきやとて君
は問ひにき

仲秋の月はめでたきものながら涸れたる河の
あさましきさま

ほど／＼と寂しき秋の行く如し月出でたるに

灯もつけぬさと

苦しさはあとからあとへ流れ来る渦の中なる
我やるせなき

久々に父よりふみの送り來し其の夜淋しさい
やまさりにき

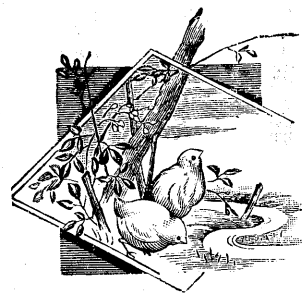
曉の霧は靜かに流れ入るがたびしとして戸を
あくる我

蜂の子の一羽とびきてなく日なり秋海棠のな
やましきさま

現實の姿まざ／＼見ゆるなり我をとりまく人
の醜き

冷けき人の中をば遊びゆく我が腕細し我が脛
細し

——をばり——



雜報

卒業式

六月二十九日本校第二十七回卒業證書授與式を
舉行せらる卒業生の氏名文部大臣祝辭校長告辭
卒業生總代答辭左の如し

卒業生姓名

第一部(英法科)

米澤 菊二 石川 平
荒木 秀雄 石川 平
中山 喜久松 石川 平
坂本 覺治 石川 平
永田 哲三 東京 士
佐伯 長生 富山 平
甘蔗 義邦 石川 平
御影 池四雄 石川 士
辻 利吉 東京 士
加藤 五一 愛知 平

飯田 愛治 栃木 平
足利 貞新 湯平
山根 弘毅 山口 士
根岸 勝一 栃木 平
西岡 登兵 庫平
荒木 幾太郎 福井 平
川上 由喜 新潟 平
高橋 周亮 栃木 平
周 宏平 支那
竹田 儀一 石川 平

桑尾 勝雪 高知 平
肥後 誠一 神奈川 士
土居 直行 香川 平
藤田 悟助 東京 士
渡邊 晉治 東京 平
前田 三郎 東京 平
黒宮 直道 愛知 平
板谷 徳太郎 石川 平
法邑 才一 富山 平
福田 惠三 栃木 平
佐藤 友一 山形 士
角田 敬三 三重 平
大野 一六 栃木 平
田多 野信孝 石川 平
古宅 喜興司 福井 平
久保 田忠吉 福井 平
香村 泰助 愛知 平
橋爪 庸藏 山形 士

第一部(獨法科)

竹内 亮二 石川 平
饗庭 光古 滋賀 士
河合 鐵二 富山 平
佐宗 直吉 神奈川 平
多賀 高吉 東京 士
佐藤 信吉 岐阜 士
小川 延賢 石川 士
河野 喜茂 大分 平
内野 豐吉 熊本 平
高野 正雄 兵庫 平
塚田 清男 鳥取 士
木村 智雄 東京 士
小此木 繁 東京 士
山根 禮 栃木 平
志村 節 石川 士
井上 易 京都 平

井村 平次郎 福岡 士
佐藤 次郎 長野 平
大堀 市治郎 大阪 平
藤山 知孝 滋賀 平
藤本 愼平 靜岡 士
口田 康信 神奈川 平

小川 浩 栃木士
森田 良雄 石川士
小山 知一 福島平
山岸 龍 新潟士
工藤 耕一 東京平
杉本 舜 石川平
中澤 正治 新潟平
柳 辰五 石川平
林 政武 石川士
田中 貞吉 岐阜平
長澤 廉介 新潟士

渡邊 六郎 新潟平
岡 和一 福井平
米澤 喜久松 石川平
加藤 拓次郎 富山平
松島 喜作 兵庫士
大森 鶴次郎 東京士
大西 峰藏 三重平
藤平 左中 千葉平
渡邊 萬作 長野平
西村 忠次 石川平
杉本 立也 石川士

駒原 桂藏 福井平
柴 房吉 富山平
照井 剛毅 秋田平
奥村 内膳 石川華
齋藤 淳藏 福井平
吉田 外茂雄 石川士
山下 輝夫 廣島平
前田 勤 石川萃
藤田 豪 石川士
佐々木 健太郎 岐阜平
五島 鐵郎 富山平
黑梅 金次郎 石川平
西 修三 福井士
渡邊 隆吉 石川士
壽時 富彌 北海道平
橫江 亨 福井平
齋藤 外興次 富山平
三上 清美 新潟平

森 長四郎 香川平
大谷 泰廣 茨城平
高橋 孝治 東京平
仲谷 新治 新潟平
瀨尾 健二 石川士
島田 久生 福井平
高柳 義一 富山平
出島 嘉吉 石川平
松村 正三 石川平
木戸 健吉 福井平
宮川 敬三 福井平
杉江 重誠 富山士
渡邊 義道 福井士
石崎 信次 東京平
中村 富士太郎 北海道士
谷口 二郎 福井平
細川 英二郎 京都平
荒尾 三松 富山平

第一部(文科)

武田 眞量 福井平
上田 良吉 富山平
河畑 立詮 富山平
川田 茂信 三重士
平 泉澄 福井平
十時 進 福井平
横湯 溫真 新潟平
藤本 了泰 茨城平
宮川 貞俊 石川士
淺若 晃 愛知平

丸瀬 正恭 青森士
塚原 順英 富山平
中西 貞一郎 京都平
原 誠一 神奈川平
黃 武支 那
横山 茂 愛知平
高井 俊吉 福井士
淺井 惠倫 石川平
松原 外松 石川士
最上 外茂雄 石川士

篠原 雄 石川士
竹内 時男 石川士
篠原 雄 石川士
竹内 時男 石川士

第二部(理科)

周 昌壽 支那
栗田 茂策 静岡平

第二部(農科)

松村 伊之助 石川平
牛込 義一 新潟士
永原 俊治郎 新潟平
竹蓋 千代三 千葉平
甲山 寛之進 兵庫平
廣野 寛三 三重平
吉野 兵吉 北海道平
東野 市次郎 石川平

藤井 隆二 福井士
八百谷 照之助 東京平
山本 光政 石川平
伊藤 潤元 富山平
阿波 加政信 富山平
伊藤 成義 石川平
内藤 德太郎 新潟平
角野 彌太郎 福井平

柳川 新吉 德島平
渡邊 福太郎 新潟平
小關 勉 栃木士
岩田 三史 埼玉平
坂東 政雄 富山平
外山 準一 長野平
北村 譽造 新潟平

吉村 寧儀 福井士
内藤 三郎 兵庫平
天木 順吉 愛知平
金子 正夫 新潟平
梶村 外吉 富山平
中島 留治 福井士

第二部(藥學科)

稻葉 龍三 新潟士

第三部(醫科)

齋藤 正意 富山平
山川 保城 福井平
石橋 修三 福井平
安達 四郎 奈良士
小林 謙次郎 長野平
成田 勝郎 新潟平
和久 井豐一 福島平
植木 貢 新潟平
平泉 泰福 福井平

清水 鎮治 富山平
林 盛雄 新潟平
松岡 兼吾 富山平
大塚 武夫 東京士
永井 靜香 川平
富田 稔 福井平
平尾 宗憲 德島平
玉置 恪三 奈良士
小林 大乗 新潟平

文部大臣祝辭

徳ヲ達シ材ヲ成スハ修學ノ第一義タリ苟モ學ニ
就キ業ヲ習フモノハ居常之ヲ以テ念トセザルベ
カラズ況ヤ教ヲ最高ノ學府ニ受ケテ躬國家ノ中
堅タラントズルモノニ於テヲヤ諸子夫レ自ラ重
ンジ自ラ警メ夙夜ニ勉勵シテ克ク其ノ徳ヲ達シ
其ノ材ヲ成シ本校教養ノ旨趣ヲ完ウシテ國家ノ
期待ニ副ハンコトヲ勗メヨ之ヲ諗ケテ祝辭ニ代
フ

大正四年六月二十九日

文部大臣 法學博士 一木喜徳郎

校長告辭

卒業生諸子諸子本校所定の課程を修了し此に本日をして卒業證書を受領せらるる是れ諸子多年勉學の效果にして余の欣喜措く能はざる所なり曩に歐洲戰亂勃發し獨逸兩國との通商杜絶するや染料醫藥化學藥品等缺乏を告ぐるもの少なからず是れ我邦科學工藝の發達猶幼稚なるが爲なり而して科學工藝の發達の遅々たるは其の源因多々あるべしと雖科學の價値を認むる事少き事も亦其の一なり歐洲戰爭起りてより今や一年に垂とす而かも獨逸は善く四隣の強敵と戦ひ雷に尺寸の地を失はざるのみならず西は白耳義を蹂躪して佛蘭西に侵入し東は兵を露西亞の領域に進めて之と戦ひ更に海上に於ては潜航艇を放て屢奇襲を試み英國海軍の強大を以てして尙且策の出づるなきに至らしむ獨逸の行動に至りては非議すべきもの少なからず特に我邦は今日獨逸と

交戦の状態にありと雖其の國力の旺盛なる一事に至りては之を是認せざるを得ず獨逸の國力此の如く旺盛なる大原因の一は國民が科學を尊重し其の研究の結果を實地に應用せんことに勉むることとなり聞く獨逸には大學以外に規模宏大にして設備整頓せる獨立の研究所を設置し學者研究の便益を計るのみならず大なる工業會社には必ず研究所を附設して専門の學者を入れ専心研究に従事せしむと云ふ我邦に於ても夙に此點に着眼し研究所設立の議を唱ふる人ありしも時機尙早く容易に其の實現を見るに至らざりしが今回染料、醫藥、化學藥品等の缺乏は切實に科學研究の必要を感せしめ近く理化學研究所設立の運に至らんとす此の如く科學の價値の漸く一般に認められんとするに至りたるは獨り學術界のみならず我國家の爲に慶賀すべきことなりとす以上は主として殖産興業等に就て説述せるもの

なるも宗教道德教育政治法律等人事に關する諸問題の解決も亦之を科學の研究に待たざるべからず固より人事に關する諸問題は其の關係極めて複雑なるを以て科學的に之を研究することは甚だ困難なりと雖此の方面に於ける科學の應用も亦日を追うて漸く盛ならんとす今や諸子は大學に入りて學術技藝の蘊奥を極めんとするものなれば能く其の研鑽討究に勉め社會が科學の價値を認めんとする氣運と相待て以て國家の隆盛に貢獻するあらんことを期せよ一言を述べて告辭とす

大正四年六月二十九日

第四高等學校校長 溝淵 進馬

卒業生總代答辭

本校茲ニ生等ノ爲メ卒業證書授與ノ盛典ヲ舉ゲラレ文部大臣閣下ノ祝辭並ニ校長閣下ノ懇篤ナル訓諭ヲ辱ウス生等ノ光榮何物カ之ニ如カン惟

フニ生等ノ本日アル所以ノモノハ偏ニ校長閣下並ニ恩師各位ノ薰陶ノ賜ニ外ナラズ生等今本校ヲ去ツテ最高學府ニ入ラントスルニ當リ熟ラ方今ノ世局ヲ觀ルニ益々生等ノ奮勵ヲ促スモノアリ即チ之ヲ外ニシテハ歐洲大亂ハ世界文明ノ進展ノ上ニ偉大ナル變化ヲ齎サズンバ止マザルベク之ヲ内ニシテハ産業界ニ自給ノ聲喧シク思想學術界ニハ獨立ノ氣運漸ク動キ而シテ各般ノ實際社會ニ於テハ只管ニ根底アル人格ヲ要求シテ止マズ然リ今ヤ我國民ハ上下相共ニ努力シテ以テ深ク國民生活ノ根本ヲ培養シ獨特無二ノ文化ヲ完成シ以テ世界人類ノ進化史上ニ帝國存在ノ意義ヲ明カナラシメザルベカラス生等ハ此ノ如キ緊要時機ニ際會シタルヲ衷心甚ダ愉快ニ感ズルト共ニ責任ノ益々大ナルヲ覺ユ故ニ生等爾後愈々奮勵努力シ各所期ノ理想ヲ大成シテ以テ校長閣下並ニ恩師各位ノ御高恩ニ酬インコトヲ期

ス謹ンデ答フ

大正四年六月二十九日

第四高等學校第二十七回卒業生總代

篠原 雄

講師ヲ囑託ス

八月三十日

栗原武二郎

任第四高等學校教授

學習院教授 高橋 周而

叙任辭令

六月三十日

補第四高等學校生徒監

教授 相良益次郎

教授 八波 則吉

依願第四高等學校生徒監ヲ免ス

七月五日

醫員ヲ囑託ス

石黒 四郎

七月二十八日

第四高等學校教授 岩城準太郎

任奈良女子高等師範學校教授

八月二十七日

新入生歡迎會

十月一日金曜日の午後三時より新入生諸君を至誠堂に迎へて大歡迎會を催す。

天空碧々として半片の雲もなく、透徹せる初秋の氣は凜然として、天地の間に漲り溢れてゐる。校庭の樹草や、色づけるは歡迎の意を表してゐるのか。窓下にすだく蟲の美しき音をたつるは歡喜の曲を奏するのか。若々しい血と熱とに溢れてゐる元氣ある新入の諸君はめざましい希望と、抑えきれぬ喜悅の情とに包まれてひしひしとつめかけた。狭からぬ堂ももう、之等の若い歡迎せらるゝ人とする人ととして北辰會各

部の委員方と諸先生とで満たされた。

吉田清二君先づ起つて、「元氣に満ちた諸君を迎へて北辰會のため、又我校のため、喜に堪えない」とて、簡單にそして要領得た開會の辭を述べた。次で會長閣下起つて北辰會則第一條を朗讀して、歡迎の辭と共に新入生諸君の大いに本會のために努力奮勵せんことを望む旨を述べらる。代つて理事として上原生先起ちて「北辰會の各部ここに運動部が、近來急速な、かつ、非常な大勃興を來し旭日昇天の概がある。いつも北辰會の會がある毎に敗殘の歴史を涙を以て語り交はしたのが今や喜ばしくも優勝の榮ある歴史を物語るやうになつた。誠に歡喜に堪えない。之れ主として各自の努力は勿論ながら各部の聯絡によりて生じたもの故、今後は更に更に各部協力和合していよゝ美はしき歴史を作るやう心掛けられたい」との希望演説があつた。

時に東京及び京都の先輩から來た祝電が朗讀せられた。かくも我々の先輩が心にかけてくれるかと思ふと心嬉しい。

大田耕三君起ちて、「敵國外患なくば國亡ぶ、吾等は全國の七高等學校を相手として、之れに對抗し之れに勝るべき或る者を作らなければならぬ。」とて例の滔々たる雄辯を奮ひ「由來金澤の地は積極的進取的の土地でない。三百年太平の夢未だ圓にして、人は井水の蛙、無事平穩の世に狎れて活動の貴さを知らない。吾々は此の土地を以て存在の意義あらしむるには先づ北陸の學淵たらしめなければならぬ、校背に嚴然として聳ゆる尾山城は北陸の天地を俯瞰して百萬石の夢の誇を語るにすぎないが、然し吾人の内日本に獅子吼するには最も好適の礎台ではないか。」と又一轉して「日本の今日は決して安んずべきの時でない。政治上に學問上に、はた、文

藝上に宗教上に一として意を安んずるに足るものがない。ジャパンタイムスは明治天皇の崩御を以て日本の將來に一轉期を劃すものだと豫言した、吾人は必ず先帝陛下の御崩御を一區劃として更に明治時代以上の大區劃を期待せねばならぬ。世界は今や擾亂中にあるも、一國の發展の如何は其の國民の彈力の有無に依るのである。即ち若き青年の元氣あるか否かに依るのである。吾人若き人は今や獨逸の青年と戦ふのみでない、英露の青年とも戦つてゐるのである。いや世界あらゆる國の青年と戦ふの覺悟をもつてゐなければならぬのである。」とて力あり熱あり肺腑を貫く如き演説をして降壇。

駒井君出で、柔道部南下の歴史、優勝の顛末、第三高等學校へ挑戦の次第とを述べて柔道部の紹介をしてから順次各部の紹介に移る、今姓名だけ掲げて紹介の文句は略す。——鳥井君——漕

艇部、村田君——野球部、眞繼君——劍道部、太田君——庭球部、松村君——音樂部、石井君——弓術部、三須君——雜誌部、鷺尾君——遠足部、小原君——講演部、竹内君——語學部——終りて鈴木君登壇、熱辯を奮ひて南下軍の起原、歴史、現状及び應援等、南下軍なるものについて細かき紹介演説あり、時に新入生の總代として堀内君嚴肅なる態度と感激に満ちた音調と感謝に溢れた辯を以て答禮の意を述べられた。四邊も薄暗くなつて來た頃、いよ／＼餘興として錦織氏の薩摩琵琶を聴き菓子分つて散會した。

諸君は今や、懸軍萬里、遠征の第一日に於て既に優勝者の榮を有す。思ふに諸君の今日あるは何物をも透す處のあの血と熱との力の賜である。物はじめは眞面目である、眞實である。眞實は乃ち至誠。至誠の力は尤も強く尤も大である。希はくは諸君よ。諸君の彼の元氣に加ふる

に、この最も偉大なる至誠の力を以てして。帝國萬年のために努力せられんことを。(野口生記)

第三年級行軍記事

十月五日この日天快晴、氣甚だ昂る。午前八時半第三年級各部二百五十名戎衣に身を固めて運動場に集合す。本日の戦闘は江沼郡山中附近に行はるゝなり。然して部署左の如し。

統監部

溝淵進馬
西英盛
八波則吉

指揮官

岡本勇
相良益太郎
伊原敬之助
高橋溪次郎
山崎増太郎
大野平作
松本慶昭
小谷仁十郎

學生大隊
副官

富永隼人

宮崎友次郎

第一部中隊、第一小隊長 大津武敏

第二小隊長 松本雄吉

第三小隊長 鈴木豐

特務曹長 本間清兵衛

曹長 加内四郎

第二、三部中隊、第一小隊長 八田四郎次

第二小隊長 石澤儀七

第三小隊長 小川茂敏

特務曹長 竹越虎之助

曹長 松岡賢助

給養係 赤神良讓

佐野伴治

第一部中隊より順次校門を辭し順路金澤停車場に至り九時乗車す。十一時動橋に下車す。休憩凡そ一時間。快談放笑して大に戦前の英氣を養ふ。正午を過ぐる數分我北軍(一部中隊)は動橋村を辭して動橋川に沿ひて進む。(但し南軍たる二、三部中隊は既に本道を進みて我前面に現れんとす。)同村小學校附近にて左の想定を得た

一、約半日行程後方ニ行進中ナル北軍主力ニ
先行シ山中及竹田越ヲ經テ九頭龍川谷ニ進
出スルノ目的ヲ有スル北軍枝隊ハ（歩兵一
聯隊、騎兵一聯隊、山砲兵一中隊、工兵一小
隊）十月五日正午頃其歩兵ノ先頭ヲ以テ打
越ニ到着シタル時我ヨリ稍劣勢ナル敵ガ動
橋東北端附近ニ陣地ヲ占領シアルヲ知リ之
ヲ攻撃スル爲メ打越西南端ニ展開シアリシ
頃敵ガ山代方向ニ退却ヲ始メタルヲ見北軍
枝隊ハ直チニ追撃ヲ開始ス

二、北軍枝隊ニ屬スル學生中隊長ハ午後零時
五十分動橋東北端ニ於テ枝隊長ヨリ左ノ要
旨ノ命令ヲ受ク。

一、敵ノ主力ハ七日市方面ニ又其一小部隊
ハ松山方面ニ退却中ナリ。枝隊本隊ハ七日
市方向ノ敵ヲ追撃セントス。

二、學生中隊（機關銃二銃ヲ附ス）ハ左側衛
トナリ松山方向ニ退却スル敵ヲ追撃スベシ。
三、我騎兵ノ主力ハ分校、勅使ヲ經テ動橋
川谷ヲ搜索ス。

演習ニ關スル教示

一、敵ハ白帽、二、赤旗一本ハ歩兵約一小
隊、紅白旗一本ハ機關銃二銃ヲ示ス、三、空
包ハ各人百五十發携帶スルモノト假想シテ
十五發宛使用ス可シ。四、耕作物庭園等ヲ
損害スベカラズ。

一時十五分前尖兵を派して松山方面に進軍
す。十分に提井に達すれば我尖兵は南軍一
部の白帽が七百米距の松山村端の丘陵に点在す
るを發見しこれを射撃しつゝ進む。南軍は漸次
退却して二三の村落を過ぎ勅使村をも過ぎ、動
橋川を渡るやその堤上に展開して稍々頑強に抵
抗したり。時に二時數分前。炎塵最も甚しく全

軍疲勞の狀あり。既に南軍はこの陣地をすて、
間道を桂谷方面に退却せり。我即ち追ふて同じ
く間道をたどる。二時半。行軍益々困難、後方
部隊との連絡屢々斷たれんとす。然れども尖兵
はよく白帽勢を搜索しつゝ、峡谷の間を進み遂に
彼が桂谷の小往來に丘陵を背にして最後の抵抗
を試んとするを察し、我は傳令大に努めて全軍
を警戒す。彼陣形成るや射撃頻りに努め、我ま
た峡谷中の地物を利用しつゝ、應射しつゝ、漸次肉
迫す。時に三時十五分前。銃聲峡谷に響き、日
漸く曇り、殺氣滿つ。彼の形勢稍々亂るゝを見
るや我右翼まづ突撃し、全線應じて立つ。喊聲
丘陵に反響する時休戦喇叭朗々と鳴る。三時十
五分、兩軍道路上に交會して談笑す。

高橋統監の講評に曰く。

非常なる暑氣のうちに行動せる全軍士の勞を
多とす。余の處見を述べんに。先づ北軍が動

橋附近にて全部正面攻撃の態度をとりしは大
に宜し。たゞ水田のために運動敏捷を欠きた
るは惜し。斥候が本道の上のみ行きて、前後
左右の連絡等を顧みざりしは不可なり、かの
動橋川を經て森村に至りし時北軍は旗を以て
二個小隊増援の信號を示したるが、その際余
は傍にありし斥候に「北軍狀況如何」と問ひた
るに彼は「別狀無し」と答へたるが如き、斥候
は今一層の注意を要す。南軍後衛が敵方に有
利なる地位に止りて射撃せし場合多かりしは
遺憾なり。かの廣濶の地面を控へし動橋川畔
にて所謂背水の陣を布きたるが如きは拙なり
しと言ふ可し。また北軍先頭が無暗に敵に攻
撃接近せんとせしは實戰に鑑みて不能なるこ
と、知る可し。桂谷最後の突撃は實戰上より
見て不許の事多かりしも學生大隊の作戰とし
て行ひしことは承了す可し。

講評終れば四時。汗と埃にまみれし戎衣を吹く夕風は流石に秋とて身にしむ。桂谷の細徑をたどりて一峠を越せば山中町の瓦壁、大聖寺川の清流眼下にあり。黒谷橋を渡り、湯華の香高き町に入り各隊指定の宿舎につきしは六時過なり

き。
(記録係
吉田
針田)

演習雜觀

○汗と埃が敵弾よりも苦痛だ、敵が頻りに増加して猛射を極めて木陰や軒下に水でもある敵に背中を向けてがぶがぶやられながらも場合が多かつた。

○戦闘地の子供達珍らしさにつまみさふ「おい鐵砲をかついでくれ」を命すれば至上の光榮と心得、太郎作次郎作おのれの丈に餘り銃を大切に両手でかづいで来る。時には擔いだ人、擔かせた人互に見失つて「おい、おれの鐵砲誰れが持つてゐる」。「三百五十は誰れや」。

○桂谷の決戦終つて集合しやうとした時、如何した機會か古樹の上の蜂軍が襲來した。我聯合軍此の度こそは「實戦に望む」覺悟で戦ひ且つ逃れた。獨法軍が最も損傷多く或は頭を刺され或は耳蓋を膨し、或は眼鏡を失ふ等苦戦の狀慘たるも

のであつた。位置を代へて漸く危険を脱した。高橋指揮官、軍の某秀才を擲諭して曰く「君の頭を押へて逃る様は珍なものでやつた。活動寫真にとつてスメル館へ出したら大喝采ちや」諸方に聲あり「アモモニヤはありませんか」赤十字隊も蜂軍の奇襲を豫想しなかつたから大に間諜つく、誰か曰く、小便をつけてやらうか。

○蟋蟀橋は山中の名勝、斷崖數十尺、下には清碧龍も住むかと思はれる、其夕數十疋のわが裸虫連はだばんこぼんこ此の流に浴して一日の汗と塵を洗ひ大に清流の主を驚した。(吉田)

明けた朝(十月六日)

氣のせいであらう、心の置方の違ふ爲めであらう、疲の裡から蘇つた時の元氣さには昨日の苦勞が丸で影さへ感じられてない、秋の眞中である、元氣はよい、茶を飲んで、手拭をかりて湯に行く、眞珠の様な色澤で歸つてくる、それが皆んな行過ぎたあとに白い湯氣を爽々と立てゝゐる、角の梨子賣り娘が廻り切れない、忙がしさに銅貨を握つたまんま剩錢に不自由してゐる、バツチリした大柄の湯衣を積みあげた裡か

ら山中節が纖弱の振動で調子好く響く、例になく子供が夙起きして、あつちへ寄せこつちへ寄せ、鐵砲を見て頻りと説明してゐる、驚ろいた眼の犬が尾を低く垂れてゐた、敷島につける小さなマツチが品切れだと云ふ、ぼつ／＼飯を食ひ初めた、汁は勿論冷え上つてゐる、土瓶をさげてだらしなない姿で無作法に二階へ昇るのは忙がしんだらうとも思つた、此麼んな所なんだらうともされた、肉刺が出来そうで心配してゐる、背囊の紐の切れをヤケに惶てかへつて取繕つた、盆の上に三つ四つ握飯が無様に轉がつてゐるのがある。宿の者が皆んな門口に突立つて眠たそ／＼な面でお世辭を使ふ、誰も流石に眼の中が赤い、而し元氣である又喇叭が鳴つた。

出發

午前八時、三百の小銃と劔は殺伐な響を残して去つた、秋の晴天は文字通りに一点の遮る雲

のない澄切つた光線を横なぐりに投げ掛けた、暫くの間は兩側が奇麗な緑である、今日の戦闘の期待が惜氣もなく回轉する頭の中で松の枝から漏れる黄色な輝やく朝日の糸を、てんでが自分の運命のより糸であるかの如く想像して、望みの光線を切り開いて進んで行く、跡には紫の煙が平和を愛するが如くに、或は又生存の眞諦には War の避く可からざるを達觀してゐる冷靜なる「哲學の煙」の如くに悠然としてフツ／＼と昇つてゆく、消えてゆく、奇麗な心持のよい橋を一つ越して、やがて山代から八日市の春日神社である、十時すぎ三十分と云ふに白帽軍中隊長は想定を與へられた。

北軍(一部中隊)想定

一、北陸道ヲ北進スル敵ヲ動橋附近ニ於テ迎撃スル目的ヲ以テ同街道ヲ南進スル北軍枝隊ノ前方約一時間行程ニ在テ行進スル學生中隊(機關

銃二銃ヲ附ス)ハ十月六日午前十時其先頭ヲ以テ八日市西端ニ達ス而シテ其任務ハ速カニ作見西端高地附近ニ陣地ヲ占領シ枝隊本隊ノ到着ヲ待ツニ在リ

二、此時我騎兵斥候ノ報告ニヨレバ敵ノ歩兵一部隊ハ午前九時頃其先頭ヲ以テ大聖寺南方庄司谷附近ヲ行進シツ、アリト 演習注意、敵ハ黒帽其他前日ニ同ジ、 演習統監 高橋講師

戦 闘

第三小隊尖兵として北國街道を作見西端高地に向つて戦闘動作に移れり、既に此時小菅波高地を占領せし敵は、道路の右側松並木の間に現はれ、彼我斥候砲火を交ゆ、作見西端陣地によれる我中隊は敵の未だ十分展開せざるを利して、急激なる射撃を以て支持せんとせしも、敵は左側に廻轉せる二ヶ小隊と右方高地よりの急射撃とによりて益々前進しつゝあれば、二十分間戦

闘後、我は後方陣地に決戦すべく八日市右側に背進す、十一時半、敵は斥候を鐵道線路の右方に派し、我と一大決戦をなすべくひたすらに進み來れり、我も敵も未だ發せず、富塚の右端に線路を占領して迫らんとする敵が未だ展開し了らざるに、我先づ火蓋を切れば敵は更に機關銃一門を以て悠然として前進し來る、白煙濛々砲聲轟々轉々天地を震動せしむ、恰も好し、此時一輛の列車砂塵を卷きて空を蹴れば敵は其陰を利して先づ左翼に大前進をなせり、中央動き右翼又迫る、我寸敵寸、敵尺我又尺、肉薄肉薄、砲聲愈々隆にして益々接近すれば萬口一時に紅の焰を吐く、刻一刻瞬又瞬。砲聲至激抜く手も見せず交互に着劔すれば、殺氣滿天「突撃にー」!!!進め!!!屍を呪ふ突撃の喇叭、嗟乎劍戟の響咽喊の聲、修羅場は演出せられぬ。時に十時五十分、休戦の喇叭喇叭と響けば、萬山聲死し、屍の地

に秋の虫の哀れささへ聞ゆ、鳥の陰だになく、所有生の最後の日にかき曇れる墨色の天にはかに輝やきぬ。

戦闘後の休憩

十五分の休息は餘りに短かつた、今まで疲れも知らずに居つた、暑いのも氣付かずにゐた、眞赤に火照つた腥い額に呪の汗がジブ／＼出てゐるのに氣づいた時には、空寒むにも終に走つて家に歸つた人が一枚脱いだ後のいやな冷たさであつた、然し顔頭手足は相當に火照つてゐる、切角に積み掛けられた稻垣の陰で、君一本くれと言つた時には、唯さへいやな臭のする禿頭病で死んだ四角の犬の皮から、ダラシ無く、ブラ／＼下がつてゐる兵隊さんの第二の商賣道具の處置に窮した、第一義の武の表象でさへも重くて叶

歸 校

はない、況んや第二第三義のそれに於てをや、流石に義務を遂行したといふ精神的輕減と、何

り乍ら動橋驛前の茶屋の椽側に掛けた時には、

とない長閑さがある、吾々は寧ろ疲勞によつて感じた物質的質量の増加は、より少く後者の爲めに打ち消されて居ると思ふ。

講評 高橋統監

「白帽軍は昨日の行軍よりも下手であつた元氣は昨日と餘り變りがない道路に大變擴張したのが甚だよろしくない黒帽軍の斥候は昨日より側面に警戒した様である作見村の右側森林地に斥候を派遣しなかつたのは大いに不利であつた、總べて演習判斷と云ふ事は最も避けねばならぬ味方の不利と敵の有利とを考察して巧に其裏をとつて行かんといかん一般に元氣か不足であつたもつと元氣出してほしい元氣のないのは各員の怠惰である」

人もこゝして吾々の様に演習をやり了せた人であつた、形に於て吾々は完全な兵である、心は——然し射山の嵐を驚ろかす清盛入道が氣まり惡る相に息子の前で墨染の衣を被つた體である、吾々は牝雞の玉を懷く心であり得ない、ではいかん、吾々は神聖なるそゝして歴史あるそゝして悲哀と感激と愛と情と忠義と犠牲との所有る化体たるローマン的な武裝をして居るのではないか、此武器こそ、此武裝こそ、皇國々民の特權である、それ以外の何人も着け得ぬのではないか、吾々が與へられた三ヶ年間約三百六十時間の兵式体操の意義果して如何、それは最も眞率に武の國神州の國大和魂の國の有難さを考察すべき國民的自覺の權利である、健全の精神彈力ある活動克己の源泉は恐らくは枯れ切つた數學的四角四面の塵だらけの敎室の板の間からではあるまい、夫は只天上天下唯我獨尊の青

天井の下縁の森の影淡き雪の上に器械の一勢力として輸入された一物質的形體が三千年の健全なる國民性の試金石に鍊磨せられたゞき上げられ魂の入つて三十年式と云ふ靈感に接觸する時に可能なものではなからか、吾人の頭はあまりに數學的である、あまりに理論的である、智識的である、所謂兵隊さんとして銃を肩にするのには、だから吾々は一器物として特定の時間には、特定の行動によりて特定の人から特定のバラードの中で動くのには。吾人は人形として立派に装ひ度いよりも無爲にして思考し度いからだ、吾々はそゝ云ふと濟まないが所謂兵隊さんよりも智識がある丈け理窟つばい、体操か何になるかと思つてゐる、而し其理窟は狭い吾々は、眞理の神は盾を兩面から見る事を教へてくれてゐる事を忘れてはならぬ、吾人は學問して眞理を得んとしてゐる、然し自ら制限がなくてはならぬ、

吾々は學問した爲めに反つて眞理を見る事は出來ない事がある、三ヶ月間建長寺で門をたゞいた學者よりも、庭掃除の爺さんが早く悟つた相だ、吾々は認識し様とすればする丈け解らなくなる、飯を食つても歩いて話しても讀んで居ても、誰かに後から壓される様な氣がする、歩いて遅くて間に合はない氣がする、飛んでも矢張り一向近づかれない、馬車然かり、電車然かり、自動車然かり、飛行機で行つたらごうだ、大坂毎日の民間飛行家遺族同情寄附金取扱方の御世話になるなんてのはよしてくれ、よくない、靜止して居れない、歩んでも飛んでも居れない、實際學問の有難い、お蔭である、目的として進み目的の爲めに今ぢや苦勞する、丁度多くの人が幸福を求めつゝ不幸にはまつてくど同んなじだ、現代の人の心理は實際此通りだろ、だから吾々も体操のベドイテンする所を認識したがる

のだ、認識され得るもの、認識され得べき性質のもの、又され得ざるもの、存在を知る吾等の事だから、是非を判断するなら、勿論体操なるものは第一義に属するものである、故に之に生命と意義とあらしむるには、吾々教育ある者の甚だ易い所である、もしも吾々が所謂魂ある人形として、兵隊さんとして動いた時に、吾々の

智識は最大なる威力を持つ爆発薬となつて、よく加工し得るに違がなから、それは確信である。四、五、十分の時間にそれだけの事の出来ない高等教育なら、獨乙語の權威も實際怪しくなる、所有迷想錯誤、空想、もがつき、やきもき、むしやくしやヒステリツシな想像をよさう。

Gibicht auf die Gassen !

Blick auf zu den Sternen !

巷を見よとは人形となつて働けと云ふのだ、星を看上よとは魂の入つた人形となつて躍れと

云ふのである、お茶を飲んだり梨子を食べたりして此様な事を考へてる中に汽車が来た、愉快な像は其儘汽車で歸つた、未だ大分早い時分だつたが」(博洲竹内生記)

第二年級行軍記事

秋雨の窓を打つ音が怪しんだのは、落ち行く木の葉の戦ぎであつた。従軍記者といふ大切な役目を帯びて居る事故、何時になく天候が氣遣はれる。一管の筆を楯として戦場を馳驅する余輩の役目又重い哉。

時は十月十三日、二年生を以て組織せる全軍は午前九時校庭に集合、薄い日影を浴びて停車場へと急いだ。十時三分臨時列車にて金澤發小松驛で下車したのが十一時少し過であつた。空模様も次第によくなつて全軍の元氣も益々奮ひ立ち、二日間の活動を豫想してその面にも喜び

の色が溢れてゐた。全軍は浮柳に向て前進を始め、途中にて、南北兩軍に分れ、予の屬せる南軍は十二時三十分浮柳に達した。やがて大野中隊長より本日の想定を與へられた。

南軍(白帽軍)想定 一部中隊

一、南軍混成旅團ハ小松北端ニ於テ優勢ナル敵ト對戰中決戰ヲ避ケ北陸道ヲ背進シ片山津富塚ノ線ニ陣地ヲ占領シ以テ後續梯團ノ來着ヲ待ツニ決シ十月十三日正午頃ヨリ退却運動ヲ開始ス

二、旅團戰線ノ左翼ハ下牧附近ニアリシ學生大隊ハ左側衛トナリ浮柳、日末、佐美、新保ヲ經テ片山津西北方潮津ニ至リ旅團ノ左翼ニ陣地ヲ占領スルノ目的ヲ以テ午後零時五十分浮柳南端ヲ通過セル時其ノ後衛タル一部中隊ニ左ノ要旨ノ訓令ヲ與フ

一、一部中隊(後衛)ハ先ヅ浮柳南方林端附近

ニ於テ我騎兵ヲ收容シテ爾後左側衛本隊ノ進路ヲ背進シ佐美、新保附近ニ於テ後衛陣地ヲ占領シ以テ潮津ニ於ケル學生大隊陣地占領ヲ掩護スベシ。但シ潮津ノ陣地構成ハ約一時間ヲ要スル見込ナリ。

二、貴官ニ機關銃二銃ヲ附屬ス

三、最後ニ浮柳橋ヲ通過スル我騎兵ハ同橋梁ヲ破壊スル筈、爾後騎兵ノ主力ハ安宅新、濱佐美方面ヲ警戒ス。

演習ニ關スル敎示

一、敵ハ黒帽、二、赤旗一本ハ歩兵約一小隊、紅白旗一本ハ機關銃二銃ヲ示ス、三、空包ハ各人百五十發ヲ携帯スルモノト假想シ十五發宛使用スベシ、四、耕作物、庭園等ヲ損害スベカラズ。

第一小隊は、浮柳の南端に留まつて敵の動靜を探り、第二第三小隊は本隊としてその退却を開

始した。道は松林の中を一筋に南へと走てゐた。四邊は吾等の踏む落葉の音より外に寂として何の音もない。澄み切つた秋の空が私等の頭上に廣く擴がつて、暖かな柔らかな光線が松の葉越しに縞をなして私たちの背や、朽葉の上へ流れてゐた。突端に何處からともなくその清冽な空気を亂して發砲の音が聞えた。梢に靜かに眠てゐた小鳥が驚いて二三羽立つて行た。これは我斥候の射つたものらしい。時に一時二十五分。予は本隊を離れて又二三町許り逆行して見た。砲聲が頻りに聞えて、斥候戰が闊なものらしい。と見る中に我が隊の斥候が四五名本隊の方へ報告に駆けて行た。余も敵の斥候の追撃益々急なりとの報を得て又本隊の方へ引きかへした。路は尙松の香ゆたかな林の中を脈々として續いてゐる、實に靜かだ。

本隊は日末の北端に在りて、一先づ防禦陣地

を布いた。散兵を作てゐる堤の向ふはかなり開けた田畑で、遙かの森林中に敵の白帽が散見して時々一抹の白煙がその發砲を知らせる。我軍も之に應じてゐる中に吾軍の斥候は敵の尖兵の爲めに散々に打ちなされた左方百米許りの森林中より突如として退却して來て本軍にその急を告げた。この時既に大野中隊長に率ゐられし本隊の大部は退却して唯だ一部のみその第一小隊の掩護に當てゐた。この報を聞くと直ちに、その本隊に合すべく急ぎ退却を始めた。この時敵の尖兵は事實非常に接近してゐた。しかし日末村にて巧みに姿をかくせし我隊は暫らくして佐美の北端に達し一岡の上に有力なる陣を布き以て敵軍を一舉にして撃破せんとした。時正に二時十分。記者は岡の麓にありて以て敵の尖兵の到來を待つた。敵はやがてその人家の蔭にかくれて、山上の我軍に向つて射撃を開始した。

吾軍始め極めて勢強かりしも南軍の本隊の現はるゝに及びて、退却の止むなきに至り、急ぎその高地を去り更に北へ向た。此時南軍の一隊又側面の高地の山林中に現はれ、北軍益々驚き急行して更に北方にある有力なる丘により第二の防禦陣地を張る。本隊の一部は尙退きて最後の陣を松林密生せる山上に布く。されど敵勢益々奮ひ第二の防禦陣も潰るゝに及び北軍の生存者は遂に最後の陣によりて勝敗を決せんとして之を固守す。この頃より密雲頻りに往來して風さへ肌寒き程に吹き初め、何となく暗愴悽愴の氣が漲てゐた。南軍はやがてその陣容を整へて北軍陣地と相對する小丘の上に現はれた。やがて最後の決戰の砲火は山も動けと許り猛烈に開かれた。

「突撃に前へ」の號令と共に南軍は恰かも塞かれし水の流るゝか如く大叫喚を爲して吾か陣地

へ肉迫した。劍光きらめき帽影飛ぶ時、休戰の喇叭は音高らかに鳴り響いた、時正に二時二十五分。かくして第一日は終つた。その後松林の中で高橋先生から講評を聞いた。

「斥候動作に關しては、浮柳の南端に於ける白帽軍斥候はよし。黒帽軍斥候の道路上のみ進みしは惡し。大間隔の散開隊形にて進むべきなり。又白帽軍の退却軍が道路上に塊まりて進みしも大なる誤なり。前同様の隊形にて進むべきなり。又一般に射撃の効力を考へざる事缺點なり。白帽軍分隊長は頑強に抵抗せしも尖兵を本隊と見誤まり急いで退却せしは大なる失錯なり。又、日末小學校附近にて黒帽軍の部隊が次第々々に増加するや白軍の斥候急いで退却したる如きは全く反對なり黒軍又白軍の斥候の道路上に退却するを見て射撃す

るが如きは誤れり。

白軍の中隊の佐美南端に地位を占めし時難談せしが如きは悪し。又日末の北端に着し兩軍尖兵相對する時、右の方に黒軍が斥候を出せしはよけれども、之も亦敵影を見て直ちに林中に返せしは悪し。少くも一小隊以上もこの右方の林中に常に伏兵を置くを要す。

概して元氣の程度はよし。その處置はあまり良くなかりしも元氣の點は結構なり。」

この講評の半ばより雨少し降り出し暮色は忽ちにして山上の吾等を取り卷いた。校長の講評があつてから私等はあの湖に臨んでゐる片山津の町へ向つて歸路に就いた。

第二日々程——十月十四日——

南軍想定——一部中隊

一、小松町附近ヲ領有スルノ目的ヲ以テ福井方向ヨリ北陸道ヲ北進スル南軍枝隊(歩兵一聯

隊、騎兵一小隊、野砲兵一中隊、工兵一小隊)

ヲ南方約一時間行程ニアツテ先進スル學生中隊(機關銃二銃附屬)ハ十月十四日朝大聖寺東端附近ニ於テ我ト略同等ノ敵ノ歩兵ニ出會シ是ヲ追撃シツ、午前八時四十分動橋東北方約五百米突ノ地点ニ達ス。

二、此ノ中隊ノ任務ハ成ル可ク速ニ串村附近ニ前進シ敵情ヲ偵察シツ、本隊ノ來着ヲ待ツニアリ

三、土人ノ言ニ依レバ敵兵ハ昨夜來北方ヨリ續續小松町ニ集中シツ、アリト

北軍想定——二、三部中隊

一、北軍枝隊(歩兵聯隊本部及三ヶ大隊、騎兵一小隊、山砲兵一中隊、工兵一小隊)ハ福井方向ヨリ北陸道ヲ北進中ナル敵ヲ迎撃スル爲メ目下小松町ニ兵力ヲ集中シツ、アリテ十月十四日朝迄ニ南進シ得ル豫定ナリ

二、學生中隊(機關銃二銃附屬)ハ前日敵情偵察

もるれば萬波金と輝いて劔影霜よりも美なり。

ノ爲メ大聖寺附近ニ派遣セラレ十四日朝迄ニ豫定ノ任務ヲ達成シ將ニ小松ニ向ヒ歸還セントスルニ際シ大聖寺東方ニ於テ略我ト同等ノ敵ニ出會シ、尙我騎兵斥候ノ報告ニ依レバ此

道路上に戰鬪隊形をとつて進む即ち第一小隊は尖兵第二、第三小隊は本隊となりて敵を小松方面に追ふ。

ノ敵ノ後方約一時間行程ニハ二三千ノ敵兵續行シツ、アルヲ知リ損害ヲ避ケツ、背進シテ午前八時四十分打越村ニ到着ス

午前八時半、萬頃の稻田已に刈られて眼をさへざる物なし砥の如き道此間に走りて坦々、月津村に至る迄敵影を認めず。

此時枝隊長ヨリ左ノ要旨ノ命令ヲ受領ス

午前八時四十分。南軍の尖兵將に月津に入らんとするや法照寺門前に陣せる北軍尖兵の一隊

一、枝隊ハ今曉迄ニ集合ヲ完了シ小松ヲ出發シ午前七時半頃ヨリ月津新ヲ中心トシ西南ニ面シテ陣地ノ構成中ナリ

は待ち構へし筒先を揃へて百千の瀧よりも激しく落しかくれば南軍尖兵も亦矢叫び高く虚空を鳴らして挑みかけ此處に血腥き追撃戰の序幕は

一、學生中隊ハ月津南端ニ停止シ枝隊ノ陣地占領ヲ掩護スベシ

開かれぬ、南軍の本隊は道路の右側によりて進む、北軍の尖兵地の利を得て頑強容易に退かず。

以上演習總監、高橋講師。

午前九時十分。戰鬪約三十分にして北軍漸く

響く喇叭の音柴山瀉の朝靄を亂す。朝霞紫雲を

退却したるも猶は叢林中に斥候を派し南軍の前

進を遲滞せしむ其の去るや風の如く其の現はるや光の如し。

午前十時二十分。時と共に機漸く熟し南軍未だ進軍幾程もなきに斥候は北軍中隊の主力は月津新の丘陵によつて南軍の前進を扼せんとするが如しと報ず。南軍隊を開いて丘陵を半圓形に包圍し一舉にして之を陥れんとす。硝煙空をこめて銃聲九天を撼がし矛裂け楯破れ、寄せては返す火の嵐地獄震ひて地維缺けんとす。山麓の松林中に展開して前進せる一隊先づ突撃に移れば相應じて進撃の譜此處彼處に起り逆巻く海嘯が狂奔する瀧津瀬が兵車碎け飛んで風に舞ふ木の葉の如く大略の轡々北溟の衆水一時に覆るかと怪まる、時なる哉休戦喇叭澄空に鳴り渡る。

丘陵の上に統監の講評を聞く。斥候の活動の昨日に比して敏なりしは可なるも地物の應用拙

劣にして就中最後の丘陵を包圍して攻撃に移りし時其の統一缺けたる爲め突撃の一齊ならざりしは遺憾なりしとの事なりき。

第二十二回陸上運動會

白山の峰々はいつしか白くなつて尾山城下の秋も深くなつた。明月が大槻松の上にかゝる宵が續いて新來、舊在併せて八百の健兒は共に緊張した學窓の鍛錬に努める頃には、また一方來らんとする競技の練習に忙しかつた。かくてわれらが先輩から傳へられたる運動會は今年二十二の齡を重ねて、十月二十七日(二十六日雨天のため)校庭に行れた。

場内には萬國旗が朝風に飄り、會場への通路なる分館の壁へは色様々なるビラが貼り付けられた。午前八時を過ぐる數分にして開會、出場の健兒は皆ベストを盡してその技倆を示した。

光榮ある勝利のメダルは次の諸君によつて獲られた。

- 第一回 二町競走 三浦、上田、芳賀
- 第二回 武裝競走 寺尾、丹後、松澤
- 第三回 盲啞競走 徳根、池口組
- 第四回 字引競走 河合、橋本、藤原
- 第五回 一人一脚競走 田崎、三浦
- 第六回 障礙提灯競走 佐々波、富森、間
- 第七回 幅飛 水野、野中、三浦
- 第八回 旗取競走 高安、福光、新田
- 第九回 福引競走 太田、關口、山田
- 第十回 二人三脚 北村、高松組、作田、徳根組、水上、堀野組
- 第十一回 鐵丸投、村田、金山
- 第十二回 カンシキ、スプーン競走 矢部、伊藤
- 第十三回 二町競走 宮島、竹山、山添
- 第十四回 算盤競走 野中、岩城、古村
- 第十五回 四町競走 大澤、細川、高安
- 第十六回 障礙物競走 松澤、正井、河合
- 第十七回 倒立競走 竹内、佐藤
- 第十八回 竿飛 石井、水野
- 第十九回 福引競走 井幡、佐竹、荒井

- 第二十回 二町競走 寺野、菅波、豊邊
- 第二十一回 竹馬競走 簡野、中島、高波
- 第二十二回 旗取競走 相良、長沼、岡田
- 第二十三回 重荷競走 伊藤、竹山、谷口
- 第二十四回 二人三脚 金山、松岡組、大谷、齋藤組、中川、藤川組
- 第二十五回 戴囊スプーン 安倍、簗和田、小倉

北辰會各部競走は弓術部の勝となつた。正午休憩。觀客漸く増加して來た。暫く競技場を離れて周圍を見わたせば、まづ靜勝館内には例の如く三部館が設けられた。標本機械類の真正面に光榮ある優勝旗が觀る人の眼に無言の誇を示してゐる。法文亭は例の大槻松の下、法文タイムスを發行して大に一部の氣焔をあげて居る。二部館は時習寮の角、最新建築の粹を集めた様式を示して聳えて居る。何か意味ありさうな「絹帽の巨人」が門口に建立されたが設計宜きを得ず倒れてしまふた。これに並んで天幕張の茶寮が控へて居る。次に時習寮を訪れば此處には二

百超然健兒が頭を絞り手を痛めた飾物が室々に
並んで居る。南寮の「始光」はよく光線を利用し
て妙、「朝顔に釣瓶とられて」は理解し易くて喝

める、時習寮の野試合は白軍の勝となつた。午
後の競走、勝利者次の如し。

采「ニールの邊」若き力「何處へ」には泰西文藝

第廿六回 四町競走 長濱、小池、小林
第廿七回 サツク競走 高、山田

の興趣を見る可く「石に立つ矢」「雪中孤村」「春

第廿八回 障礙物競走 山田、石田、矢部
第廿九回 六町競走 新村、岡本、阪田、矢島

の夜」は純東洋趣味のもの、中寮の「時の魔」は

第三十回 障礙提灯競走 唐生、小田、兒玉

稍難解、「我等の一日」は要領よろし、「有朋自遠

第卅一回 武裝競走 岡野、伊藤、新藤

方來不亦樂乎」の牛鍋には恐れ入つた「陣穀」富

第卅二回 一分間競走 大澤、井上、

口の緒」「首陽山」も觀衆にはわかりよい「北辰

第卅三回 福引競走 江見、田中、田畑

星」「超然の象徴」はよく出る題、意味は十分に

第卅四回 來賓競走 狩野氏、岩淵氏、原氏
縣立學校選手競走 村井(師範)金内(一中)倉重(二中)

表されて居た、北寮の「光榮に及向ふ者の末路」

雨はしどく降る、競走場へは砂が撒かれた、

は旨く當つて喝采、「寮生活」はその通り、「？」は

一部の餘興としてパン食競走があつた、職員競

如何にも器用の出來榮、「謎の塔」は時習寮飾物

走では岡本(清)金田、八波の三先生が勝を占め

に無てはならぬ者の一つ、「世は混沌」は獐猛、

られ胴上げされたるは大喝采。

「海底の神秘」「開拓者」相當に考へ出したもの、

場内にはかに物騒しくなつた、赤、白、青

午後に入つてあやしかつた空は二時頃より降

の小旗が周圍にちら／＼動く、やがて一部(赤)

り出した、然しわが健兒は愈々これからだと努

應援隊が選手を擁して場内に入つた、次で三部

益々盛なり。選手は左の九名。

(青)、二部(白)應援隊もそれぞれ選手を擁して

入場、場を一周して應援席につく、「JとLとの

部 報

榮かな」や「月の桂にや手が届く」や「走れ、走れ、

我部の選手よ走れ」と各部の應援歌が耳を聳さ

柔道部

ん許り、選手スタートに出る、雨愈々降り應援

事大思想に捉はれたる百萬石の舊城下は知ら

益々盛なり。選手は左の九名。

ず。炬燵と雨とに知られたる北陸の地は亦願す。

一部 (赤) 山口 研吉 河盛又兵衛 竹内 宿也

稜々たる白山嵐の巻くところ榮たる北辰の光鎧

二部 (白) 山口 六平 小松 哲清 佐々波誠治

を見すや。北辰の光鎧輝くところ三千年武道の

三部 (青) 小林 啓 横山 俊雄 近 璋太郎

真髓銀鞍の士魂を花と咲かせ實と結ばしむる之

赤、白、青雨中に走る。白始より優勢、三周

れ北辰柔道の主張なり。

の後決勝点に入りしは第一着山口君(二部)第二

四高柔道部が未汚れざる歴史の上に置かれ、

着近君(三部)第三着竹内君(一部)の順であつ

紫紺の優勝旗の無聲堂を飾るを見る時、我等は

た、かくて本年の優勝旗は二部の手に落ちた。白

常に先輩の残したる偉大なる努力の跡に敬意を

旗大に昂る、時に雨益々激しく觀衆殆ど散る、

拂はざるを得るなり。

最後の一哩競走は新村、吉田、寺島、矢島、山

今年六月幾多の先輩を大學に送りて寂寞の感

口君等の勝に歸した、閉會四時半。天候は我等

ありしにかゝはらず九月多くの新進の闘將を入

に幸しなかつたが我等は最善を盡して當日の競

技を終了した。(吉田)

技を終了した。(吉田)

れて我四高柔道部は名實共に舉りて未曾有の盛況に達す。

北國の天地誠に狭しと雖もそこに潜む我等の力殆ど計り知るべからず。以て四高の爲に萬丈の氣を吐く。

我等の誇とするところ我等の快とするところ亦ここにあらざるか。

第一回北陸柔道大會

此の我部未曾有の盛時に當り八月二十四日より四日間を期して第一回北陸柔道大會を催す。

参加するもの金澤一中同二中石川縣師範高岡中學魚津中學糸魚川中學柏崎中學の七校百の猛者を入れて金澤の天地活氣漲る。加之に村上四段中村三段は東京より吉野三段は富山より鑠鐵の酷暑を顧す我部の爲め斯道の爲に來りて審判の勞を執らる。其他各學校選手に附添ふ有段者十

餘名金澤に柔道史始りて以來の盛況を呈す。

我等は此の大會の第一回なる爲め委員の不行届と、財政上との点より、初めはこれの失敗に終らんことを恐れしが、幸にこれ等有段者諸氏の熱心なる援助によりて大成功に終るを得たるは深くこれ等の諸氏に感謝せざるべからざる次第なるが同時に諸氏の大なる勞に對して其の一斑をも報ゆる能はざりしは深く慚愧にたへざる次第なり勝負の次第次の如し。

八月二十四日(午前九時より)

魚津中學				○金澤二中			
大將	西田 昌成	大將	若森 茂雄	大將	若森 義雄	大副	今井 兼吉
副將	濱田 録男	副將	野村 武次	副將	野村 武次	副將	工藤 一三
眞門	善福	眞門	田中 春男	眞門	善福	眞門	折橋 平一
綱谷	力雄	綱谷	藤 良雄	綱谷	力雄	綱谷	折橋 平一
山西	綾成	山西	飯田 正雄	山西	綾成	山西	折橋 平一
香川	保家	香川	河合 政治	香川	保家	香川	折橋 平一
柴山	威則	柴山	澤 正元	柴山	威則	柴山	折橋 平一
竹中	貞義	竹中	米澤 喜久	竹中	貞義	竹中	折橋 平一

八月二十四日(午後一時より)

能登政次郎	平澤 得式
上坂 實	早水 清二
(審判江川四段駒井三段)	

○柏崎中學

大將	吉城 德一	大將	糸魚川中學
副將	二宮 芳正	副將	小林 源治
飯田 良平	金子 英一	飯田 良平	金子 英一
堀 長門	蘆澤 秀雄	堀 長門	蘆澤 秀雄
本多 孝之	大久保 後	本多 孝之	大久保 後
阿部 義一	森 博司	阿部 義一	森 博司
矢島 亮一	田野 秀英	矢島 亮一	田野 秀英
矢島 潤武	磯貝 戒彌	矢島 潤武	磯貝 戒彌
長橋 之恭	渡邊 利方	長橋 之恭	渡邊 利方
丸田 充治	山邊 三造	丸田 充治	山邊 三造

(審判江川四段駒井三段)

八月二十五日(午前八時より)

金澤二中

○高岡中學

大將	若森 義雄	大副	今井 兼吉
副將	野村 武次	副將	工藤 一三
田中 春男	折橋 平一	田中 春男	折橋 平一
米澤 喜久	富田 清三	米澤 喜久	富田 清三

二十五日(午前十一時半より)

(審判江川四段駒井三段)

飯田 正雄	松島 虎雄
川井 政治	喜多榮太郎
澤 正元	高徳 正次
早水 清二	篠田香四郎
平澤 得式	上野 興七
藤 良雄	上子 三省

糸魚川中學

○金澤一中

大將	小林 源治	大將	久村 正忠
副將	金子 英一	副將	中宮 忠一
布施 良	田中 芳男	布施 良	田中 芳男
大久保 後	宇多川市五郎	大久保 後	宇多川市五郎
森 博司	金 津	森 博司	金 津
田野 秀英	光木 豐一	田野 秀英	光木 豐一
磯貝 戒彌	木谷 長信	磯貝 戒彌	木谷 長信
渡邊 利方	長田 光次	渡邊 利方	長田 光次
廣瀬 三造		廣瀬 三造	
山澤 三造		山澤 三造	

(審判村上四段吉野三段)

二十五日(午後二時四十分)

角 間 ———— 濱田・録男

(審判江川四段吉野三段)

八月二十六日(午後一時)

高岡中

金澤師範

大將 今井 兼吉 ———— 大將 宮丸 忠
 副將 工藤 一三 ———— 副將 八幡 三郎

折橋 平一 ———— 宮永亮太郎
 富田 清造 ———— 杉本 清

松島 虎雄 ———— 根上 新次
 喜多榮太郎 ———— 北川作太郎

高廣 正治 ———— 杉田菊太郎
 篠田孝四郎 ———— 本島 信重

上野 興七 ———— 開發 吉次
 上子 三省 ———— 鈴 森

(審判村上四段中村三段)

大將 久村 政忠 ———— 大將 西田 昌成
 副將 中宮 忠一 ———— 副將 柴山 威則

田中 芳男 ———— 山西 俊成
 光木 豐一 ———— 網谷 力雄

木谷 長信 ———— 竹中 貞義
 宇田川市五郎 ———— 能登政次郎

森 ———— 上阪 實
 辻 繁雄 ———— 眞門 善祐

長田 光次 ———— 香川 保家

以上七回の試合の結果金澤一中と高岡中學とを
 以て優勝戦をなす事となれり

八月二十七日

爭覇戦

金澤師

柏崎中

大將 宮丸 忠 ———— 大將 吉越 徳一
 副將 八幡 三郎 ———— 副將 二宮 芳正

宮永亮太郎 ———— 飯田 良平
 北川作太郎 ———— 堀 長門

根上 新次 ———— 本多 孝之
 杉本 清 ———— 阿部 新一

本島 信重 ———— 矢島 亮一
 鈴森 嘉一 ———— 矢島 潤武

杉田菊太郎 ———— 長橋 之恭
 開發 吉次 ———— 丸田 治

(審判村上四段中村三段)

金澤一中

大將 久村 政忠 ———— 大將 西田 昌成
 副將 中宮 忠一 ———— 副將 柴山 威則

田中 芳男 ———— 山西 俊成
 光木 豐一 ———— 網谷 力雄

木谷 長信 ———— 竹中 貞義
 宇田川市五郎 ———— 能登政次郎

森 ———— 上阪 實
 辻 繁雄 ———— 眞門 善祐

長田 光次 ———— 香川 保家

八月二十六日(午前九時)

金澤一中

魚 中

大將 久村 政忠 ———— 大將 西田 昌成
 副將 中宮 忠一 ———— 副將 柴山 威則

田中 芳男 ———— 山西 俊成
 光木 豐一 ———— 網谷 力雄

木谷 長信 ———— 竹中 貞義
 宇田川市五郎 ———— 能登政次郎

森 ———— 上阪 實
 辻 繁雄 ———— 眞門 善祐

長田 光次 ———— 香川 保家

○高岡中學

金澤一中

大將 今井 兼吉 ———— 大將 久村 政忠
 副將 工藤 一三 ———— 副將 中宮 忠一

折橋 平一 ———— 田中 芳男
 松島 虎雄 ———— 辻 繁雄

富田 清造 ———— 木谷 長信
 上子 三省 ———— 宇田川市五郎

高廣 正治 ———— 金津 剛二
 篠田孝四郎 ———— 光木 豐一

上野 興七 ———— 小森 照知
 喜多榮太郎 ———— 長田 光次

(審判村上四段江川四段)

大將 久村 政忠 ———— 大將 西田 昌成
 副將 中宮 忠一 ———— 副將 柴山 威則

田中 芳男 ———— 山西 俊成
 光木 豐一 ———— 網谷 力雄

木谷 長信 ———— 竹中 貞義
 宇田川市五郎 ———— 能登政次郎

森 ———— 上阪 實
 辻 繁雄 ———— 眞門 善祐

長田 光次 ———— 香川 保家

秋季紅白試合

毎年の例により十月 日秋季紅白試合を行ふ

次第次の如し

○紅

白

大將二段 岡田 ———— 大將二段 大津(小外刈)
 (足拂反)田原 ———— 初段 大後崩上四方

(大内刈)伊藤 ———— 河合(大外刈)
 (釣込腰)堀内 ———— 村澤(袈裟固)

(押込)坂田 ———— 松岡

十一月十八日我部對金澤市内官立中學程度以上

の諸校の聯合軍との試合を舉行す

紅(聯合軍)

白(四高軍)

大將 若 森(二) ———— 大將 中村
 副將 中宮(一) ———— 副將 田原

宮丸(師) ———— 河合
 田中(二) ———— 近

宮永(師) ———— 近

(大腰)菅野 ———— 廣瀬(絞)

(釣込腰)原澤 ———— 淺川

(大腰)菅野 ———— 廣瀬(絞)

(釣込腰)原澤 ———— 淺川

(大腰)菅野 ———— 廣瀬(絞)

石垣 ———— 黒崎(大外落)
 (跳腰)中村 ———— 巽(脊負投)

(大外刈)堀井 ———— 批杷(体落)

(絞)久保 ———— 川瀬(跳腰)

(膝車)中川 ———— 町田(大外落)

(脊負投)梨本 ———— 水野

(絞)川脇 ———— 森田

(跳腰)江見 ———— 大岡(跳卷)

(大腰)菅野 ———— 廣瀬(絞)

(釣込腰)原澤 ———— 淺川

(大腰)菅野 ———— 廣瀬(絞)

(釣込腰)原澤 ———— 淺川

(大腰)菅野 ———— 廣瀬(絞)

(釣込腰)原澤 ———— 淺川

(大腰)菅野 ———— 廣瀬(絞)

(釣込腰)原澤 ———— 淺川

(大腰)菅野 ———— 廣瀬(絞)

(釣込腰)原澤 ———— 淺川

(大腰)菅野 ———— 廣瀬(絞)

(釣込腰)原澤 ———— 淺川

(大腰)菅野 ———— 廣瀬(絞)

(釣込腰)原澤 ———— 淺川

(大腰)菅野 ———— 廣瀬(絞)

(釣込腰)原澤 ———— 淺川

(大腰)菅野 ———— 廣瀬(絞)

(釣込腰)原澤 ———— 淺川

(大腰)菅野 ———— 廣瀬(絞)

(釣込腰)原澤 ———— 淺川

(大腰)菅野 ———— 廣瀬(絞)

(釣込腰)原澤 ———— 淺川

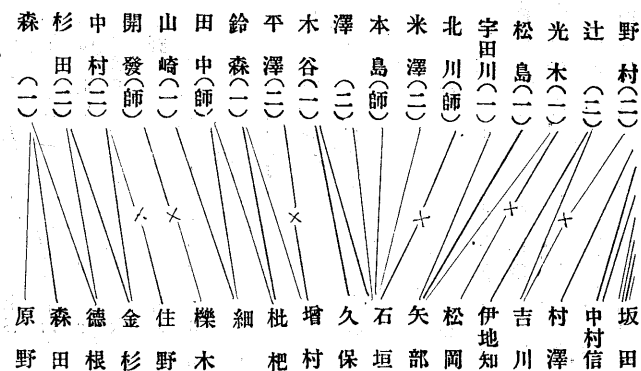
(大腰)菅野 ———— 廣瀬(絞)

(釣込腰)原澤 ———— 淺川

(大腰)菅野 ———— 廣瀬(絞)

(釣込腰)原澤 ———— 淺川

(大腰)菅野 ———— 廣瀬(絞)



我軍は無段者の精鋭をあつめて意氣當るべからず。たゞ醫專商業の兩校選手が或る事情の爲に缺席したるを恨む。

我軍先鋒原野、聯合軍は一中の森なり。原野に破れて、森田之に代り、復押込にて破る。徳根出で、之の仇を報せしが、二中の杉田の爲に破らる。かくて戦は益々酣となり金杉住野櫟木出で聯合軍よりは二中の中村師範の開發等出づ。開發櫟木引き分けとなり我軍よりは細、彼よりは山崎出づ。細忽ち得意の左袖釣込を以て一本を得つゝいて來る田中をも物の見事に投ぐると見えしがあまりに右業に注意せし爲に左の体落しにて破れしは残念なり。

細につゝいて枇杷出で、先づ足車にて業有を得更に巴を以て止を刺す一中の鈴森枇杷を押へしが増村の爲に左の拂腰にて破れ増村ついで二中の平澤と引分く。

一中の木谷と久保とは互格の勝負と見えしが如何なる隙やありけん木谷の爲に左の大外車にて破られしは全く久保の油斷なり。

久保につゝいて起ちしは石垣なり頗る左の袖釣込を得意とす一度此の猛撃に合へは二段三段も防ぐに易からずまゝとや無段の木谷何條たまるべき忽ち空中に半圓を畫きて場のかなたに飛ぶこれにつゝく澤本、島、米澤皆同一業を以て飛行然と洒落させられしは氣の毒千萬なり。この勢なれば誰か彼の矢面に立つへしと見るもの大いに恐れしが次に出でし師範の北川必死となりて右手を働せて袖を取らせず終に引分に終りしは天晴の功名なり。

矢部出で、一中の宇田川を小外刈と釣込腰。反しとを以て破り更に向ふ松島を小外刈の薄手をを負ひしにかゝはらず袈裟固に押へついで光木に足拂を以てやぶらる。松岡起つ。容貌魁偉にして奮闘猛烈、彼の五條の橋にての辨慶の立廻りも實にかくやと見ゆるばかりなり。光木の敏捷に來る立四方を金剛力を出して捻ぢおき奮闘

數刻終に引分に終る。伊地知憤然として起つて一中の辻と戦ふ辻は前かゝみの右扁体、伊地知は左扁体なり。二人の体は一直線となり最も困難なる場合なるが伊地知よく敵の体を崩して二度迄大内刈を以て業有を得しが少しく氣合の抜け居りし爲か審判は一本を宣せず。伊地知稍張合拔の氣味なりしがこの機につけ入りし彼辻は一氣に左の拂腰を以て攻めより終に一本を得。吉川伊地知に代りて出て一流の拂腰を以て容易に一本を得。ついで野村と戦ひしが常の稽古不十分の爲か攻撃次第に弱り終に引分く。村澤出で、師範の宮永の爲に脆くも破れ中村之に代りて奮闘數刻。宮永如何なる隙をか見出しけん大外刈に來る中村体を捻ぢりて自ら倒ると見えしがこの時宮永の体は七尺ばかり後方に飛び行きぬ。實に巧妙有段者も及ばざるの勝方なり。一中の田中代りて之に向ふ彼は絞を得意とす、自

ら倒れて中村を絞に誘はんとす中村之を侮りて押込に攻めんとせしが田中の絞や頗る敏捷びたりと体を付けて満身の力を込む中村振り放たんとせしが及ばず審判の宣告下る、坂田之に代りて立つ身長五尺八寸體量二十餘貫の大俵田中稍恐れしが熟視すれば容貌武からず、乃ち與し易しと見て復たも寢業に誘はんとす坂田うま／＼と其手にのらす腕をつかんで引起んとす田中起たじと争ふや坂田大いに怒り少しく力を振ひて自己の体を中心として田中を釣りてコンバスの如く回轉すること五六回勢を付けて手を放せば物理の法則は遺憾なくあらはされ遠心力によりて飛ぶこと五間半なり田中大いに恐る、この時右の大外掛を以て容易に一本を得。

師範の宮丸代りて来る、これも大俵二十餘貫と見らる二人合せて五十貫の力が争ふを思へは物凄さを禁する能はず坂田右左の大外掛を以て

攻むれば宮永内股を以て之に應じ奮戦數刻見る者手に汗を握る、坂田大内刈を以て業有を得て意氣益々盛にして更に攻め立てしか如何なる機會かありけん宮丸後にまはりて送り襟に入る、送り襟は之をのかるゝ事極めて困難なる業の一なり。見るもの半は斷念せしが而もなほ一縷の望を以てす。肥大なる宮丸の体は稍後に屈して見ゆ、満身の力を込めて絞むる時の貌なり。之を防がんとする坂田の顔は次第／＼に、苦痛の色を加へ來りぬ。刻一刻、呼吸の塞がる斷末魔の聲は聞えぬ。思はず眼をさぐぬごとく歡聲は揚りぬ。さてはと見ればこは如何に、坂田は絞を脱したるなり。見る者皆自ら救はれたる心地なり、坂田は様子如何にと見れば今危地を脱したる苦痛の色もなく元氣更に百倍して復しても大外掛を連發すれば宮丸は懸命に答へこの勝負いつ果つべしとも見え今暫くにて引分の聲は

ひいきぬ、と見る間に宮丸焦りて内股に行くよと見しが体は横に倒れて一本は宣告されぬ、坂田の反しが成功したるなり。

更に代りて出でしは一中の中宮本日の副將なり頻に一本脊負を連發すれども坂田下手を取りて之を防ぎ機を見て左大外掛にて止を刺すこゝに於て聯合軍は残るは大將若森一人なり我軍はなほ坂田破れたりとするも四人を餘す若森の任や重し。

若森やがて悠然として場に起つ坂田もなほ元氣未だ衰へず之に對し苦戦數刻兩雄よく戦ひしが若森も一軍の大將なり終に内股を以て味方四人の仇を報ず、近出で、若森に向ふ若森元氣激測として大いに味方の不面目をあらためんとせしが惜しむべし近の大内刈の爲に功を奏せられ全軍の勝敗既に定りぬ。

終りて饅頭を饗して散會す。

野 球 部

北陸關西中等學校聯合大會

(本部主催)

第三回北陸關西中等學校聯合野球大會は、例年の通り、八月二十二日から、本校グラウンドで、開催せられた。

アテにしてゐた京都二中、新潟中學が、事情の爲めとあつて、大會間際になつて、ことわつて來たものだから、番組にも、内容そのものにも、一大狼狽を與へた。その結果、對手に甚しい距離のある同志の試合が多くつて、大會としての收獲は、まるでなかつた。センセイシヨナル、マッチとしては、長野中學對愛知一中戦が、期待されてゐたが、それも案外に、あつけないものに終つて了つた。

その大會の模様を、略記すると

◎第一日 (八月二十二日)

第一回戦——は、溝淵會長の試球式によつて、その幕を切つて落され、七尾中學(先攻)對金澤二中によつて、戦はれた。

始つてみると、七尾軍は、到底、二中軍の敵ではなく、打撃、投手、守備——三拍子揃つて、ゼロと來てゐるのに、二中軍は思ふ様手足を伸したもののだから、五回にて十点の差をスコアに生じた。

で、大會規則に従ひ、兩軍キャプテインの承認を得、こゝに準試合(コールド、ゲーム)を宣言して、二中軍は、十二点對二点にて、最初の勝利者となつた。(試合開始、午前九時五十分)

兩軍のメンバー、及、主要記録は、

七尾軍

審判者 廣野帝大生 生駒正俊
川西館村 田本中瀬 打撃數 十四
眞寺眞野南島山田廣 盗 壘 二
1 7 2 3 4 6 8 9 5

US 時間數 二時間半(五回にて)
二中軍 川山水内重子川 井 打撃數 二十
3 6 5 4 2 7 9 8 1 盗 壘 六
笹内清安倉金相辻堀 安全打 七

第二回戦——午後一時二十分より四時十分まで。

金澤商業(先攻)對富山中學

商業の投手齋藤の強にして巧なる前には、富山軍の猛打も封じられて了ひ、富山軍は、六回に二点、七八回に各一点を得たるのみに終つたのに反し、商業軍は、精妙な戦術で、よく自己の弱点を被ひ二回に二点、五回に一点、六回に三点、七回に一点と、計七点をえて、勝を制した。

富山は商業より實力は多いが、商業の投手が、あまりに強すぎたのだ。實に商業投手は商業軍の戦闘力の五割を獨占してゐる。

兩軍のメンバー、及、主要記録は、

金澤商業

審判者 村田義一 富山自助
保澤井藤井西西川本 打撃數 三十二
新能笹齋永寺小石松 安全打 四
2 7 5 1 3 4 8 9 6 三振(加) 七
四球(壘) 十

US 富山中學

試合時間數 二時五十分間(九回)
村鍋藤川幡川山口 打撃數 二十七
楠福三加古小館内山 安全打 五
6 5 2 1 7 8 4 9 3 三振(壘) 十四
四球(壘) 九

第三回戦——午後四時四十五分より六時半。

高岡中學(先攻)對小松中學

ゲームの中心点たる投手が、兩軍共にノオ、ヘッドで、従つて、打つ、走る、失敗るてふ、原始的試合になつて了つた。

日没が、あわたくしく迫つて來たので、高岡の敗けたまゝで、ゲームを終つて了つた。

兩軍のメンバー、及、主要記録は、

審判者 生駒正俊 淺倉帝大生

US 谷廣内子内本島林内 打撃數 二十五
高岡中學 杉高安上藪福川宮谷 安全打 六
5 2 6 3 1 7 8 4 9 (三壘打) 二(藪内)
試合時間數 一時四十五分(五回)
小松中學 野木田山内川浦田 打撃數 二十六
8 7 6 1 3 2 4 5 9 安全打 四
町佐土高竹北西眞開 盗 壘 一

二十三日は、雨で試合は行らなかつたが、夜、無聲堂で、參加學校選手歡迎茶話會を開いた。

會長の興味ある談話があつた。

記念扇子を分配して、早い中に、閉會した。

◎第二日 (八月二十四日)

第一回戦——農學校(先攻)對金澤二中

午前九時半——十二時二十分

農業が堀井投手に全然封せられて了つて、漸く五回に遊撃の失で一点を得た切りのに反し二中軍は、投手の弱に乘じ、七の安全打、十二

の四球、二の死球、及十七の失策を利して、合計二十三点を得て大勝した。

兩軍のメンバー、及、主要記録は、

農學校		US		金澤二中	
審判者	生駒正俊 廣野帝大生	井森部村永浦二尾木	打撃數 二十三	川水山内重子川 井	打撃數 二十九
		平上岡田米中勝元佐々	得點 一一	笹清内安倉金相辻堀	得點 二十三
		6 8 1 5 2 9 7 4 3	安全打 二	3 5 6 4 2 7 9 8 1	安全打 七
試合時間數		二時五十分(六回半)			

第二回戰——愛知一中(先攻)對長野中學

午後二時——四時十分

参加校中、この二校が群を抜いてるのであるから、この戰で勝つた方が、大會の優勝者となる勘定だから、いはい、實質上の優勝戰である。試合の経過には、何等の高潮もなく、スコアの割合には緊張度が低かつた。長野中學は、

どこまでも强者として、愛知一中をあしらつて、遂ひに正當に勝者となつた。

愛知一中は、第一回に松山が中堅ヒットに出で、稍好望であつたが、打撃順が當をえてゐなかつたので、その安打を徒費してつて、六回を終るまで、ホームを踏んだ者がなかつた。

反之、長野中學は、第一回には、四球に出た廣瀬が、盗塁と小出北村の後援で、先づ最初のスコアをなし、第二回には、右翼ヒットで出た丸山(文)が、須田の中堅左二壘打に送られて、スコアし、第三回には、四球で出た北村は、池田の右翼二壘打で、その北村は丸山(美)の中堅右ヒットで、共にスコアした。

七回に入ると、愛知の小川は三壘手の大失に一舉二壘に達し、長谷川の本ント、伊藤(太)の遊撃三壘間のヒットにて、唯一のスコアをした。同裏になると、長野でも、中堅ヒットに出た北

村が、山崎の一壘右、池田の右翼前のヒットに送られてスコアした。八九の兩回は、愛知の「あきらめ」と長野の「あんど」どが、しつくり合調して、何等の活躍もなく終つて了つた。結果の点數は衆人の豫想よりも、差が少なかつた。

兩軍メンバー、及、主要記録は、

愛知一中		US		長野中學	
審判者	渡邊法學士	山(宗)井川(太)慶田輪	打撃數 二十七	瀨出村崎田(美)文田	打撃數 三十三
		松伊花小長伊福三	安全打 三	廣小北山池紀丸須	得點 九
		6 4 1 2 3 8 7 9 5	三振(山)七	8 7 3 1 4 6 9 5 2	三振(花)四
試合時間數		二時十分		(二壘打、廣瀬、池田、須田各一)	

第三回戰——富山中學(先攻)對小松中學

午後四時四十分——六時三十五分

小松軍の投手が弱いのと、守備が又悪いのと、打撃が弱いとの三つが、一回二回頃の、接戰的豫期を臺なしにこわして了つた。

兩軍のメンバーと主要記録は、

富山中學		US		小松中學	
審判者	米谷辰平 廣野帝大生	村鍋藤川幡川山口	打撃數 三十八	野木田山内川浦田谷	打撃數 二十八
		楠福三加古小館内山	得點 十五	町佐土高竹北西眞塚	得點 四
		6 5 2 1 7 8 4 9 3	安全打 六	8 7 6 1 3 2 4 5 9	失策 十八
試合時間數		一時五十五分(七回)			

第三日 (八月二十五日)

第一回戰——七尾中學(先攻)對金澤師範

午前九時二十五分——十二時

何等の苦心も術もない試合であつた。要するにより少くタイムリイな失策をした方、より多くバットした方が勝つたのだ。

師範方に安全打の多いのは、七尾方の投手の弱なるにもよるが、その大部は、七尾方の守備がスキだらけであつたからだ。

兩軍のメンバーと主要記録は、

七尾中學		US		金澤師範	
川西館村	田本中瀬	打撃數	三十八	村内	丸田井永原料
眞寺眞野南島山田廣	安全打	得點	二	木竹西宮長松今柴山	打撃數
672341895	失策	點	十四	357182649	安全打
試合時間數	二時三十五分(八回半)	失策	十八	失策	點
				策	點

第二回戰——金澤商業(先攻)對高岡中學

午後一時十分——三時十五分

四回までは六(高)對四といふスコアだつたが、五回の表に、商業は高岡方の投手の狂的不統一と失策に乘じ、一回に十六点といふ世界的に、少くとも日本的レコードを作つた。此回に

於て商業は、僅か二本しか安打してゐないのである。高岡投手の亂脈なる、一回の中に、五つの四球を連續せしめた。

高岡方は、商業の投手の球を打ちえず、安全打は第一回に藪内の三壘打が一本あつたきりである。商業方の投手も多く四球を出したが、高岡は之を徒費して了つた。

兩軍のメンバー、及、主要記録は、

金澤商業		US		高岡中學	
保澤井藤井島西川本	打撃數	二十八	谷瀬内子内廣本林島	打撃數	十六
新能笹齋永寺小石松	安全打	得點	五	杉中敷上安高福宮川	得點
275134896	失策	點	二十	159362748	失策
試合時間數	二時五十分(五回)	失策	十六	失策	點
				策	點

第三回戰——長野中學(先攻)對金澤一中

午後四時——六時十五分

◎第四日(八月二十六日)

第一回戰——金澤師範(先攻)對農學校

午前九時十五分——十二時十分

一中方の投手松島は、力戰して、長野中學をして悉く凡打せしめたが、一中の守備は、徹頭徹尾、失策でおつ通したから、どうも試合に於て、一中の失策數は、前の、商業の一回十六点のスコアと共に、世界的レコードの一つである。凡球を安全打にしてる点に於ても。(長野中學の六の安全打中、四は、内野が捕へうるものであつた)又、アガッてた点に於ても、

兩軍のメンバー、及、主要記録は、

長野中學		US		金澤一中	
瀬出村崎田	(美)文	打撃數	三十八	村木島内田藤田村村	打撃數
廣小北山池紀丸須	安全打	得點	十六	841296375	得點
873146952	失策	點	五	失策	點
試合時間數	二時十五分(七回)	失策	二十四	策	點
				策	點

三回までは、農の連失で師は五点(農は二)をせしめたが、四回に至つて、師の無爲に反し、農は五本の安打と六個の失策とを利して、一舉八點を得、攻守所を異にしてつたが、師は五回にも六回にも四球と失策とを利して四點宛、八點をスコアしたので、又々、舊にかへつて、その情勢のまゝ、九回まで詰めて行つた。三振の割合に少い試合で、始終、壘中に走者の絶えたことのない金満家同志の試合であつた。

兩軍メンバー、及、主要記録は、

金澤師範		US		金澤一中	
村内	丸田井永原料	打撃數	三十八	村木島内田藤田村村	打撃數
木竹西宮長松今柴山	安全打	得點	四	841296375	得點
357182649	失策	點	十九	失策	點
試合時間數	二時五十分(九回)	失策	十九	策	點
				策	點

農學校 井森部村永浦二尾木 打撃數 四十六
安全打 十一
平上岡田米中勝元佐 失策點 十五
681529743 (三壘打、岡部二壘打、松井、米永)

第二回戦——愛知一中(先攻)對金澤一中

午後二時四十分——四時半

一中は相變らず凡失をタイムリイに連發し、殊に松島に四球が多かつたが爲め、相當に愛知の打撃を封じてゐるにも拘はらず、易々と九点さられて了つた。愛知の投手は、只一つ四球を出した切りで一中をノーホームに防いだ。試合のプロセスは、ごくあつけないもので、只、一中の彌次の熱狂がすさまじかつた。

兩軍のメモバア、及、主要記録は、

審判者 田村稔 廣野帝大生
愛知一中 山宗(井川太慶) 打撃數 三十六
安全打 五
得點 九
松伊花小長伊福三 四球(松)十
三振(松)六
641238795

US 試合時間數 一時五十分(九回)
中 村木島内田藤田村村 打撃數 三十一
安全打 五
金澤一中 野佐松安村加新聞中 得點 五
841296375 (二壘打、伊藤(太)、松島)

以上で一通りの顔合せが終つた。表にすると、
勝利率一〇〇の者(二戰二勝)

長野中學、金澤二中、金澤商業、金澤師範
勝利率五〇の者(二戰一勝)

愛知一中、小松中學、富山中學

勝利率〇の者(二戰二敗)

金澤一中、高岡中學、七尾中學、農學校

最後の優勝者を決せんが爲め、勝利率一〇〇をえたチーム同志の優勝豫選試合を第五日に開いた。

◎第五日 (八月二十七日)

第一回戦——長野中學(先攻)對金澤商業

午前九時半——十二時二十分

商業投手は、肩亂れて毎回四球を續出したのに、商業方の他の野手が、殊のほか幼いので、盜塁も自由自在となつて了つて、長野は七回の外は毎回スコアした。殊に八回には、山崎が、いきなり中堅後に大飛球をうつて、ホームランして、大向を唸らせた。

反之、商業は、三回に、能澤小冠者が遊撃の大失に一点スコアしたきりで終つてしまつた。

兩軍のメモバア、及、主要記録は、

審判者 生駒正俊 廣野帝大生
長野中學 瀨川村崎田(美)文 打撃數 三十八
安全打 七
得點 十三
廣宮北山池紀丸須 四球(齋)十二
791346852 三振(齋)十二
US 試合時間數 二時五十分
金澤商業 保澤井藤井島西川本 打撃數 三十三
安全打 三
新能笹齋永寺小石松 得點 一
275134896 三振(北)八
(本壘打、山崎)

第二回戦——金澤二中(先攻)對金澤師範

午後一時五十分——四時

師範は一回に宮丸の三壘打、三回に同人の二壘打で二点をえたきりなのに反し、二中は、師範の連失と、相川の好打とで、五回を終るまでに二十点スコアして了つて、この勢では何点入るか知れない豫告を示したので、兩軍に計し、五回で以て、準試合を宣告した。

兩軍のメモバア、及、主要記録は、

審判者 生駒正俊 富山自助
金澤二中 川水山内子 川重井 打撃數 三十四
安全打 七
得點 二十
356478921 四球(宮)七
US 試合時間數 二時十分(五回)
金澤師範 村内 丸田井永原科 打撃數 二十
安全打 四
得點 十九
357182649 失策 十九
(二壘打、笹川、松井、宮丸、三壘打、宮丸)

最優勝戦参加権を獲得した、金澤二中と、長野中學との優勝カップ戦は、翌二十八日に行はれたが、その差が餘りに甚しく、殊に二中は全々振はず、九回までに、バッターボックスに立つた延人員が三十二、その中一壘に達しえたものが九人、更に二壘をも踏んだ者が四人で、三壘に達したものは、僅かに一人といふ、みじめな有様だつた。

◎第六日 (八月二十八日)

最終回戦——長野中學(先攻)對金澤二中

午後一時半——四時

兩軍の成績を表にしておいて、記事は略しておく。

審判者	田村稔	廣野帝大生
補殺	0	3
刺殺	2	4
失策	0	0
	0	0
	0	1
	0	3
	0	0
	4	27
	17	

試合後、會長より、長野軍へ、優勝銀カップを、及び第五日の試合に参加した四校へ、各紀

長野中學										金澤二中									
四死球	1	1	0	0	3	2	0	0	2	補殺	0	4	1	4	0	0	2	9	0
三振	0	1	0	0	0	2	1	2	0	刺殺	9	0	0	4	3	0	2	9	0
盗塁	1	0	1	2	0	2	0	0	1	失策	3	1	7	0	1	0	2	0	0
得点	4	2	3	2	0	2	1	2	1	三振	0	0	1	0	2	1	1	0	0
安全打	2	0	0	1	0	1	0	1	1	打撃數	4	3	4	4	4	3	3	3	3
打撃數	5	5	6	6	3	4	6	5	3	川水山内子川	4	3	4	4	4	3	3	3	3
	43	6	17							笹清内安金相辻松堀	3	5	6	4	7	9	8	2	1
										合	31	5	14	27	20				

(本壘打、廣瀨、二壘打、廣瀨、山崎、丸山)
(長野軍打者延人員、五十二人)

試合時間數 二時三十分(九回)

念コップを授與し、茲に大會を閉ぢた。——靜かに回想してみると、この試合もこの試合も、時間數が非常に長い。五回戦に二時間以上もかつてゐるのが可成りある。殊に七尾中學の如きは、投手の保球時間が人並外れて長いのに加へて、他の野手がグラブを利用せずして球を手渡しするので、一つの球の始末に五分以上かつたこともある。又、金澤二中では、打者となると、投手の一球毎に、バッターボックスから出て、ぐずぐずして、方々へ迷惑をかけるのみならず、野球道徳から言つても、規則上から言つても(即ち打撃時間中は、打者がボックスにゐるとゐないに拘はらず、投手の投球は有効である)遅延行為であつて無智も甚しいことを行つた。第一日の七尾對金澤二中戦は、剛の者同志とて、三回を終へるのに二時間と五分かつた。來年度からの大會には、何とかこの点を制裁したい

ものであると考へてゐる。自分の大會に對する印象はといふと——この時間の長かつたといふこと、参加學校諸選手(愛知一中は比較的そうではなかつた)も主催側の審判官ともルールに不明で、誤用、洩用續出といひたい位、失体が多かつたことのみである。番組の組合せも、もつと何とかして、もらひたいものだとおもつてゐる。(一九一五・九・二〇、M生)

庭球部

南下に好成绩を上げた我部は花であり中堅であつて貴い血涙を惜しげもなく使ひ盡して我々を指導し下さつた加藤君、内藤君、大西君、河合君、金子君を大學の門へと送つた。

然し新しい偉大なる力に満ち／＼た人々を迎へて再び充實した。誠意と勤勉とを以て我等は常に夕日紅に空を

染めて刻一刻と暮れ行く日の足の短さを感じつつ練習をして居る。

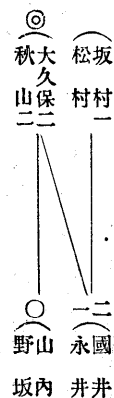
九月二十六日に新入生歓迎の意味を以て小會を開いたが劍道の小會があつた爲めか意外に新しい人に出演者が少なくて其の意を達する事の出来なかつたのは残念だつた。

秋季大會

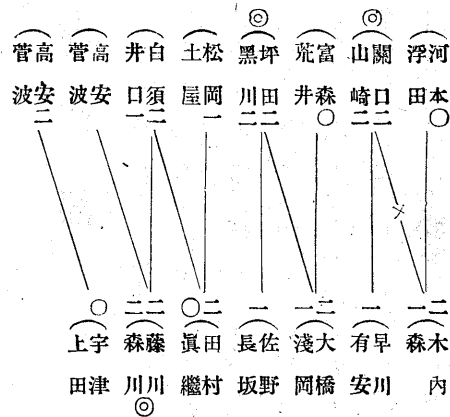
萩の葉も秋を知り顔に早くそよ吹く風も昨日に變つて松に聲添へ草葉に深く結んだ露を拂ひ枯尾花の末を音だゝせる秋は來た。

我等の黒ずんだ腕は張り満ちた、澄み切つた青空に烽火は上げられた、顔に笑をたゝへた若武者は鐘の聲諸共に立ち上つた。

十月十日 先づ校内の紅白試合は始つた。

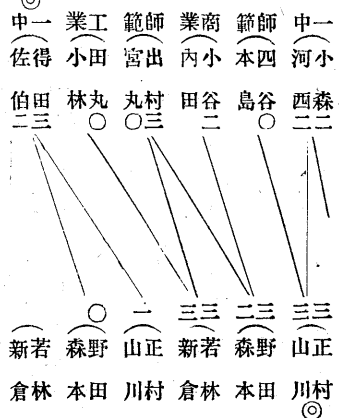
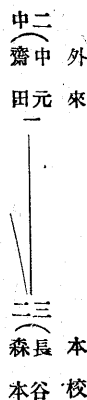


(二八六)



午後からは對抗試合を行ふ筈だつたが惜しや紅葉をいそぐ村雨に餘儀なく中止した。

醫專との試合や他の大會へ出演の爲めに意外に遅れて十一月十三日午後二時から對外試合を行つた。



病氣や歸郷の爲めに選手が少なかつた。

最後の野田森本對得田佐伯の試合の時にも暗くなつて三回ゲームとした。

對醫專試合

新しい力を加へた我等は醫專との定期對校試合を快く承諾をした。

彼は年々我に屈辱を蒙て悲しい歴史を繰り返し、薄紅いペンキ塗りの病院のポプラの戦ぐ蔭に猛烈な練習をやつて居た新しい力はなく

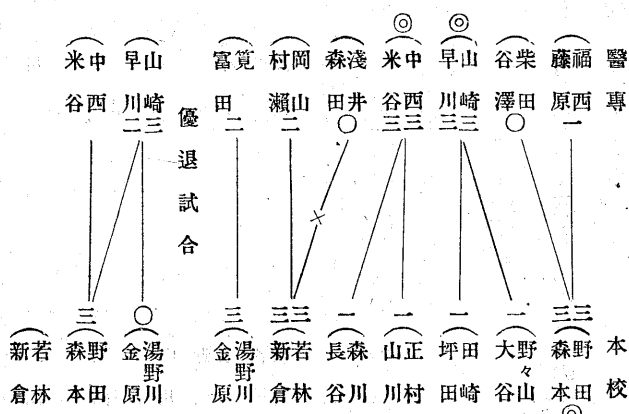
とも古い而も雄な勢を持て全勝を期して殺倒し來た、彼の意氣や愛すべきたつた、我等は北斗の星輝く北國に覇を唱へて居る彼も亦我に劣らざるものと自信して居る、而して二者の間の競技は當然の事であつて一時に止むべきものではない、此の競技こそ相互に向上發展するに必要なるものである、内に許り燃え燃え立つて居る焔は外部の一物に接して初めて其の鋭さ、劇さを知り得るものである。

我等が目指す所は彼に非らずして未だ遙かな高い所である、其の目的物に對して我の力を試し見る試金石に過ぎないだからこの意味で醫專との定期試合は圓滿に永久に持續すべきものだと思ふ。

十月十二日午後一時二十分から二中の田丸先生の審判の下に戦は開かれた、此の日は黒雲深く垂れて細い雨は間斷なく降つてコートを濕ら

して幾分か行動に邪魔になつた、風は死んだ様に何にもない、雨さへ無かつたら庭球日和だつたらう。

し森本が之れに乗じて大膽な横モーションで一
致して暫く戦つた事は強く私の腦に刻み込まれ
た。



野田が山の如きローピングを以て敵の陣を亂

我部の一事業として先年第一回を舉行した中

北辰會庭球部主權
關西北陸聯合庭球大會

野田、森本對中西、米谷の時に我が二ゲームを取り三回目に二一〇、となつたときに端なくも紛擾が起つて一時中止し交渉中に暗がコート
の周圍を取り圍んだ爲めに止むなく中止した、
續行して居つたら勝つたと僕は思ふ我は彼に續
行を迫つたが彼は暗き爲めに續行し難しとて應
ぜなかつた。

最初から最後迄熱心に而も至誠を以て我等を
鞭撻し應援し下さつた寮などの方々に厚く御禮
を申し上げます。

等學校の關西北陸聯合の庭球大會は諒闇の爲め一時中止したが本年は盛大に舉行した、此の舉は我庭球部の進歩と向上を計り一方には連絡を取つて各校間の親睦を計る爲めに出來たもので決して面白い笑いで成立したものではない、だから一度檄を四方に飛ばすや我の眞に意のある所を察して参加を申込し校數十一で遠く姫路師範は自ら進んで參加した。

校庭の野守の庵も草に隠れ慣れた通路も埋つて行き交ふ人が道迷ふ程に茂つた、夏草の茂を照らす強い日の光は白堊の線を引ひたコートに花を飾つて居つた櫻の木蔭は涼しさうに湧きだされた。

床しい紫の優勝旗は「心あてにそれかどそ見る夕露の光そへたる夕顔の花」の如く玉川の浪かとも思はれる垣根に咲いた卯の花の様な白い北斗の星と四條の線とを浮き出して居つた。

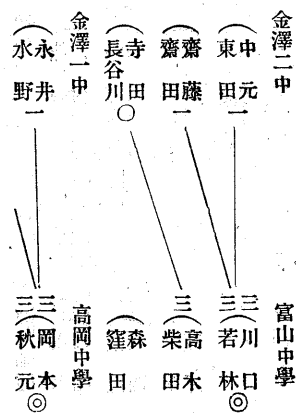
花武士は額に玉なす汗を流して此の榮譽ある優勝旗を得て己が學び庭に勝ち軍の記にせうと火花を散らして戰つた。

誠に彼等は自己の力のあらん限を出して攻め寄せたのであつた、観客は七重八重に取り圍んだ、拍手の音、矢叫びの聲。

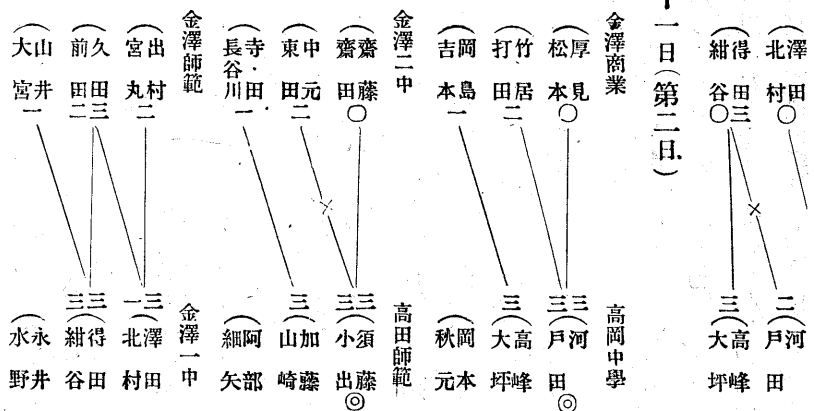
悲しい敗北の涙を流した者もあつた、嬉しい喜の聲を上げた者もあつた。

金澤工業は前日に参加を取り消した爲めに委員の協議の結果組み合した校を一勝者とした。

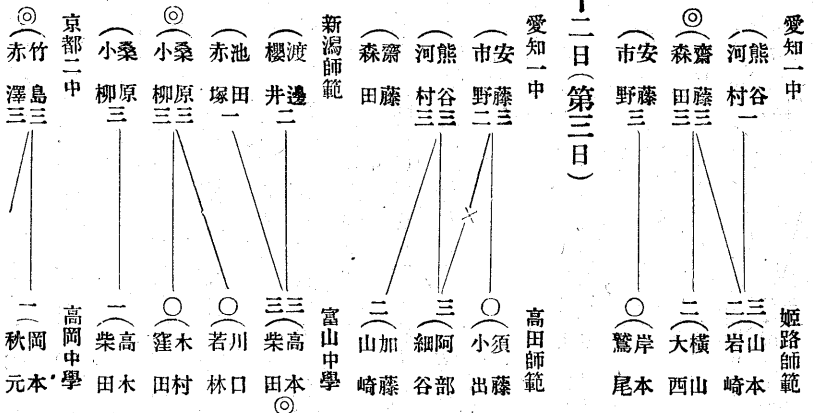
八月二十日



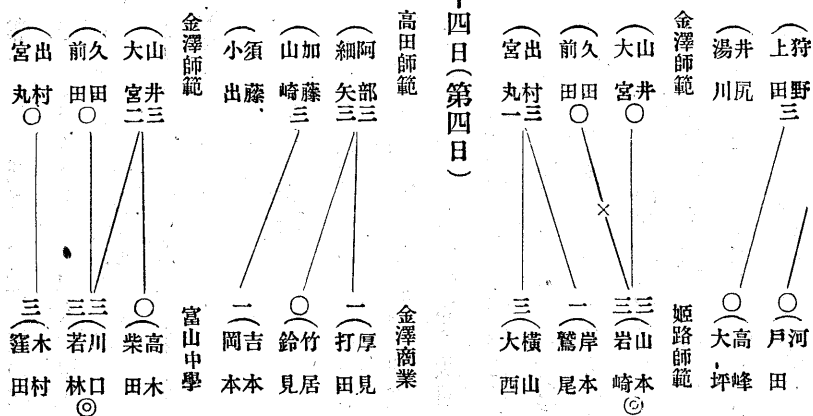
二十一日(第二日)



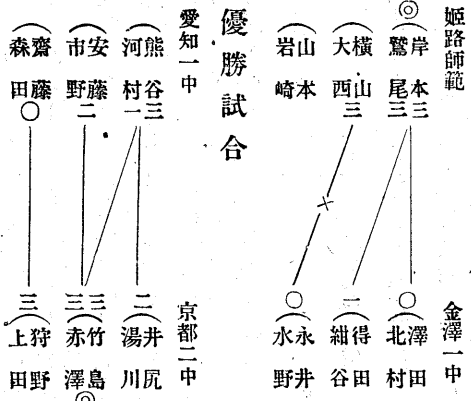
二十二日(第三日)



二十四日(第四日)



優勝試合



第一回に月桂冠を得し京都二中は亦も優勝旗を得たり。

他校の大会に選手が出演したが其の中で敗れたのは一組だった。

商業 野々山、大谷
一中 野田、森本 正村、山川
二中 田崎、坪田 森川、長谷
師範 野田、長谷 正村、山川

私は部員として誠實に仔細に其の成績を報告すべきであるがスコアの記入の粗雑の爲めと眞に正確に記入すべきを知らざる爲めと淡い記憶とで到底満足に報告し得ない事をお詫びしておく(芳溪生)

弓術部

紫雲棚引く紫宸殿上に今上陛下畏くも千早振る神の御代より搖ぎなき瑞穂國の御位に即かせ給ひし其の翌十一月十一日我部は秋期例會を開く。秋空高く晴れ渡り半片の雲影だになく日穩に微風動かす天を摩する白楊、眞黃色なして目も覺むるばかり。泰平の瑞雲、聖代の祥氣天地に溢れ、神代ながらの靜穩長閑けさ、實にたどへつべきものもない。大八洲建國創業の砌、第一の譽たりし弓矢の業を競ふには誠にこよなき日和である、宜なる哉。部員の出演者頗る多く、

かつ相良部長、楠師範の御出席は勿論、校長先生をはじめ、來賓の來り臨まるゝ方頗る多く、寺島檢事正、第二中學教諭木澤先生、師範學校弓術部長、吉江公證人、村尾氏等主なる士なり。ここに部員一同は校長の御出席を得て勇氣百倍するものがあつた。

この日の競技は源平仕合を以て始められた。清く澄める秋氣を衝いて發する矢鳴は金質の響をなして紅と白とに分れたる面々の肉を踊らし血を湧かしめた。この戦ついに白の勝となりぬ。午後一時より數取り競射にうつる。腕に覺の武夫揃、射出す矢にいづれあだ矢はないけれ共特に目ざましかつたは古村君であつた。

出演者の意外に多かりしたためついに時間が不足し、十射の筈の点取り競射を四射にして急いだ。しかし皆、美事なる成績を得た。

終つてから餘興として金的を出したがすでに

夕陽西に没しては狙を定むるに由なく、徒に暗の襲ふに任せ腕を撫しつゝ、又の日を待つことにし、賞品を配り茶菓を喫して閉會す。左に當日の成績を表示しやう。

源平 仕合				源平 仕合			
數取	點取	仕合	源平	數取	點取	仕合	源平
古村	七	13	七	澤田	三	0	二
白紙	五	10	四	山本	二	3	三
野口	五	8	三	矢部	三	0	一
柳川	四	3	三	佐藤	二	3	一
高波	四	7	三	尾崎	二	3	一
橋	四	10	一	土屋	一	3	二
近	四	5	三	桂	二	0	一
山本可	三	7	三	古座屋	二	0	一
石井	三	3	一	坂田	一	3	二
篠原	三	0	二	大澤	二	0	一
矢吹	二	10	五	石橋	二	0	二
荒木	三	0	七	町田	二	0	〇
種田	二	8	二	井上正	一	0	〇
松田	二	8	二	鎌田	一	0	〇
中島	三	3	四	伊藤	〇	3	〇

(以下略す)

天高うして秋氣清く落葉を縫ふて飛ぶ矢に凜烈金鈴の響あり。世は泰平瑞氣漲る處、神代ながらの技を戦はす。以て体を鍛へ氣を養い膽を練るべし。樂しきさびなる哉。

○十月十七日第一中學の弓術大會に招かる。清酒たる道場、丘上の樹木天を摩し、緑深き松梢を伸ばして射塚をおほふ。心地よき道場。此の日白紙君一等賞野口君金的を射て歸る。

○十月二十四日醫學專門學校の弓術道場開式に招かる。廣々せる運動場の一角に小丘を截りて作れる新道場。天高秋氣清心自寛濶とも云ふべし。この日古村君一等賞を得たり。

○第一中學校より昨年の敗戦の恥を雪ぐべく挑戦し來る、依つて我部は大いに陣容を收めて將に十一月二十一日會戦すべく準備怠らざりしが突然第一中に都合ありて第二學期まで延期の事となりぬ。(野口生)

遠足部

醫王山へ登る記

C. W. 生

五に進んだ、見上峠の一本松までは名にし負ふ醫王山登りの先程としては餘りに平凡であるが、たゞ山氣冷やかに、秋氣山に入つて更に清きを覺ゆるのみである。

我々の心の内にはどゞめ難い自然に對する憧憬がある、山へ山への叫びに胸を躍らせ谷川の水瀬の音に心の琴絃は共鳴する。

金風颯々として天地を訪へば天は高いか馬は肥えたかは知らぬけれども秋の色に此心は誘はれ、秋の響に此心はどゞめく。

此自然に憧憬るゝ心を癒すべく此登山が行はれ、此部が活動する、先日よりの雨は残りなく晴れたけれども醫王山上一團の雲は我等が行を呪ふが如く渦まいてをる。

七時四十分校門發、一行九十名餘

名も知らぬ村の數々を前にし後にしつゝ、咲き亂れたる秋の千草を踏み白露を散らして三々五

一本松の下にて休む暇もなく嶮しき坂路に入り泥濘を踏み木の枝を分けて進む、山のかげ路をぬけて展眺開くる所に出づれば加賀の平野は取り廣げられて波間に泛ぶ白帆はクッキリと秋の色の中に浮き出てをる、進む程にアカ／＼と照つて居つた空は次第に曇つて霧が谷間より湧き昇る、山の裾をめぐり山の中腹を辿り行けば道はいよ／＼細く、木の枝はいよ／＼密に、いつ盡くとも知れぬ藪を精かぎり根かぎりぐづつては抜けくぐつては抜ける、氣を負ふ猛者も健脚な勇者も、此路、此藪にはほと／＼閉口する、最後の五分間と猛進を續ければ木の間にぬゝと聳つ山は今日の目的地、我先きと勇を鼓して進め

ば藪も低く歩毎に近づく頂上は芝草の生する幾許かの平地、装をかなぐり捨て、四界を見れば霧は霽れて展べ廣げられたる一幅の畫景。

登山の快はこゝにある、山を究めつくした所にある、眺望を肆にする所にある。

山神は我等に幸してこゝに自然の大觀を示す、谷間より湧き出づる霧は次第に濃く一風ゆらいでは眼界狭められ一颯來つては近山閉され、更に動いては四圍漠々、後に續いて來た人の聲のみ霧の中より來る、一風更に到れば霧

散じ人影其内に動く、或は暗く或は明るく、最後の一行山上に到る頃には大粒の雨ポツリ／＼。

滿つるを知らぬ腹を滿たして鳶か峯に向ふ、山の背をのみひたすらに走ること一里弱にして山容歩毎に改まり木の枝次第に疎に、山の背の盡くる所に巖峨々と立つて天下の偉觀をなす、三千坊の後偲ぶべき松は巖に倚りあたりの山の

たゞすみひさへたゞならざるに妖魔の眼の様な大池が千仞の下に光つて見える。

巖のつきなんとする所そこを鳶か峰が聳つ、之より名だたる急坂を木の枝にたよつて下れば鞆鞆の音耳朶をうつ、音をたどつて行けば一條の瀧は寒く嶮巖にかゝつて冷やかなる水は瀧壺に溢れてをる、山に入て、初めて渴を癒し、汗を拭ひて休む、之より大池に行き浮島の奇を踏み、大池の中の岩に登れば鳶の奇峯は高く我等を瞰下してをる。

之より歸路、路は嶮ならずと言ふべからず藪は密ならずと言ふべからずだ、が彼醫王山を究めつくしたりといふ自信は我等を驅つて此嶮なる歸路を坦なりと思はしめる、又頭上に口を開く山樋の甘さは我等の歩を輕からしめる、幾里の路、幾時の路、いつ、つくるともなしに二又に出づ、坦々たる大道尾山に走て居る。

空模様は荒らくなつて雨もポツ／＼あたる、夕の七時に金澤に入つた、後れた組は九時頃に漸く歸りついた。

立山登山の記

僅の違で汽車に乗り後れた爲めに一日中獨りで歩かねばならぬ事となつて富山に着いては見ただが休む氣にもならず息をもつかず後れ馳せに三時間以前に出た一行の後を追ふたけれ共影さへも見えぬ途中で聞いてみたらあなたの様な帽子を被つた人が澤山行つたと云ふ。まゝよ少し位急いでも到底三時間は恢復出来ぬと糞度胸をきめて悠々と出掛た。

斯なると急に腹がすいた様な氣がして歩けない、石炭を焚かなきや機械は運轉をしないと思つて時計を出したら何時の間にか指針は十二時を過ぎて居る、腹の時計は割合に正確だ馬鹿に

違ふ時計なら反つて持たずに腹の時計に頼る方がましだ。

路傍の草叢で無難作に足を投げ出して辨當を開いて瞬く暇に平げた青葉に射す日影さへ燃ゆる様で青田を吹いて來る風は蒸す様に過ぎ去る、さつきからの雲が山の端にちつとして動かうともしない。

けれ共今日の宿所たる芦峠寺迄は未だ六七里もあるので又獨りで動み出した、七月下旬の太陽は地上の何物をも熔ねば止まぬ勢で執つこく輝した。絶えず水を飲むで渴を醫して進むだ道端の井戸でも清水でも私の足跡のないのはない程である。ポンチもタンチも堪り兼ねて道端の汚い泥水の川に潜つたりはねたりして居るよくあんなによい色になつたと思ふ程銅光して居る上瀧迄如何程あるかと聞けば最早すぐそこだと云ふ。

上瀧で珍しくも氷水ありと云ふ看板を見附けたら喉の虫が承知しない立寄つて持つて來るのを見たら雪水だ此邊へ來ると雪と氷の區別も知らないのかそれ共警察かやかましいから、かう云ふて居るのか知らないが兎に角結構なものと思ふた。

上瀧から一寸出た處に常願寺川と云ふ荒川がある橋がながれて假橋になつて居る此川の側の家を通る時何だか自分の顔をじろ／＼と見た。後から芦峠で一行と合ふて聞いて見たら自分は壹錢の渡し賃を踏み倒したからだ今頃は多分噂でもされて居るであらうと芦峠寺に着いた時の笑草となつた。

日も傾いて上衣が欲しい位に涼しくなつた聞けば鯛も鳴いて居る川の流の音も一種の静凄の感を與へる川岸に沿うて一步一步と逆つて行つたこんな時には歌に限ると知るだけの歌を出來

るだけの聲で歌つて三里の道を急いだ、常願寺川の清流は或は潭となり淵となり瀬となり島を作つて石を染るかと思ふ程青い。道は之に沿つて時には山壁の巖倒れ落ちんとして居る走つて通る様な處もある馬子は鼻歌を歌つて悠々と通つて居る。

芦峠寺に着いたのは樹蔭からランプの光が漏れて來る時分であつた參詣人旅舎取締所と云ふ横柄な看板のある處へ行つて一行の宿つて居る處を搜して一行と一しよになつて漸く今日は人の顔を見た様な氣がした夕飯を共に濟してから此質朴な雄大な自然に極く接近して居る鄙邑に散策をして歸りに金剛杖と立山のエハガキを求めた。今日は山開きの御祭と云ふので何處でも彼處でも歡聲に満ちて道端には年一度の佳日を祝ふて面白い繪のある燈籠を出して置く。宮の前には既に村人は暗黒に塊をなして集つて居る

其中に蝶の狂ふ様に若い男女が入り亂れて一生懸命に踊つて居る處かはれば品かはるとか奇妙な歌に間違もせずよく合せて踊つて居る宿へ歸つて心に湧いた事をエハガキに書いて待て共待

い程戀しはあつたが思ひ切つて飛び起る朝飯を濟した頃は三時の出發が五時となつた。

て共宿の人達は歸つて來ぬ暢氣さ加減たら無い屹度踊に現をうかして居るのであらう十一時過ぎて漸く歸つて來て寢床をひいて呉れたはいいが固い莫産の枕に煎餅布團一枚をかけ下には黴

中語(案内人兼剛力)を先登として三々伍々金剛杖を携へ結束して出た、物珍しげに村人は總出で見送つた飯の焦げるのもそちのけでおかみも婆さんも娘も嫁も出て來た斯様に澤山洋服を着た人を見たのは恐らく之が初めてであらう。

の生いて居る様な莫産が一枚きり。これも必ず宿の人達の毎日引いて寢て居るのであらう今日は自分等が宿つた爲めに彼等は布團なしで寢るのであらう村人は未だ踊つて居るのか時々妙な

屏風の様に立つて居る兩側の山の間を掘り割る様に川が流れて居る細い道は之に沿ふて自分等を導くのである、山杜鵑が連りに鳴く。約一里歩いて藤蔓の橋に來た、先頭の者は早や妙な腰つきをして其上を渡つて行く、上下に振れる

二日目

月は尙隈なく照し雞があつちこつちで鳴て居る。サンザンに不平を云ふた寢床も今度は離れ難

る。

一二間位だがこれがもつと高いと祖谷山中等の藤蔓の橋と同じだらうと思つた。

材木坂から漸く喘ぎつゝ汗を流す様になつた葛籠の道を沈黙を守つて通り盡して突然茅屋を見た時は皆申し合せた様に入つて水を飲み、瀝茶をのむラムネを飲む其價は通常の價の約倍である飲んだ後で皆高價だと云ふ様な顔をして居る。

屋がある、弘法大師の此處に來て杖をつきたてた跡から湧出するのであると清冽な水が垂れて居るこんな處迄金の權威が及んで一杯壹錢だ。處々に小さな水田の様なものがある、餓鬼の田と云ふのだ相な阿彌陀原と云ひ弘法茶屋と云ひ少々佛臭くなつて來た。

景は歩一步一步移りかはつて雄大となつて塵界とは歩一步遠かり崇高な大自然とは益々親しくなる様な心地かする右前の灰色がゝつた緑の中から白く輝いて見ゆるは所謂直下千尺の稱名の瀧だ白絹を天からかゝげた様になつて居る、中間奇巖に激し折れて二段となり更に三段となり實に天下の壯觀である。

追分の茶屋で道は二つに分れて居る。中語の不機嫌にはをかまひなく險阻の路を通ることにした。熊笹や岩を踏み越えて一大窪谿に入つた二の谷と云ふ、巨岩怪石蟠居し水は岩に激して耳を劈き膽を冷し凄寥の感自分等を壓した初めて萬年雪に接して無意識にかきつまんで頬張りながら雪を満してをる一の谷に入つた、屏風の様な巖壁はがん張つて居る如何に工夫して登つたものか可なり之處迄登つたそこに一條の鐵鎖を垂下してある、昨日から自分の先になり後

森林帯を歩み盡して阿彌陀原に出た三里四方今漸く春を欲しいまゝにして居る、乙女嶽大日嶽の近く峙つて雲表に聳えて居る外は眼の及ぶ限り障礙がない其最中に弘法茶屋と云ふ一苦小

になりして來た片眼の巡禮僧は今日もまた自分

達とともに來て此の鎖の處で恐しかつたか一生懸命に南無阿彌陀佛を唱へて居る氣の毒なので後から押してやつたら何度となく禮を云ふ。此の險では冷汗が背を濡した見れば眼の前に巨巖千丈の絶壁の上に突出して居る所謂獅子ヶ鼻である元氣の輩は早や其の上で連りに怒鳴つて居る。

最早室堂迄一里となつた鏡岩から上は雪で全く閉ぢ込められて居る、白い雪の上を三々伍々歩いて行く姿は氷の上に遊ぶ南洋か北極かどこかのペンギン鳥を想像せしめる。霧や雲が連りに飛んであるく、仙人は霧を食ふと此んな處に二三日も居ると大分仙人化しはしまいか。

白い雪の中に遙かに人間の住家とおぼしき室堂を見た時の様な感じは暗夜に燈を見た時の感じと云ふのだらう。想像に反して室堂は大きく而も頑丈で莊嚴な氣分がある今日室堂に宿り合

せるものは百人位ある相だ。

時計等は一切始末して地獄谷に出掛けた道の兩側に噴火口の跡の様な池がある、雪は大理石の様になつて水の中にある今漸く溶けかゝつて居る七八町で地獄谷にきた。稍廣き谿谷は荒涼として草木なく硫烟高く渦き上つて臭氣鼻を衝く、一帯イーローカンツリーで其中に八百三十六地獄があると其各に鍛冶屋地獄とか紺屋地獄とかと云ふ名がつけてある。

室堂に戻つて夕飯を待つた堂は加賀様自慢の建物だ相な五間に十間以上もある大きなもので柱構は皆尺角を用ひてあつて黒檀の様に燻けて居る此中に二つ三つの圍爐裏をかこみて暖をとるのである、青松葉を以つて煮た煤臭い飯をカングケと云ふ澤庵の腐つた様な香物で何杯食つたか知れぬ。

身を切る様な立山嵐は嚇す様に吹いて居る十

五日の月は鏡となつて現はれた立山は前にぞつかりと座つて居る。耳も鼻ももげ相なので急いで家へ逃げ込むだ、中は青松葉の煙と人息で目も口もあかぬ。鞆を枕にして寝たか手足はちぎれる程寒い火は勿論爐に焚いてあるが。

三日 目

冷水をかけられる様に感じて目を覺したら尙暗い、寒いので皆んな莫蔭をまきつけて菰包の様になつて轉つて眠つて居る、月は尙大空に氷り附た様に残つて居る。

大分明るくなつたので思ひ切つて顔洗ひに出た塵の世界に生存して居る者共はよく氷水なんか飲むなどと思ふ程だ、丁度時刻なので只一ヶ所の便所の前は市をなす有様だ此水が流れ流れて稱名の瀧をつくるのだ餘り好ましくもないわい。

淨土山を経て立山別山に登るので朝五時に室堂を出た、氷れる雪の上を踏みしめて淨土山の頂

上に着いた頃は七月二十七日の太陽は立山の彼方から金色の光を投げた、神主は長々と祝詞をあげた、此山の表面を被ふて居る角石は少くとも二十萬年以上を経た日本最古の岩石であると神主は誇り顔に云ふた。

立山と淨土山との谷間に意外にも如何なる者共かは遠くてわからぬが天幕を張つて居る多分昨夜此處で宿つたのであらう今丁度岩の上にあがつて深呼吸でもして居る様な奴が一人居つたのでは又我黨の士かと思はずもオーイ、オーイと聲をかけた。頂上にある宮は立山よりも更に一問程高い譯である既に何十年だか雨に晒され嵐と戦ひ雪に抗して立つて居る、伊邪那岐尊と天手力雄命とを祀つてある。

俗界よりも天に近いかと思はるゝ立山の頂上で麗かな朝日の中で神鼓琴々となり祝詞のあがつたのは何とも云はれぬ感じがした其音は兄弟

の様に四方に聳えて居る白山や御嶽や、淺間や白馬に迄聞えはせぬかと思はるゝ程であつた。

岩のがら／＼して居る上を數へる様にして踏んで正午頃別山に着いた頂上は殆んど全く雪に被れて居る前に聳ゆる劔山は實に其名に耻ぢず天下の奇觀だ劔を植ゑた様で誰も登れまいと思つたら矢張登る奴があると。人間が猿から進化して來ると云ふ事も成程と思はれる。

別山を下る途中で登山服で身をかためた雄々しい若者に遇ふた、彼は一高の旅行班の一人であつた四五人が皆分れて進んで居るのだ相だ、僕等の中に針木峠を越える者があると云ふたらカンデキを用意し給へど注意して呉れた彼等は二三日前に針木峠を越えたのであつた。
莫慮に乗つて雪の上を降るのを誰か始めて危険でない事を確めてから皆やり出したので面白可笑しく早くサイノ河原に着いた、河原一面

未雪に埋つて處々に小石の積重ねが見ゆる。

一夜の宿だけれ共永久の住家の様に親しく思はるゝ室堂に着いて息つく暇もなく出た今日立山温泉宿りの豫定である

昨日來た道を鏡岩迄逆行しそれから一の谷の險を避はしたが矢張五十歩百歩の路を辿つて又追分茶屋を賑した。

熊笹を分けて温泉の前阪に出た、九十九曲の羊腸路で之が一里も下へ下へと行くのだから堪らない。自暴になつて居るとひよつと温泉が見え出した。

鶏も鳴いて居る犬も吠えて居る壺中の天地武陵桃源を思ひ浮はせる宿は汚くはあるが今の僕達の眼には汚いものはない、心ゆくばかり温泉に漬つて夕飯に此地に不相應な甘い豆腐の味噌汁を食ふた時のうまさは忘れられない。

其夜は腐繩の様になつて眠つた朝になつて昨

夜は猛烈な蚤の襲撃に遇ふた形跡を發見した。

一行は此地で各勝手に解散する事となつた。僅三日行動を共にした人達だが分れるのは變な氣持がした。(増村生)

一行

- 高島先生、岸先生、岡本清逸先生、舟木書記、小山知一君、村時富綱君、谷口次郎君
- 細川英次郎君、土井直行君、松村正三君、佐々木健太郎君(以上卒業生)
- 山田武次君、高純一君、八田四郎次君、宮崎友治郎君、村田義人君、瀬戸静夫君、森我來君、土屋準一君、平原泰治君、増村文雄君。

講演部

一、十月十五日日本學期第一回例會を至誠堂に於て開く。演題并に辯士左の如し。

開會の辭

- 省察なき國民性 鈴木 豐君
- 信念 小林正人君
- 吾人と辯論 三澤克己君
- 世界一の國民 松田眞男君
- 前田 歎吉君

涙なきに非ず

綠濃き青島の岳の上に立ちて

- 古川 清一君
- 野中 徹也君
- 八波 部長
- 太田 耕三君

一、十一月五日第二回例會を至誠堂に開く。辯士及演題左の如し。

開會の辭

- 鐵さ血！ 鈴木 豐君
- 展びて行く若草 大村 貞之君
- 現代主義と自殺者 薄井 久男君
- 所謂現代に就て 前田 歎吉君
- 眞の悲哀 福田 耕三君
- 榮光を追ふて 細川 重義君
- ゆゑへ 水上 茂君
- 科學と人生と 野中 徹也君
- 偶 感 八田 四郎次君
- 開會の辭 部長 入波 教授
- 太田 耕三君

一、十一月十九日我部は來澤せる東京神學院教頭柏井園氏并に本校出身者なる法學士秋月致氏を招待し至誠堂に於て學術講演會を開けり聽衆堂に滿ち甚だ盛會なりき。演題左の如し

信仰の動機 秋 月 致 君
道德と宗教との關係 柏 井 園 君
一、十一月二十日午後六時より至誠堂に於て北
陸地方諸官公立學校生徒聯合演說會を開けり。
各校選出辯士各得意の雄辯を振ひ甚だ盛會な
りき。演題并に辯士左の如し。
開會の辭 野中 徹也君
農業と國家 農業學校 水野 陳好君
現代思想と宗教 工業學校 加藤 美輝君
世の中 商業學校 竹居助三郎君

戦争か平和か 魚津中學 齋木 忠嗣君
光 小松中學 畑 久 治君
小さき心の誠 高岡中學 藤森 一郎君
眞理に到達する爲の三期 本校 鈴木 豐君
死か生か 第一中學 三津井三郎君
盲目か現代青年 第二中學 上田 誠一君
ノイラスチー 醫學專門 鶴見 元雄君
支那の現状 本校 太田 耕三君
挨 擗 部長 八波、教授
閉會の辭 鈴木 豐君

大正三年度北辰會費收入支出決算書

△印ハ朱書

科 目 區 分	豫 算 額	決 算 額	流 用 増 額	流 用 減 額	残 額
第一款 經常收入	二、四七、〇〇〇	二、四九八、二六〇	—	—	△二六、二六〇
第一項 特別會員寄附	三〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	—	—	—
第二項 通常會員會費	一、八五、〇〇〇	一、八五四、〇〇〇	—	—	△一九、〇〇〇
第三項 入 會 金	二九、〇〇〇	二二七、〇〇〇	—	—	二、〇〇〇
第四項 預 金 利 子	八、〇〇〇	九七、二六〇	—	—	△九、二六〇

第二款 用途指定寄附金	六、九七〇	六、九七〇	—	—	—
第一項 特別會員用途指定寄附金	六〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇	—	—	—
第二項 前年度用途指定寄附金殘餘繰入	一、九七〇	一、九七〇	—	—	—
合 計	二、五三、九七〇	二、五〇六、二三〇	—	—	△二六、二六〇
第一款 經常支出	二、三八、〇〇〇	二、二〇二、六一五	—	—	二五、三八五
第一項 講演部費	五七、〇〇〇	五六、一五〇	—	—	八九五
第二項 語學部費	二二、〇〇〇	七、六三〇	—	—	九、三七〇
第三項 音樂部費	二六、〇〇〇	二九、五五〇	—	—	四、五五〇
第四項 雜誌部費	四〇、〇〇〇	三七三、二二〇	—	—	二、七八〇
第五項 弓術部費	四九、〇〇〇	五三、一〇〇	—	—	—
第六項 劍道部費	一六三、〇〇〇	一六六、三五〇	—	—	二〇
第七項 柔道部費	二四八、〇〇〇	二四九、九一〇	—	—	一九〇
第八項 野球部費	三五七、〇〇〇	三五四、三三〇	—	—	二八〇
第九項 庭球部費	二八七、〇〇〇	二八六、九三〇	—	—	七〇
第十項 遠足部費	九六、〇〇〇	九八、二〇〇	—	—	—
第十一項 漕艇部費	一九五、〇〇〇	二五、〇〇〇	—	—	—
第十二項 春季運動會費	一三、〇〇〇	一三〇、三三〇	—	—	一〇、六八〇
第十三項 秋季運動會費	一四、〇〇〇	一八、七六〇	—	—	—
第十四項 會 務 費	一四、〇〇〇	一〇、三〇〇	—	—	—

第二欸 豫備費	二四、〇〇〇	二、五三、九七〇	七、八四〇	四七、一六〇
第三欸 端艇新造基金	一三〇、〇〇〇	二、四一、四二五		
第四欸 用途指定費	六、九七〇			
第五欸 運動會用具補充費	六、九七〇			
支 出 合 計	二、五三、九七〇	七、八四〇	七、二五五	

寄贈雜誌

一橋會雜誌	每 號	東京高商校一橋會	第六二號	前橋中學校學友會
六 稜	第四四號	北野中學校校友會	第六三號	開城中學校校友會
校友會雜誌	每 號	第一高等學校校友會	第一〇三號	第二高等學校尙志會
學友會誌	第二二號	京都帝國大學學友會	第一六、一七號	錦城中學校同窓會
校友會々誌	第四二、四三號	第六高等學校校友會	第二八號	廣島高師校校友會
六條學報	每 號	佛教大學壬寅會	第五四、五五號	大王寺中學校校友會
學友會報	每 號	神戸高商校學友會	第一七號	金澤商業學校校友會
學友會雜誌	第三二號	第七高等學校學友會	第三一號	京華中學校校友會
十全會雜誌	每 號	金澤醫專校十全會	第九六號	學習院輔仁會
照 星	第二六號	金澤第二中學校照星會	第十週年記念號	名古屋高工校校友會
校友會雜誌	每 號	東京高師校校友會	第二三號	石川縣立工業學校校友會
校友會雜誌	第三二號	京北中學校校友會	第五三號	三重縣立一中校校友會
			第三六號	大阪高商校校友會
			第二二號	彦根中學校校友會

校友會雜誌	第一五號	第八高等學校校友會
桐陰會雜誌	第五八號	東京高師附屬中學同會
學友會雜誌	第八號	有恒學舍學友會
學友會雜誌	第二八號	郡山中學校學友會
修養會雜誌	第二四號	高田中學校修養會
嶺々會雜誌	第一〇七號	福岡縣立中學明善校同會
嶽水會雜誌	第六一號	第三高等學校嶽水會



曩日本誌の投稿を募集するや會員諸君の
玉稿を寄せらるゝもの頗る多く豫定頁數
内には到底收録し能はざるに至り一部は
勢ひ次號に廻さるべからざる事となり
たり然ども會員諸君幸ひに諒せられよ。

雜 誌 部

曩日本誌の投稿を募集するや會員諸君の
玉稿を寄せらるゝもの頗る多く豫定頁數
内には到底收録し能はざるに至り一部は
勢ひ次號に廻さるべからざる事となり
たり然ども會員諸君幸ひに諒せられよ。

雜誌部

投書心得

- 一 投書は本會原稿用紙に限る
- 一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せず
- 一 雜誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 如何なる種類の投稿にても宜しされど或は政治を論じ或は德義に背くものは一切掲載せず

大正四年十二月二十二日印刷
大正四年十二月二十八日發行

(非賣品)

編輯兼發行者

吉村政行

印刷者

生沼倍男

印刷所

明治印刷株式會社

發行所

第四高等學校北辰會

石川縣金澤市早道町五十六番地
同縣同市穴水町二番丁廿九番地
同縣同市高岡町九十番地